

# 令和5年度

## ふじのくにグローバル人材育成事業

# 成果報告書

〈最終版〉



ふじのくにグローバル人材育成基金で  
高校生や教職員の「海外での学び」を応援しています

静岡県教育委員会



## 目次

ふじのくにグローバル人材育成事業概要	1
参加者等一覧	3
教職員の海外研修	
(1) 教職員の海外研修	7
(2) 小学校英語対応海外研修	17
高校生の海外体験促進	
(1) 令和4年度長期留学	35
(2) 短期留学	39
(3) シンガポールでの語学研修等	71
(4) 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）	93
グローバルハイスクール	99
海外インターンシップ	
(1) ジヤトコ株式会社	111
(2) ヤマハ発動機株式会社	133
(3) 株式会社呉竹荘	155
支援企業・団体一覧	177

# ふじのくにグローバル人材育成事業概要

国際化が進む現在において、本県が地域間競争に勝ち抜き、持続的に発展していくためには、社会に変革を起こしていくグローバルリーダーとして未来を創る人材の育成が必要です。

静岡県教育委員会では、2016年4月に「ふじのくにグローバル人材育成基金」を創設し、国際的に活躍しようとする意欲ある高校生やグローバル教育を推進する学校を支援しています。

## 国際感覚豊かな人材の育成

### 海外体験（留学）

高校生が意欲を持って、自ら進んで参加する留学の経費を支援します



### 教職員の海外体験

海外の教育機関等において、指導力や専門性を向上させるための研究に取り組む教職員を支援します

### グローバルハイスクール

特色のある先進的なグローバル教育を展開する指定校を支援します

## ものづくり県の次代を担う人材の育成

### 海外インターンシップ

県内企業の海外事業所等における就労体験事業を支援します



### ものづくり等世界大会

ものづくり等の世界大会に参加する高校生を支援します



# 事業内容

国際的な視野を持ち、地域の発展に貢献できる人材を育成するため、高校生の海外留学や海外インターンシップ、教職員の海外研修等海外体験を推進しています。

○県総合計画及び県教育振興基本計画における目標値（令和4～7年度）

ふじのくにグローバル人材育成基金による海外交流者数：累計1,000人

## 1 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組

区分	概要		応募(人)	参加(人)
海外体験促進	長期留学	海外の教育機関等で語学などの専門分野の留学を体験 【募集】5人程度【期間】1年程度【補助】上限300千円	5	生徒5
	短期留学	企画留学 学校、市町、NPO等の民間が実施する語学研修、ボランティア活動、現地スタディツアー、地域の課題解決につながる探究活動等に参加 【募集】14人程度【期間】1週間以上1か月程度未満【補助】上限300千円	37	生徒16
		県関連事業留学 県及び県教委が主催、共催、後援又は募集している事業（静岡県青少年国際フォーラム）に静岡県代表として参加 【募集】1校4人程度【期間】10/31～11/4【補助】上限100千円	3	生徒3
	大学連携企画留学	ジョージタウン大学英会話プログラム ※大学の施設改修に伴い中止	11	中止
代替企画：シンガポールでの語学研修等 【募集】10人程度【期間】3/17～3/30【補助】上限300千円		11	生徒11 引率2	
教職員の海外研修	本人企画 海外教育機関等で専門分野や現代的な課題の研究等を実施 【期間】7～12月 【募集・旅費支給】 ①1週間以上3週間未満 4人・上限500千円 ②1か月程度 1人・上限1,000千円	11 ①10 ②1	教員5 ①4 ②1	
	県企画 小学校教員を対象として、英会話力向上等のためフィリピン・セブ島にて語学研修を実施 【募集】10人程度【期間】7/30～8/8※旅費・参加費県負担	9	教員9 引率1	
グローバルハイスクール研究指定	学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研修機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定 【指定校】6校 新規：菰山、富士宮東、静岡城北 継続：下田、相良、日大三島 【指定期間】2年程度【補助】上限2,000千円	6校	生徒204 教員等13	
合計			生徒239 教員27、引率3	

## 2 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成

区分	概要	応募(人)	参加(人)
海外インターンシップ	県内企業の海外支社や海外工場における就労体験等を実施 【募集】生徒11人、事務局職員2人程度 ※旅費・参加費県負担 【期間】国内研修2日、海外研修3泊4日程度（7～8月）	48	生徒33 引率6
	県内企業の海外拠点とオンラインでつなぎ実施	—	生徒31 引率11
ものづくり等の世界大会参加	ロボット競技等のものづくりに関する世界大会へ参加 【対象】専門学科等の生徒 【補助】上限300千円（国内開催は100千円）	0	—
合計		生徒64、引率17	

## 3 その他：トビタテ！留学JAPAN「拠点形成支援事業」への採択等

文部科学省が、令和5年度、全国の地域を対象に募集をした官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN『拠点形成支援事業』」に事業計画を応募し、採択されたことを受け、令和6年度から2年間、同省の協力を得ながら、探究を伴う高校生の留学を支援します。

令和5年度は、事業計画の策定や留学希望者の募集等を実施しました。

### 【海外交流等実績】（2018～2023年度）

区分	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
海外交流者数(人)	222	171	82	353	471	350
事業費(千円)	36,636	36,601	4,527	20,355	16,306	35,265

## 参加者等一覧

### 1 教職員の海外研修

#### (1) 教職員の海外研修

5人の教職員それぞれが企画・計画した留学先で、専門分野や現代的な課題の研究等を実施しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
藤枝市立青島北中学校	山内 伊織	オランダ	11月18日～12月8日	7
菊川市立小笠東小学校	竹内 友里子	フィンランド	10月30日～11月24日	9
浜松市立富塚中学校	鈴木 千広	マレーシア	8月7日～8月25日	11
掛川市立第一小学校	中野 亜美	オーストラリア	8月1日～8月8日	13
県立清水特別支援学校	高橋 美佐紀	スウェーデン	8月12日～8月23日	15

#### (2) 小学校英語対応海外研修

小学校教員を対象として、英会話力向上等のためフィリピンでの語学研修を実施し、9人が参加しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
富士市立富士見台小学校	鈴木 篤	フィリピン	7月30日～8月8日	17
富士市立富士川第二小学校	佐藤 靖代	フィリピン	7月30日～8月8日	19
伊豆の国市立韮山小学校	日吉 わか奈	フィリピン	7月30日～8月8日	21
伊豆の国市立大仁北小学校	菅尾 秀美	フィリピン	7月30日～8月8日	23
藤枝市立葉梨西北小学校	深澤 健太	フィリピン	7月30日～8月8日	25
菊川市立内田小学校	横山 真美	フィリピン	7月30日～8月8日	27
吉田町立中央小学校	長谷川 翔太	フィリピン	7月30日～8月8日	29
袋井市立浅羽東小学校	宮本 和輝	フィリピン	7月30日～8月8日	31
島田市立島田第三小学校	阿南 千華	フィリピン	7月30日～8月8日	33

### 2 高校生の海外体験促進

#### (1) 長期留学・短期留学

長期留学（1年程度）に5人、短期留学（1週間～3か月程度）に16人を派遣しました。留学を終えた令和5年度の短期留学者16人と令和4年度の長期留学者2人の報告書を掲載します。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立沼津東高等学校	吉田 恵梨香	ドイツ	R4年3月31日～R5年3月31日	35
静岡県立磐田南高等学校	高橋 湧楽	ドイツ	R4年2月24日～R5年1月21日	37
静岡英和女学院高等学校	中北 恒子	アメリカ合衆国	R5年7月29日～R6年6月1日	-
静岡英和女学院高等学校	原田 華	カナダ	R5年8月27日～R6年7月1日	-
加藤学園暁秀高等学校	オガタ 夏蓮	フランス	R5年9月1日～R6年7月	-
静岡英和女学院高等学校	清水 ほのか	カナダ	R5年8月29日～R6年7月3日	-
静岡県立静岡高等学校	梅村 舞子	カナダ	R5年9月1日～R6年6月26日	-
静岡雙葉高等学校	阿井 帆乃華	カナダ	7月23日～8月6日	39
静岡県立浜松湖南高等学校	荒井 つぐみ	オーストラリア	7月23日～8月13日	41
静岡県立浜松湖南高等学校	岩間 彩希	オーストラリア	7月23日～8月13日	43
静岡県立浜松湖南高等学校	小谷 伍輝	オーストラリア	7月23日～8月13日	45

静岡県立浜松湖南高等学校	鈴木 權斗	オーストラリア	7月23日～8月13日	47
静岡県立浜松湖南高等学校	袴田 樹奈	オーストラリア	7月23日～8月13日	49
静岡県立焼津中央高等学校	畑原 大輝	カナダ	7月23日～7月31日	51
静岡県立浜松工業高等学校	島田 佑海	アメリカ合衆国	7月29日～8月12日	53
静岡県立袋井高等学校	鈴木 翔子	イギリス	7月31日～8月18日	55
静岡県立掛川東高等学校	平松 碧羽	オーストラリア	8月16日～8月24日	57
静岡県立静岡城北高等学校	柴崎 琴乃	アメリカ合衆国	12月2日～12月10日	59
静岡県立静岡城北高等学校	曾我 仁咲	アメリカ合衆国	12月2日～12月10日	61
静岡県立静岡城北高等学校	中村 優奈	アメリカ合衆国	12月2日～12月10日	63
静岡県立静岡城北高等学校	早尻 あや	アメリカ合衆国	12月2日～12月10日	65
静岡県立磐田南高等学校	米倉 杏	インド共和国	12月29日～1月13日	67
静岡県立吉原高等学校	YOSHIDA LIVIA LUNA	フィリピン	3月10日～3月17日	69

## (2) 大学連携企画留学（ジョージタウン大学）

大学の施設改修のため中止となりました。

## (3) シンガポールでの語学研修等

(2)の大学連携企画留学の代替企画として実施しました。11人が参加し、シンガポールで語学研修や探究活動に取り組みました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立富士宮西高等学校	嶋村 朱梨	シンガポール	3月17日～3月30日	71
静岡県立磐田南高等学校	伊藤 菜々花	シンガポール	3月17日～3月30日	73
静岡県立沼津東高等学校	神尾 静香	シンガポール	3月17日～3月30日	75
静岡県立焼津中央高等学校	服部 芽依	シンガポール	3月17日～3月30日	77
常葉大学附属橘高等学校	諸角 木葉	シンガポール	3月17日～3月30日	79
静岡県立静岡高等学校	花田 朝香	シンガポール	3月17日～3月30日	81
静岡雙葉高等学校	白鳥 佑佳	シンガポール	3月17日～3月30日	83
静岡雙葉高等学校	成島 かれん	シンガポール	3月17日～3月30日	85
静岡サレジオ高等学校	秋田 藍	シンガポール	3月17日～3月30日	87
静岡サレジオ高等学校	大津 紀乃	シンガポール	3月17日～3月30日	89
静岡サレジオ高等学校	坂部 夏希	シンガポール	3月17日～3月30日	91

#### (4) 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）

静岡県立吉原高等学校が静岡県の代表として参加し、うち3人を支援しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立吉原高等学校	飯塚 ゆな	韓国	10月31日～11月4日	93
静岡県立吉原高等学校	木下 莉緒	韓国	10月31日～11月4日	95
静岡県立吉原高等学校	前田 理子	韓国	10月31日～11月4日	97

### 3 グローバルハイスクール

学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研究機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定しています。

学校名	期間	掲載ページ
静岡県立下田高等学校	令和4年度～	99
静岡県立相良高等学校	令和4年度～	101
日本大学三島高等学校	令和4年度～	103
静岡県立静岡城北高等学校	令和5年度～	105
静岡県立韮山高等学校	令和5年度～	107
静岡県立富士宮東高等学校	令和5年度～	109

### 4 海外インターンシップ

県内3企業の海外拠点での就業体験等を実施することで県内企業の実力を肌で感じ、将来的に県内企業で活躍する意識を高めました。

#### (1) ジヤトコ株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立吉原工業高等学校	秋山 佳希	タイ	8月20日～8月23日	111
静岡県立富士高等学校	河村 叶子	タイ	8月20日～8月23日	113
静岡県立富士東高等学校	高橋 紀穂	タイ	8月20日～8月23日	115
静岡県立富岳館高等学校	井出 彩葉	タイ	8月20日～8月23日	117
静岡県立磐田南高等学校	山下 翼	タイ	8月20日～8月23日	119
静岡県立天竜高等学校	木下 真歩	タイ	8月20日～8月23日	121
静岡県立浜松城北工業高等学校	鈴木 純	タイ	8月20日～8月23日	123
静岡県立浜松商業高等学校	伊藤 友梨	タイ	8月20日～8月23日	125
沼津市立沼津高等学校	石塚 ことね	タイ	8月20日～8月23日	127
富士市立高等学校	村野 千映花	タイ	8月20日～8月23日	129
静岡雙葉高等学校	花崎 柚葉	タイ	8月20日～8月23日	131

(2) ヤマハ発動機株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立下田高等学校	山之内 那夢	インドネシア	8月21日～8月23日	133
静岡県立御殿場南高等学校	後藤 祐貴	インドネシア	8月21日～8月23日	135
静岡県立静岡城北高等学校	濱松 心咲	インドネシア	8月21日～8月23日	137
静岡県立科学技術高等学校	鳥沢 健斗	インドネシア	8月21日～8月23日	139
静岡県立藤枝北高等学校	栞原 隼人	インドネシア	8月21日～8月23日	141
静岡県立掛川東高等学校	榛葉 多翼	インドネシア	8月21日～8月23日	143
静岡県立袋井高等学校	東 諒磨	インドネシア	8月21日～8月23日	145
静岡県立浜松東高等学校	工藤 諒大	インドネシア	8月21日～8月23日	147
静岡県立浜松工業高等学校	上島 翔大	インドネシア	8月21日～8月23日	149
静岡県立浜松城北工業高等学校	村松 良亮	インドネシア	8月21日～8月23日	151
静岡雙葉高等学校	岩崎 由佳	インドネシア	8月21日～8月23日	153

(3) 呉竹荘

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立沼津商業高等学校	米田 吏玖	インドネシア	8月20日～8月23日	155
静岡県立静岡高等学校	尾原 一華	インドネシア	8月20日～8月23日	157
静岡県立静岡商業高等学校	澤原 莉央	インドネシア	8月20日～8月23日	159
静岡県立藤枝東高等学校	水野 美咲	インドネシア	8月20日～8月23日	161
静岡県立藤枝西高等学校	池上 晴菜	インドネシア	8月20日～8月23日	163
静岡県立島田商業高等学校	今村 栞里	インドネシア	8月20日～8月23日	165
静岡県立榛原高等学校	齋藤 美那	インドネシア	8月20日～8月23日	167
静岡県立磐田南高等学校	渡邊 初希	インドネシア	8月20日～8月23日	169
静岡県立浜松西高等学校	向後 匡爵	インドネシア	8月20日～8月23日	171
静岡県立浜松工業高等学校	久米 柚嘉	インドネシア	8月20日～8月23日	173
静岡県立浜松商業高等学校	市川 彩瑛	インドネシア	8月20日～8月23日	175

# オランダの英語教育と言語習得方法の考察

藤枝市立青島北中学校 教諭 山内 伊織



国名 オランダ王国

令和5年11月18日～12月8日

groove.meは洋楽を用いて、仲間と一緒に歌いながら歌詞にある単語や表現を学ぶ教授法である。楽しく学習することで英語に対する積極性を養い、興味を持たせている。日本の授業でも、英語の曲を使用する実践はあるが、曲を通して英語力を高めていく方法は少ない。また、オランダの英語力は世界でも高く評価されており、小学校卒業時に「CEFR A2 (日常会話が可能) レベル」(日本は中学卒業時にCEFR A2レベル)の達成を目標としている。オランダの達成率が97%に対し、日本は49.2% (R4全国学調) という結果からもオランダの英語教育の質の高さがうかがえる。こうしたことから、自らの指導方法を見直し、オランダの優れた英語教授法とこれまでの授業実践と重ね合わせることで、授業改善を図りたい。

## 訪問先の概要

- Cygus Gymnasium • St. Nicolaaslyceum • Het Amsterdams Lyceum • Hubertus&berkhoff (中等教育)
- Openlucht school • Het Wespennest • Locatieleider Dr. Schaepmanschool (初等教育)

Cygus Gymnasium (中等教育・大学進学: アムステルダム) 英語の授業は全て英語。フランス語の授業は全てフランス語 (イマージョン) 高校3年生の英語・フランス語の能力はオランダトップクラス。

St. Nicolaaslyceum (中等教育・大学進学: アムステルダム) 全教科授業は全て英語。(バイリンガルクラス)

Openlucht school (初等教育: アムステルダム) 英語の授業は50%以上が英語

Hubertus&berkhoff (中等教育・就職: アムステルダム) 職業訓練校 (料理) 全授業の30%を英語で行う。

Het Wespennest (初等教育: アムステルダム) イエナプラン groove.meを導入

Locatieleider Dr. Schaepmanschool (初等教育: バレンドレイト) イエナプラン

## 調査結果

### ① Groove. Meについて (初等教育)

Blinkという英語のサイトを用いて、流行の曲のPVを視聴し、内容に関する問いに答える活動を行う。児童達にとっては興味がある曲であるため、食い入るように動画を見ながら、英語の音や内容を読み取ろうとする姿勢が見られた。聞くことが苦手な児童もいるため、堪能な生徒が教師の代わりに教えたり、全体に質問の意味や答えをオランダ語で伝えたりして、理解を促していた。聞くことや話すことに重点が置かれており、対話を通して答えの確認を行う。完璧な答えを求めることは無く、内容の概要が捉えていたかどうかを確認していた。答えを共有するときには、1人ずつ自分のホワイトボードに答えを書き、上に掲げていた。教師からも児童1人ひとりの理解度がわかるため、効果的な取り組みであった。最後には、動画を見ながら全員で歌う活動で授業が終了した。



ホワイトボードに記入し、答えを共有

### ② 生徒を引きつける魅力的な授業

どの学校の英語の授業でも単元を通したゴールの活動を行う。生徒の関心や興味に合わせた創造性のある課題を毎単元与えることで、生徒は意欲的に活動に取り組む。詩を自作したり、本一冊を読んだ感想をまとめたり、自分の興味のあることをまとめたポスター作りに取り組んだりすることを通して、教室や小集団の前で発表活動を行う。課題に取り組む前にはルーブリック (採点基準) を事前に示し、生徒と共有することで、生徒達が自ら

のゴールを設定し、それに向かって主体的に学習する姿が見られる。

英語以外の授業でも英語の使用の割合が高く、St. Nicolaaslyceumの数学と美術の授業では、全て英語で授業が行われ、教師の問いに英語で即興的に答えたり、生徒同士も英語を使用してコミュニケーションを取ったりしていた。英語のままでの理解が難しいところは、教師がジェスチャーや視覚教材を使いながら生徒の理解を促していた。家庭で英語を用いて日々生活している生徒もいるため、そのような生徒が苦手な子を助け合うピアサポートの関係性も多く見られた。



対話を通して、技法の確認

### ③ オランダ人の生徒の英語学習について

小学校の低学年から学校によっては英語学習が始まる。オランダは移民が多い国であるため、生徒によっては両親が英語話者である可能性もある。小学校の授業でも教師が英語を半分以上使いながら意味のあるやりとりを生徒と行う。書くことに比重を置かず、まずは話すことに重点き、教師と対話したり、生徒同士で会話したりする姿が多く見られた。児童生徒らに「なぜ英語が話せるのか」聞くと「テレビを見ると英語音声でオランダ語字幕の番組が多く見られたり、Youtubeなどを英語で見たりする機会が多くある。また、観光客が多いから1週間に1回は英語を話す機会がある。」と答えてくれた。オランダの地理的、文化的な要因もあり、英語に日頃から触れる機会が日本と格段に違う。また、英語の学ぶ理由を問うと「良い職業に就きたい、観光客と話せるようにしたい、英語が話せればどこでも行ける」など目的意識が明確である生徒が多かった。島国である日本ではこのような気持ちを実感させるのは難しいかもしれないが、オンライン等を使い、生きた英語や本物のやりとりをする機会を設定することで、目的をもたせ、生徒達の意欲を掻き立てたい。

## — 研修を終えて —

### 研修成果の活用・還元

自校での実践や近隣の小学校に出向き、授業で活用することで、groove.meの日本での効果的な活用方法を検証しようと考えている。また、訪問先のオランダの小中学校と自校との継続的な交流を行いながら、相互の学校の様子・生活や文化・住んでいる地域等を伝え合う活動に取り組みたい。今回の研修を通して、指導方法の転換を図るとともに、地区の研修会で伝達し、研修成果を広める活動にも尽力したい。

### 感想

オランダの学校では、どの授業でも教師と生徒の対話、生徒同士の対話、生徒と教材の対話があった。必ず意味のあるやりとりを行いながら、「学ぶために発話する」という理念がオランダの学校に浸透していると感じた。言語を使って、相手に自分の思いや考えを伝え合うことが大切であることを再認識し、言語習得において「意味のある対話」が効果的であると実感した。また、教室の中には様々な背景をもつ生徒が多くおり、同じ単語を発音しても全員同じことはなく、みんな異なる。人と違うことは当たり前であり、違いを受け入れる多様な国民性も見て取れた。訪問した学校では多くの生徒が声をかけてくれ、日本に対する関心や意欲の高さが伺えた。授業規律や授業に取り組む姿勢は、日本の学校教育の誇れる点の1つであると改めて感じたが、授業規律が第一ではなく、育てたい生徒像を明確にした上で、意味のあるやり取りを行いながら今後の授業改善に繋げたい。

## — おわりに —

最後に本研修を実践するに当たり「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体の皆様には、心より感謝申し上げます。今後、さらに発展させた実践をすることで教育活動に生かしていきたいと思えます。

## 子どもの学びを支えるフィンランドの教育



国名 フィンランド  
令和5年10月29日～11月20日

菊川市立小笠東小学校 教諭 竹内友里子

日本の不登校数は年々増加しているが、現在のところ有効な手立ては見つかっていない。フィンランドの「幸福度世界一」という社会的背景は、子どもの自己肯定感向上につながり、不登校対策等のヒントになることが期待できる。フィンランドの教育は、どんな手立てやしくみがあるのか学びたいと考え、本研修にのぞんだ。

### － 訪問先の概要 －

- ①Villa Tapiola (認知症専門高齢福祉施設) ②Vuorenmäen päiväkoti (保育園)
- ③ヘルシンキ大学 ④Saunalahden koulu (サウナラハティ小中一貫校)
- ⑤Playground Vähätupa (子育て支援センター兼放課後児童クラブ)
- ⑥Tapiolan nuorisotila (ユースセンター)
- ⑦Ammattiopisto LIVE (特別支援が必要な子の職業学校)
- ⑧KUOPPANUMMEN KOULUKESKUS (小中一貫校)



①入居者30人。四角い回廊型の構造、アトリウムガーデンなど、認知症の方のニーズに合わせて設計されている。在宅介護が難しくなり、最期をこのVillaで過ごす。②0歳から就学前の子どもが通う幼稚園。0, 1歳児のクラス、2～4歳児のクラス、そして就学時前 (エシコウル) クラスに分かれている。保育園は母親の就労の有無に関わらず入園ができる。③フィンランド最古にして最大の規模を誇り、広い範囲にわたる多くの提供プログラムを有する。現在、約38000人の学生が学位取得を目指して在籍する。④2012年に開校。小学1年生から中学3年生 (1年生～9年生) が在籍。各学年20人前後×3クラス。特別支援クラスは1・2年生等の複合単位である。⑤午前中は保育園に通っていない子ども連れの家族が遊べる場として提供され、午後は学童 (1, 2年生まで) として使われている。目の前にある遊び場は公共の公園のため、誰でも利用できる。現在37名の1, 2年生が学童を利用している。⑥小学3年生以上18歳未満の子供たちが利用できる公共の施設。基本的に14:00～20:30まで施設を利用することができる。⑦中学卒業後、特別支援を必要とする子が通う職業学校。日常の自立を目指す生徒への支援教育から職業に就くための実践的な学びの支援まで幅広く行う。⑧保育園も隣に併設されている小中一貫校。全校児童は1年生から9年生まで約700人で職員は100人ほど。2014年に設立された。公共の施設のため、学校を含め学校の施設は地域の人も使用することができる。

### － 調査結果 －

#### 安心・安全な居場所づくり

保育では、0歳児から保育園に通うことを子どもの権利としている。社会に出て違いを受け入れていくことが大切であるという考えからだ。日本の年長にあたる児童は、小学校へのスムーズな移行ができるように就学時前教育を義務付けられている。小学校低学年には、希望すればだれでも入ることのできる放課後児童クラブがある。保護者の就労の有無は関係ない。3年生以上高校生までは、放課後を過ごすことのできるユースセンター (公的機関) が各市に設置されている。子供たちは家や学校だけでなく、誰かにつながることのできる場所を通して、自分の不安や悩みなどを周りに相談することができる。学校内には、SCやSWなどの専門医の部屋が必ずおかれていて、ここへの出入りは自由になっている。社会全体で子供たちの成長を見守っていくというフィンランドの考え方があちこちで見られた。それらの機関で共通していたことは、学校を中心として、学校の教育目標を同じように公的機関でも提供すること。職員同士が情報を共有したり、実際に学校を訪れて顔見知りになって施設を気軽に利用できるようにしたりしていた。公的施設は子どもの居場所づくりの一つになっている。

## 学びの補償

フィンランドの教育はすべて無償であり、何度でも学び直すことができる。基本的な年数は決まっているが、自分で留年を決めることができるなど、学びに関しての自由度が大きい。

また、「自分がどんな人になりたいか」を常に考えさせている。そのため、小学校の段階から自分の強みを意識させる教育を行う。自分の成長に責任をもつという考え方である。子どもの表れ（出欠席、学校でのよい表れ、よくない表れ等）を、保護者と毎日共有できるWebシステムが構築されている。子どもを育てるのはあくまでも家庭であり学校はその支援を行うものと位置づけられている。

そして、義務教育を卒業した後は、高等学校だけでなく職業学校や専門学校を選択することができる。フィンランドは人材を育成している。そのため、高校や大学など、学校で学ぶことは三分の二であり、残りの三分の一は実習である。また、自分の学びたいことと合わない場合は、先生と相談して柔軟にコースを変えることもできる。

「〇年で卒業」という考え方もないので、子供たちは自分のペースで自分のやりたいことを探しながら安心して学ぶことができる。

このようにして、自分で考え、迷ったり悩んだり疲れたりしたら一度立ち止まることを自らで選択することができることは、生きる力を育てていく子供たちにとってとても重要なことであると考えます。



## — 研修を終えて —

### 研修成果の活用・還元

本研修を通じて学び、見聞したフィンランドの教育事情を、本校の職員に紹介した。また、クラスの子供たちに、日本とフィンランドの小学生の違いについて紹介をした。自分たちと違う部分があるフィンランドの教育をうらやましいと感じたり、おもしろいと興味をもったりする姿が見られた。

また、本年度、菊川市の「学校の未来を考える会」に参加する機会をいただき、「どんな力を子供たちにつけたか、市や県、国がどんなことをすることができるのか」など、フィンランドの研修で学んだことを伝えた。

### 感想

生徒指導提要改定の中で重要だと言われている「発達支持的生徒指導」の根本は安心・安全な学級づくりである。今回フィンランドに研修にいき、フィンランドの国全体で「安心・安全な居場所づくり」を行っていることに大変感銘を受けた。国のしくみだけでなく、各学校において子供たちが主語となって教育がされている。また、「学びの補償」として教育の無償化や学び直しができるなど、自分の生き方を問い直す機会が与えられている。「安心安全な居場所」を通して子供たちは自分の生き方を考え学び、「学びの補償」のおかげで生きる力を獲得することができるのだ。結果として、フィンランドの子供たちは、一人ひとりが将来への希望をもって生きていくことができるのだと実感している。

この研修を通して、私は、子供たちを社会全体で育てていくというフィンランドの考え方を、少しでも日本社会に取り入れていきたい。そして、一人ひとりのよさや成長の違いを社会全体が認めればいき、何度でも挑戦して何度でも学び直すことのすばらしさを伝えていきたい。

## — おわりに —

3週間という長い研修を海外で行うことができ、自分の教育観を広げることができました。このような機会を与えてくださった、ふじのくにグローバル人材育成事業に支援してくださった企業・団体の皆様には、心より感謝申し上げますとともに、本研修で学んだことをこれからの教職員人生の中で生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

## 第二言語としての英語習得を目的とした学習方法

浜松市立富塚中学校 教諭 鈴木 千広



国名 マレーシア  
令和5年8月14日～8月18日

この度、私は「第二言語としての英語習得の学習方法」を研修テーマに設定し、海外研修への参加を志願した。学生時代、私は第二言語習得について研究した。その際、日本語と英語の言語間距離が極めて大きいこと（言語間距離とは、学習者の言語と学習対象の言語の類似点が少ないこと）や文化背景の違い等の様々な理由から、日本人にとって英語を習得することは大きな課題があると痛感した。そこで、他国の生徒がどのような方法で第二言語としての英語を習得しているのかを知りたいと思い、本研修テーマを選定した。

また、私は自校で外国語科主任を担っている。本研修での成果を、日々の授業内で生かしていくと共に、自校の外国語教員に共有し、よりよい外国語教育へ繋げていきたいと考えた。

### 一 訪問先の概要 一

#### SMK Precinct16

2003年6月3日に開校された。訪問校は、プトラジャヤ行政センターエリアにあり、面積は約5.6ヘクタール(約56000㎡)で、日本の学校と比べると大きいことが分かる。そのため、学校が7つのエリアで構成されている。生徒1097名、教員は75名が在籍している。授業時間は、午前7:30から午後2:00頃までであり、早い時間から授業が行われることが、日本の学校と異なる点である。そして毎週水曜日は、課外活動日(リモート授業で行われることもある)であり、この日に限り午後2:00～午後5:00までが授業時間となる。

理系科目、外国語教育に注力し、特に外国語教育では英語のほかにフランス語、アラビア語の専攻がある。フランス語やアラビア語を学習している理由としては、在籍教員の母語が関係しているという。現在マレーシアでは、日本のアニメや漫画が非常に人気であり、訪問校の教員は日本語を学ばせてあげたいとの声も挙がった。

### 一 調査結果 一

#### 特色ある授業(英語)

私は、SMK Precinct16に行き、英語の教員と対談する機会をいただいた。その際、彼女は以下の2つを大切に指導している。

- ①to create a better English speaking environment
- ②to understand why they must learn English

☆①「生徒により良い英語を話す機会を創り出すこと」

1番に教員側が努力すべき点を述べた。実際に私が訪問した学校では、課外活動日にピクニックをしたり、イースターなどのイベントを開催したりすることで文化の違いに気付く機会や、英語を使いたくなる場面を積極的に設けていると話していた。

☆②「生徒自身がなぜ英語を学ぶべきかを理解すること」

現在のマレーシアは多民族国家であり、マレー語に加え英語が公用語として広まっている。そこで彼女は生徒に「English for survivor(生存のための英語)」と伝え、生きていくには必要不可欠であると話をしているという。その上で彼女は、言語の壁を壊し、生徒たちの世界を広げようと、授業内では教科書の活用だけではなく、英語の音楽や映画、YouTubeの動画を多く使用しているという。そうすることで、学習者である生徒自身が、英語を使うイメージや外国での生活のイメージをもつことができるようになったり、実際の場面で使用することができるようになったりしたという。

マレーシアの英語教員が話した①②の点は、教員の意識次第で変えられるものであると感じた。そして、グローバルの今、静岡県内のみならず、全国の外国語科教員が意識する点であると思った。



課外活動での生徒の様子

## 生徒の英語活用場面

右の写真は、理科の授業内での様子である。3人の生徒が単元での学習をまとめたプレゼンテーションを行っているが、スライドの中で使用されている言語、彼らや教員が話している言語全てが英語であった。他にも、美術や数学の授業でも全員が英語で話していた。

どうして英語を活用しているのか尋ねると、様々な国籍の教員が在籍しており、それぞれの教員が話しやすい言語を選択していること、生徒に英語が身近なものであるということを感じさせるためだと答えた。こうした取組は、教員や生徒の英語力が極めて高いため成し得ることだと感じた。



理科の授業にて

## 生徒にとっての英語の価値

高い英語力をもつ生徒に「どうして英語を学んでいるのか」を尋ねた。すると、多くの生徒が多民族国家である以上、英語や他の言語を学ぶことは不可避だと答えた。更に話を聞くと、「小学生の頃、相手の話している言語を知らなかったために友人と喧嘩した経験がある」と教えてくれた。このことから、英語のみならず、多くの言語を学ぶ必要性に気付くことができたと話していた。他の生徒は、「将来はマレーシアだけではなく、世界で活躍し、より豊かな世界を見てみたい」と答えた。実際に彼は、マレー語の他に、英語、フランス語、中国語を流暢に話していた。

こうした経験から、私は生徒自身が英語を学ぶ意義を感じる必要があると感じた。そして教員は、日本だけではなく、より広い視野をもって将来の見通しをもつことができる生徒を育成することが、外国語教育には大切だと感じた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元

本研修を通して学んだことや感じたことを、外国語科主任として自校の外国語科教員に共有することができた。また自分の外国語指導では、生徒に英語に触れる機会を多くしようと心掛けるようにした。例えば、マレーシアでの生活を写真付きで紹介したり、授業内で英語の音楽を流したり、映画を見せたりした。そして、授業内での英語活用は、研修前は5割程度であったが、研修後には8割～9割を目指すことにしている。

今後は、生徒に英語を学ぶ意義を絶えず伝えるとともに、日本内外の文化や言語、出来事に興味関心をもてるように努めていきたいと考えている。また、私の勤務地である浜松市は、ブラジル国籍の方が約1万人、フィリピン国籍の方が約4000人と多くおり、本校生徒の中にも複数名いる現状がある。こうした特色を生かし、実際に彼らと対話するなど「英語を活用せざるを得ない場面」を創っていきたいと思っている。

### 感想

やはり、第二言語としての外国語習得学習には、「英語を使う環境」が必要不可欠であると痛感した。現在の日本では、All Englishでの英語の授業が求められているが、本校では実現できていないという事実がある。これは、学習者である生徒の英語力に合わせた指導を優先していることが1つの理由として挙げられるが、この度の海外研修を通して、私はもう1つの重大な理由があると感じた。それは、指導者である私自身の英語力が不足しているということだ。そのため、教員は生徒に教科書内の文法や英単語を教えるための十分な知識をもつこと、英語力の向上に努めること、更に他の文化や言語に広く興味をもち広く共有することが重要であると強く感じた。

## おわりに －

今回の貴重な研修機会を与えていただいた、マレーシア教育機関の皆様、日系企業の皆様、静岡県教育委員会ふじのくにグローバル人材育成事業にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

# オーストラリアにおけるICT活用の現状



国名 オーストラリア  
令和5年8月1日～8月11日

掛川市立第一小学校 教諭 中野 亜美

学習指導要領では、ここに示される資質・能力の育成を着実に進めるには、ICTを最大限に活用しながら、“個別最適な学び”と“協働的な学び”の一体的な充実を図ることが必要とされている。掛川市立第一小学校では、市の指定研究を受け、「一人一台端末の活用による新たな学び」をテーマに研究に取り組んでいる。これまでの研究では、様々なアプリケーションを活用し、より良い活用方法を模索してきた。

5年前、海外教育視察でオーストラリアの小学校を訪問した。その時既に、児童が一人一台の端末を使用している姿を見た。5年経った今、オーストラリアでのICT活用は、より進んでいるのではないかと、現状を学び、自校の研修に生かしたいと考えた。

## － 訪問先の概要 －

### 小学校・中等学校・日本人学校

Yarra Primary Schoolは、男女共学の州立小学校であり、在籍281人。Prep（小学校入学準備の学年）、1・2年生、3・4年生、5・6年生のクラスに分けられている。一人一台分の端末（Chrome Book）が小学校に保管されており、授業で活用している。

Mordialloc Secondary Collegeは、州立共学の中等学校であり、7～12年生の在籍750人。一人一台端末を持っており、移動教室の際も持ち運ぶ。各家庭で購入するため、端末は生徒によって異なる。

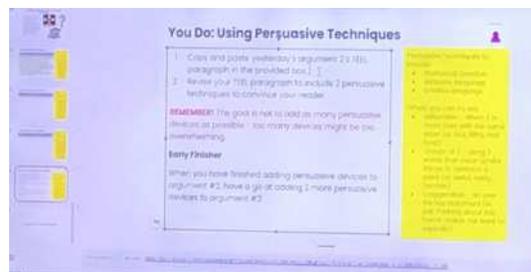
メルボルン日本人学校は、男女共学の日本人学校であり、在籍49人。Prepから6年生までの小学部34人、7～9年生までの中学部15人。一人一台分のパソコンが保管されており、授業や係活動等で活用している。

Murrumbidgee Primary Schoolは、男女共学の小学校であり、在籍544人。一人一台端末（iPad）を持っている。各家庭で購入するが、購入できない家庭には貸し出しをしている。

## － 調査結果 －

### Yarra Primary School

<スライドを用いた授業>・・・教員が、授業の流れをスライドにまとめ、大型画面に映しながら進めていた。説明文について説明をした後、どのような言葉があるか、注意する点等を児童に聞きながらスライドに付け足す。さらにそのスライドをGoogle Classroomで配布し、自分で説明文を作る。児童は、それまでの学習内容を自分の端末で振り返りながら、説明文作りに取り組むことができていた。算数では、スライドに習熟度別の様々な問題を載せていた。



授業で活用していたスライド

<クイズ>・・・Kahootというアプリを用いた、二択・三択のクイズ。

短い隙間時間に個人の端末で取り組み、集計結果が大型画面に映し出されるため、児童は盛り上がっていた。気分転換に行うことも多い。

<レディネステスト>・・・Essential Assessmentというアプリを用いたレディネステスト。単元の始めに個人の端末で行い、教員の端末で集計結果や成績を確認できる。

<共同編集で資料作成>・・・教員がblankを作った状態でスライドやドキュメントを配布することで、資料の作成時間を短縮する。共同編集することで、自分の考えを伝えたり、友達の考えを知ったりできていた。さらに、共同編集した資料を一ヶ所にまとめ、他のグループの資料を端末で見たり、印刷したりしていた。

<活用できそうなアプリ>・・・Show Me (ListeningやReadingの設問に答える。)・Padlet (考えの共有やそれに対する意見交換)・Cap Cut (動画編集)

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元

本研修を通じて学び、見聞したオーストラリアのICT活用や、教育現場の実態を校内研修で報告する。すぐに実践できる活用方法については、自分で試した上で報告し、自校での端末活用の幅を広げたい。アプリや設備については、校内だけでなく、地区の推進委員会や研修等でも積極的に発信したい。

端末活用以外の、オーストラリアの生活や文化については、児童に伝え、異文化理解につなげたい。

### 感想

今回訪問したオーストラリアの学校では、自分が授業で活用しているアプリも多く、ICTについて教員や児童と話す中で、内容を理解できることも多かった。校内研修や自分のこれまでの研修の成果が出ていることと同時に、自分が5年前に驚いたオーストラリアの技術に、追いついてきていることを実感した。しかし、“個別最適な学び”のための手立てが不十分であることも感じた。同じアプリでも、活用の方法はまだまだ試行錯誤できる。今回の学びを日々の実践に生かしたい。

## － おわりに －

今回の研修は、自分の学びたいテーマについて、自分で行き先や研修方法まで決めることができ、非常に充実した、学びの多い研修だった。このような貴重な機会を与えてくださった、ふじのくにグローバル人材育成基金の援助に心から感謝している。また、研修先探しを始め、様々なトラブルの際に多くの方々に支えられて、研修を無事終えることができ、オーストラリアの方々の人柄に心が温まった。これらの感謝の気持ちを今後の自分の教育活動に生かしたいと強く思っている。

## スウェーデンにおけるインクルーシブ教育の現状 —知的障害者の学びのスタイル—



スウェーデン国  
令和5年11月2日～11月20日

県立清水特別支援学校 教諭 高橋 美佐紀

インクルーシブ教育は現在世界中で推進されている動向である。しかし、日本ではインクルーシブ教育の後進国として、国連の障害者権利委員会から昨年9月、障害者と健常者が分かれて学習する特別支援教育の中止を勧告された経緯がある。静岡県では、20年ほど前から普通高校の敷地内に知的障害を主とする特別支援学校の分校を設置する共生・共育が行われており、インクルーシブ教育においては先駆的な自治体であると考えている。そこで、現場で働く我々教員も共生・共育についてさらに理解を深める必要があると考えた。

スウェーデンは教育や福祉の提供が充実していると聞く。インクルーシブ教育の理念や方法が積極的に取り入れられており、障害者が豊かに暮らすためのシステムが充実しているという。その仕組み等を実際に見聞し、本県で推進されている共生・共育の現場で生かせるものを探りたいと考えた。

### — 訪問先の概要 —

ストックホルム市（基礎学校、特別支援高校、高等学校）、ヨーテボリ市（特別支援高校、高等学校）

スウェーデンでは、義務教育段階においては、日本の小中学校にあたる基礎学校、IQ70以下の子供が通える基礎特別支援学校、聴覚障害・重度重複障害のための国立特別学校、先住民のためのサメ学校などがあり、ほとんどの基礎学校と基礎特別支援学校は並置されている。

高等学校の段階になると、大きく分けて普通高校、特別支援高校のいずれかに通うことが多い。普通高校と特別支援高校が並置された学校もある。スウェーデンでは特別支援学校への入学資格がIQなどによって明確に示されており、IQの高い単一障害の身体障害者は基本的に学生時代を通して健常者と同じ学校で学ぶので、今回は知的障害者のインクルーシブな学びの形態について視察した。

ストックホルム市は、人口は98万人ほどのスウェーデンの首都である。ヨーテボリ市は、ストックホルムに次ぐ人口第2の都市であり、人口は59万人ほどである。スウェーデン国内で最も都市化の進んでいる両市において、セーデルマルム基礎学校、ポルヘム特別支援高校（並置）、バーガーデン特別支援高校（単独）、ランダーラ特別支援高校（単独）、タビー高等学校、LBS高等学校の6校を訪問した。

### — 調査結果 —

#### 基礎学校（小中学校）、基礎特別支援学校におけるインクルーシブ教育

セーデルマルム基礎学校は、1年生から9年生まで約800人が在籍、そのうち知的障害のある子供が50人ほど通う、ストックホルム市で2番目に規模の大きい基礎学校である。就学前学校において特別支援の対象だと判断された児童もいるというが、1年生から3年生までは特別支援教育を分けず、全員が同じカリキュラムで学習していた。4年生になると知的障害のある児童は、基礎学校と一緒に学ぶことが難しい教科を、同じ校舎内にある特別支援学校で内容を変更して学ぶ。その後、日本の中学生にあたる7年生から9年生では、特別支援学校での学習を中心にし、得意な教科は基礎学校で学ぶこともできる。



基礎学校の食堂の様子

このように、知的障害のある子供は徐々に基礎学校から分かれて特別支援学校での別カリキュラムの学習に移行していくが、両校が同じ校舎内に設置されていたり、低学年の時から同じカリキュラム、同じ場所で学び育ってきたりしているので、高学年になって学習の場が分かれても一緒に遊んだり、共に食事をとったりと、自然に活動を共にすることが多く、これこそがインクルーシブな姿であると、同校の校長から教わった。

## 特別支援高校

スウェーデンの特別支援高校はナショナルプログラムという一般就労を目指す教育課程と、個人プログラムという個々の障害に応じた職業訓練を受ける教育課程に分かれ、4年間かけて修了する。ナショナルプログラムにおいては、卒業後の就労を目指して「芸術」「木工」「理美容」「社会」「縫製」など、多岐にわたるコースが学校ごとに用意されており、4年間、日々繰り返し学習することで専門的な技術を身に付けられるようになっている。

訪問した特別支援高校3校のうち、ポルヘム特別支援高校は普通高校に並置されておりテストで合格点をとれた教科については、普通高校の授業を受けることも可能である。しかし、実際には普通高校は学習集団の人数も多く、特定の教科の授業にのみ赴いて参加するのはハードルが高いことだという。そこで、特別支援高校において普通高校に準じた学習内容を扱ったり、普通高校の教科書を取り揃え、いつでも使えるようにしたりしていた。いつでも普通高校の学習内容に触れることができる環境を作ることも、インクルーシブ教育の一環であると聞き、場の統合など「型」にとらわれたものだけでなく、柔軟な考えをすることでインクルーシブ教育が実践できることが分かった。

## 普通高等学校における特別支援教育

スウェーデンは移民の多い国家であるがゆえ、語学力不足による学力の低い生徒もいるという。また、軽度の発達障害のある生徒も普通高校に入学する場合がある。各学校には医師や臨床心理士、特別支援教育士などの専門家からなる「健康チーム」の設置が義務化されており、支援が必要な生徒の学習環境を調整したり学習プログラムを作成したりしている。このチームの存在は、スウェーデンにおけるインクルーシブ教育の支えであるという。訪問したLBS高校は、比較的学習偏差値の低い学校であり、発達障害の生徒も在籍しているが、特別支援教育士の適切な助言のもと、必要に応じて全ての生徒に支援を提供できているという。



多様な移民からなるクラス

## — 研修を終えて —

### 研修成果の活用・還元

研修後、全教員を対象にスウェーデンにおけるインクルーシブ教育の考え方について報告した。

また、スウェーデンで見聞きしたことを生徒に報告し、世界中には様々な人がいることを伝える授業を行なった。その上で、多様な世界中の人と仲良くするためにはどうしたらよいかを皆で考えた。今後は、スウェーデンの学校の生徒と本校の生徒で交流する機会を設けたいと、視察先の校長と連絡をとっている。港町「清水」で暮らし学ぶ生徒として、国際的な視野が育つよう、教育活動に盛り込んでいきたい。

### 感想

スウェーデンでのインクルーシブ教育の現場を視察し、それぞれの学校の校長から「インクルーシブとは何か」という話を聞き、インクルーシブ教育とは単なる統合教育でなく、社会そのもののあり方も含め障害者や移民を差別しない「考え方」であると思った。

スウェーデンは、とても寒い国であり、冬場は日照時間も少ない。そのためか、生活も考え方も合理的で役割分担がしっかりしており、日本の文化とは大いに異なっていた。インクルーシブ教育のシステムについては、そのまま日本の教育現場に応用できるとは思えないが、インクルーシブに関する考え方については今後もさらに情報を収集し、整理して深めていきたいと思った。

## — おわりに —

この度は、ずっと視察したいと願っていたスウェーデンで研修をする機会を設けていただき、本当にありがとうございました。自身で計画を立て、現地と連絡を取り合い、視察することで、充実した研修を行うとともに、現地との人脈も広げることができました。今後も静岡県の教員として真摯に教育活動に取り組みたいと思います。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

富士市立富士見台小学校 教諭 鈴木 篤



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### — 研修の実際 —

#### 語学研修について

私がこれまで外国語活動や外国語の学習指導で心掛けていたことは、子供たちが外国の文化に興味をもったり、外国語でコミュニケーションをとることの楽しさに気付いたりすることができるように単元や授業を構想することだった。そして、そのために大切なことは、私自身が積極的に英語を使ってALTとのコミュニケーションを楽しむことだと捉えていた。これまでの授業実践や放課後のALTとの打ち合わせにおいてはもちろん、一社会人としても、もっと英語を話せるようになりたい、もっと英語で思考できるようになりたい、もっと外国の文化を学びたいという思いを強くもっていた。

今夏、語学研修の機会をいただき、HOWDY English Academyの素晴らしい講師による綿密なプログラムにより短期集中で“生きた英語”を学ぶことができた。フィリピンと日本の文化や生活習慣といった話題から、互いのライフスタイルや人生観・職業観、さらには哲学的な問答といった様々な話題まで講師と楽しく意見交換をし、英語で思考し表現することの楽しさを存分に味わい、スキルアップすることができた。

語学研修は、個人レッスン形式で行われた。初日にレベルチェックテストが行われ、研修生一人一人に合ったプログラムと担当講師陣が組まれ、5日間で合計36レッスンを受講した。個人レッスン形式の良いところは、英語力に自信がなくても、周りを気にせずに聞き取れないことを尋ねたり、少ない語彙でも身振り手振りを交えてコミュニケーションをとったりできることだ。研修初日、私は、自分の気持ちを何とか伝えたいという思いで、少ない語彙でも必死になって言葉を重ねていた。時には沈黙することもあった。しかし、講師は、私が伝えたいことを適切な表現に言い直したり、ノートに書き表したりしてアドバイスしてくれた。相手が共感をもって自分の話を聴いている姿は、話し手にとって安心感を与える最大の要素だということを、身をもって感じる事ができた。



研修期間中に学んだことは、宿泊場所や市街地の店舗など研修場所以外で現地の人々と交流するときに、とても役に立った。共に研修に臨んでいる先生方とも、お互いに切磋琢磨したり助け合ったりしながら、研鑽に励んだ。こうして、短期間の語学研修でも、自分の英語力が

確かに向上したことを実感することができた。何よりも、英語でコミュニケーションをとることを楽しみ、積極的になっている自分の姿にとっても驚いた。

この研修期間を通じて、英語でコミュニケーションをとることに自信をもてたことが何よりも大きな成果だと感じている。そして、コミュニケーションに必要なことは傾聴と共感だということを再認識し、教員としての資質能力を高めることができたことと実感している。

## 現地小学校の視察及び交流等について

現地のインターナショナルスクールであるMaria Montessori International Schoolを訪問させていただき、施設や児童生徒の観察だけでなく、訪問先の先生方と教育観や子供観について意見交換をすることができた。特に興味深かったのは生徒指導の考え方で、ダイバーシティとインクルージョンについての見識を深める契機となった。インターナショナルスクールという特性上、児童生徒の母国文化への理解と配慮はもちろん、多様性を大切にしたい生徒指導や学習指導が求められていることがよく分かった。これからの社会に求められる教育において、多様性を重んじること、そして他者を尊重することの大切さは、日本もフィリピンも変わらないのだということを実感した。

また、Maria Montessori International Schoolが幼稚園から高校までの施設一体型の学校ということで、富士市が目指す小中一貫教育の在り方について参考になる点もあった。特に、児童生徒がそれぞれの興味関心に応じて共に取り組むクラブ活動で、異年齢の子供たちが関わり合いながら学校生活を送ることのよさについて見聞きし、小中一貫教育において9年間の学びを意識することがいかに肝心であるかということを確認することができた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

学級の児童に、外国の文化や言葉に肌で触れることのすばらしさについて、写真や実物を交えて伝えた。私が受け持っている児童は、1年生ということもあり、見るもの聞くことすべてに興味関心をもっていた。これからのグローバル社会で活躍する子どもたちにとって、外国の文化や言語を学ぶことのすばらしさ、そして多様性を学ぶ機会を大切にしたいとあらためて実感した。

また、本校には、フィリピンやブラジルなど様々な国にルーツを持つ児童がたくさんいる。そこで、外国にルーツをもつ子どもたちと共に、外国の文化や言語を全校児童に紹介する計画を立て、グローバルウィークとして取り組んだ。フィリピン国籍の児童3人と共に、フィリピンのすてきな場所やおいしい食べ物、そして文化について写真を交えて紹介した。フィリピン国籍の児童が目を輝かせて母国のすばらしさを話していたことはもちろん、全校児童がフィリピンという国に目を向け興味をもつ契機となったことが、とてもよかったと思う。



さらに、これからは富士市の先生方にも、多様性を尊重するグローバルに開かれた社会の中で私たち教員が外国の文化や言葉を学ぶことの意義を伝えていきたい。

## － おわりに －

コロナ禍を経て再開した「ふじのくにグローバル人材基金」の援助により実現した今回の研修は、とても意義深いものとなった。研修の実現に尽力いただいた多くの方々への感謝の気持ちでいっぱい。今回の貴重な学びを、これからの自分自身の財産にしていくことはもちろん、これから出会うたくさんの子供たちに還元していきたい。それが研修に参加させていただいた私の使命であり、取り組んでいきたいことである。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

富士市立富士川第二小学校 教諭 佐藤 靖代



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### － 研修の実際 －

#### 語学研修について

海外研修に参加させていただき、自分自身のレベルアップの必要性や小学校で英語を教えることの大切さを改めて実感した。

今回、自分のspeaking能力では不十分と感じていたため、行くことに決まっていながら正直不安しかなかった。しかし、不安のまま行くのはあまりにも悲しいので、不安を取り除くために、単語をできるだけ獲得しようとした。単語が分からないと話が通じないだろうと思っていたので、高校の頃によく勉強していた参考書を買直し、できるだけ単語を覚えようと努力した。しかし、年齢を重ねれば重ねるほど、記憶力が低下しているということを痛感した。それでも、単語を少し覚えたことで、出発への意欲が高まってきた。

初日は、担当の先生といろいろ話したり、testを行ったりした。（恐ろしく難しかった。）5日間頑張るぞという気持ちになった。マントウマンで自分事として学習をとらえることができたのも大きかった。よくよく考えたら、普段の生活の中でもマントウマンでほぼ一日話していることもないので、とても自分に負荷がかかり、やり遂げなければという気持ちになった。語学の勉強もさることながら、自分としては普段あまり信条をもって生きているわけでもないし、社会の大きな流れを理解しないで流されながら生きている自分を発見したことはとても大きな気づきだった。授業内容は、自分の信条や思想などを英語で言うことや文法が主だったが、学生時代にいかにもグラマーをおろそかにしてきたのかということも痛感した。そのため、帰国後には、子供たちにも普段の生活の中で、世界で起きていること、もちろん国内で起きている時事問題にも目を向け、「自分はどうか考えるか」という自分なりの考えをもち、身の回りに起きていることを自分事としてとらえることができるようになるというねと声掛けをするようになった。次の気付きは、自分の英語で伝える能力が恐ろしく足りないことを痛感した。研修中は、全て英語でのやり取りだったため、teacherの話していることが分からないことがあった。その際、ホワイトボードを使い、なんとか意思疎通はできたが、とてももどかしい気持ちになった。Day by day英語が聞き取れるようになったことは、少し自分の自信につながった。やはり、その環境に身を置くということが、一番手っ取り早い語学力の獲得方法だと感じた。毎日homeworkが出たことも新鮮だった。ホテルに帰ると、毎日翻訳機能で英語に訳したり、文法機能をもう一度学び直したりと、なかなか経験がすることができた。最終日には、自分がこの研修の中で10人の仲間とやり遂げたという満足感でいっぱいだった。

余談だが、日本がいかにも恵まれているかということも痛切に感じた。インフラが整っていないところも多く、天井が吹き抜けになっているところや道路が整備されていないところがたくさんあった。トイレ事情や交通事情も日本とはずいぶん違った。はじめは驚いたこともあったが、フィリピンの人たちは一様にみな明るく、努力家であることが分かり、物質的に豊かなことが幸せではなく、心が豊かであることが本当の幸せなのだと思う。幸せって自分の心が決めるんだなということに改めて気付いた。一方でフィリピンの方は日本への憧れが強く、日本で働きたいという語学学校のteacherがたくさんいた。日々感謝の気持ちをもって、生活をしていこうと心に誓った。

## 現地小学校の視察及び交流等について

- ・現地のモンテッソーリ教育の学校での視察では、教育って世界共通だなと感じた。個別→グループで共有し合う姿はどこの国へ行っても同じだったし、子供たちが問題解決に向けて、一生懸命取り組んでいるということは同じだった。教育は本当に尊いと感じた。私自身、現在、小中一貫校に勤務しており、小中での乗り入れ授業を行っている。現地の学校でも、異学年が校庭なるもので交流しており、異学年が触れ合っている姿を大変ほほえましく感じた。見学後、先生方とお話するチャンスを与えてもらい、いろいろと話すと、これもまた、日本と共通する部分がたくさんあると感じた。生徒指導の問題には非常に共感した。掃除のことも、各国共通だと感じた。自分たちが使用したところは、自分たちできれいにするという習慣を身に付けるということに苦戦しているという話で、コロナもあって掃除に対する考え方が少し変化していることもあるが、やはり日本人の美德である「来たときよりも美しく」の精神は保ち続けたいと感じた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

- ・自分自身が英語が好きでたくさん話せるようになりたいという気持ちと、子供の学びたいという気持ちに温度差があると感じている。子供がどうしたら英語をもっと学びたいという気持ちになるのかと日々悩みながら授業を行っている。また、子供たちにとっても個人差があることが気になっている。根っから英語を学びたくないという子もいる反面、意欲的に取り組む子もいる。私は、今年度他学年の外国語活動や外国語の授業に入っていて、普段廊下で会うと、「Hello!」と声を掛けてくれる子も増えて来てとてもうれしく思っている。「Hello!」と声を掛けてくれる子がいるのは、普段の授業からなるべく英語で話すことを心掛けていて、それが子供たちにも伝わったのかなと思っている。また、ALTと話すときもなるべく英語を使い、英語で話すことを意識するようにしている。やはり、実践することで、自分に身に付いてくると思うので、普段から英語で話すことを意識したい。

## － おわりに －

- ・今回このような機会を与えてくださったことに感謝したい。細かなところまで気を遣ってくださり、快適な学習環境、生活環境の下で10日間を過ごすことができた。(ホテルの朝のビュッフェには随分と救われた。)学生の頃とまた、違った「学ぶ喜び」を実感した。社会人になってからは、なかなか自分から主体的に学ぶという機会は少ないが、そのチャンスを与えてくださったことは本当に貴重な体験だった。せっかくこのようなチャンスを与えてくださったのだから、今後は自分が教えた子供たちが、みんな「英語が好き!」って胸を張ってしてくれるような指導をしていきたい。これからの時代は、きっと英語が話せなければ、国際社会で生きていけないだろう。子供たちがどこの国にいても、対等に自分の考えが言えるように、小学生のうちからトレーニングしていきたい。そして、今回、苦しい中でも仲間がいたから頑張れた。気持ちをシェアしてくれて本当に感謝している。一緒に学んだ仲間へ心からお礼を言いたいと思う。



## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

伊豆の国市立韮山小学校 教諭 日吉 わか奈



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### — 研修の実際 —

#### 語学研修について

##### ・All English lessonの楽しさ

はじめは先生の話す英語を聞き取ることが難しく感じた。分からなくても、分からないことがうまく伝えられず、とりあえず笑顔で分かったふりをしていたように思う。それから毎日レッスンを重ね、少しずつ耳が慣れ、理解することができるようになった。毎時間先生が替わるので、朝は言いたくてもうまく言えなかったことが、繰り返し伝えたり言い方を教わったりすることで、午後には少し伝えられるようになった。さらに、先生方と話していると、よく使う言葉や言い方があることに気付いた。それらを次のレッスンで使おうとしたこと、実際にまねて使ってみたことで話す力が少しずつ身に付いていった。毎日話す、取り組む大切さを身にしみて感じた。

##### ・相手を理解しようとする思いやり

テキストを活用しての学習だったが、自分の語彙が少ないため、理解できない、説明できないことが多かった。テキストの内容理解も大切だが、先生との会話の時間が増えるように予習も大切だと思った。問題をあらかじめ解いておき、分からないことを会話の中で学ぶように努めた。その中で、ある程度聞くことはできても、自分の考えを伝えることは難しかった。しかし、アドバイザーの先生を始め、どの先生も笑顔で、自分のつたない英語を聞いて理解してくれようとしたり、分からないことは易しい英語や例えを交えながら何度も説明してくれたりした。丁寧で優しい先生方に励まされ、最後まで前向きに取り組むことができた。これは、自分の児童に対する対応を見直すきっかけにもなったように思う。自分も子供の声に耳を傾け、笑顔で安心できる対応を心掛けたい。

##### ・自分の考えをもつことの大切さ

日本で生活していると日本のよさは分からないことが多い。わたし自身、深く考えないで生活を送っていたため、今回先生に「日本の祝日で好きな日はいつ?」「日本の有名人ってどんな人がいるの?」「日本とフィリピンの違いや日本のよさは何だと思う?」などと、質問をされたときに困って答えられないことが多かった。普段からアンテナを張り、時事問題に関心をもったり、自分の好きなものや趣味を見つけたりして、自信をもって伝えられるようにしたい。加えて、先生方と話をすることで、フィリピン、セブの文化や日本との違いもたくさん知ることができ、とても勉強になった。

#### 現地小学校の視察及び交流等について

##### ・Maria Montessori International School (MIS) と日本の公立学校との類似点と相違点

モンテッソーリの考えを取り入れた私立の学校と聞き、子供が学びたいことを選択して校内の至るところで少人数の学習が行われていることを想像していた。しかし、見学をしてみると、日本の公立学校と似ているところもいくつかあった。まず、教室が決まっており、1クラス25～30人で授業時間割があり、子供たちは一斉に同じ教科の授業を受けていた。45分の授業時間も同じで、グループ学習を大切にしているという。教室掲示も各担任が頑張って作っていることが分かった。今回は6年生の理科の授業を参観したが、導入で子供の関心を引く内容を取り入れていたところも共通しているように感じた。さらに、一緒に問題を読んだり、拍手をして注目の合図を出したり、授業終始のあいさつをするところや宿題があるところも同じだった。他国の私立学校と似たスタイルで学習する日本の公教育には、よさがあることを実感した。

一方で、学習内容を決める点には違いがあった。この学校には教科コーディネーターが存在し、職員室には個

人ブースが設けられていた。担任との役割がはっきりしている。教科書はなく、コーディネーターが考えたプランを担任が進めていくという。さらに、授業終わりに子供たちに次の内容に進めるかどうかを確認していたことも驚いた。目の前の子供たちに合った教材研究をされており、見習いたいと思う。また、日本では当たり前のノートに書き写す姿はなく、授業は基本スライドで進めてノートは宿題を書き留める時だけ取り出していた。書くことが苦手な子供たちが増えているため、板書をするということについては、量や内容を考えていきたい。

#### ・海外から見た日本人のよさ

先生方との交流の中で印象に残った質問がある。「日本人は試合観戦の後に掃除をしていた。町中にもほぼゴミがない。他人のためにきれいにしているが、どうすればそのような人が育つのか。」と言う。まずは、他国から見てよい印象があり、日本人として誇りに思う。さらに、詳しく話を聞いてみると、ここでは子供たちが校則に違反すると100ポイントから減点されていくという。フィリピンでは、罰せられるからやっつけはいけないという意識が強い。一方で、日本では、普段から自分たちで掃除を行い、使ったところはきれいに「来たときよりも美しく」という文化も根付いている。また、道徳の授業や日常の指導でも、子供たちの心を日々育てている。このような毎日の積み重ねが、海外から見た日本人の素晴らしさに繋がっているのだと感じた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

今回の研修報告を、所属校の教職員に向けて英語で話した。語学学校では英語漬けの5日間だったこと、土曜日の自己研修できれいな海や離島の生活を見られたこと、そしてフィリピンの貧富の差や日本のよさなどについて、緊張したが伝えることができた。

学級の子供たちには、2学期の始めに体験した思い出話をした。子供たちはとても関心をもって話を聞いていた。今後は、国際理解や国を愛する態度を育む教材として活用していきたい。

また、担当している特別支援学級の外国語活動の授業が楽しくなるように、以前よりもALTとの事前打合せを大切にし、授業準備をするようになった。さらに、子供が伝えようとすることを笑顔で聞いたり、「Good job!」や「nice!」などジェスチャーを付けて褒めたりすることを意識して行った。今では子供たちが英語にさらに親しみ、意欲的に活動したり、ALTの質問に返せるようになってきたりしてきている。



授業の様子

## － おわりに －

以前から、英語教育に関心があり、LETS教員の認定を取りました。しかし、自校に英語専科の教員がいたり、特別支援の分掌を担ったりと、外国語や外国語活動に本腰を入れて取り組む環境から離れていました。しかし、今回、自分自身のスキルアップの機会をいただけることを知り、英語学習への意欲が再燃しました。Howdy ENGLISH ACADEMYで学んだ5日間はとても楽しく、安全で安心できる環境で学習する貴重な機会を与えてくださった、ふじのくにグローバル人材育成基金による援助には、感謝の気持ちでいっぱいです。今後も、ここで培った英語力がさらに伸びていくよう今後も自己研鑽を積んでいきます。

また、英語の授業を受けるに当たって、一生懸命話そうとする相手の話は最後まで待つこと、伝わらないときには分かる言葉や例を交えて分かりやすく説明をすること、相手が安心して話すためには急がせずに笑顔で待つことを大切にしたいと身にしみて感じました。自分も子供たちに接するときには、フィリピンの先生を思い浮かべ、これらを心掛けようと思います。さらに、市内視察では生活の様子や文化を知る機会があり、高いビルや大きなショッピングモールがある一方で、スラムで暮らす人やお金を求めて歩く子供も目の当たりにしました。そこで、日本の豊かさや様々な設備、政策が整っていることへのありがたさも痛感しました。これからの自分の生活を見直すと同時に、日本のよさや日本人としての誇りを子供たちに伝えたいと思います。

今回の研修に関わってくださった全ての方々に対し、心から感謝しています。ありがとうございました。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

伊豆の国市立大仁北小学校 教諭 菅尾 秀美

### — 研修の実際 —

#### 語学研修について

語学研修で学んだことは、「うまく伝えられなくても伝えたいという思いが大切」ということだ。5日間でのスキルアップは十分なものではなかったが、たった5日間だからこそ相手に伝える、伝えようとする大切さを実感した。現地の先生方が言っている単語は理解できても、どう返したらいいのかわからなかったり、すぐに単語が出てこなかったり、最初の2日間うまくコミュニケーションがとれず悩むことが多かった。それでもわたしと向き合い、単語が理解できないときには絵を描いて伝えてくれたり、「For example, ~」を使ってわかりやすく説明してくれたことが、自分の中の伝えたいという思いを膨らませていった。言葉が詰まった時には、「It's OK!」、「Fighting!」、そう常に励ましてくださり、言葉が出るまで待ってくれたおかげで、少しずつコミュニケーションがとれるようになっていった。次の日のレッスンで少しでも先生と話せるように単語を調べたり、会話で使える文を考えたりしたことで、感じたことや疑問を素直に質問できるようになっていった。先生と話したいという気持ちの芽生えは、母国語以外を学ぶ不安を払拭するための第一歩だったように思う。

基本的にはテキストを使って授業が進められたが、ただ問題を解くのではなく、トピックに合った会話から会話力を意識したレッスンだった。先生からの質問に、始めは単語で答えていたが、日を重ねるごとに文で答えるように意識していった。文法や時制の間違ひは、その都度先生が直してくださり、正しい文を繰り返し話すことで文法や時制を正しく使うことにも意識が高まっていった。聞きたいことが伝わったり、思いをわかってもらえたりした時の嬉しさは今でも鮮明に思い出すことができる。また、トピックに合った会話から、日本とフィリピンの文化の違いも知ることができた。

研修を受ける前のわたしは、正しい文法で話さなければいけない、正しくないと思えないという思いが強く、話すことに大きな壁を感じていた。読み書きの学習はできて、英語でのコミュニケーション=会話がとても苦手だった。しかし、「伝えたいという思いがあれば、うまく話せなくても大丈夫」と思うことができたのは、フィリピンの人たちのポジティブな性格に触れたからこそだと思う。国によって価値観が大きく違うことや様々な価値観があることを知り、最終日にはもっと学びたいと素直に思うことができた。スキルアップとして英語が話せるようになりたいと思っていたが、いろいろな国の人と話してみたいという思いから、これからも英語を学んでいきたいと思うようになった。

#### 現地小学校の視察及び交流等について

今回視察させて頂いたMaria Montessori International Schoolはインターナショナルスクールであり、様々な国の子供たちが在籍していた。校内には、図書室やコンピューター室などの環境設備も整っていた。幼稚部から高等部までのカリキュラムがしっかりと組まれており、日本人の児童も在籍していた。学習の中心言語は英語で行われ、母国語の学習も行われていた。幼児期より、母国語と英語の二か国語の教育が進められていることに驚いた。実際に参観した5年生の社会科の授業では、赤道や大陸の学習を行っていた。先生が、プロジェクターを使うなど、子供たちが興味関心を持てるよう授業実践している様子は、わたしたち日本人の教員も同じであると感じた。Maria Montessori International Schoolの先生方からは、日本の学校で行う掃除について驚きの声が挙がった。自分たちの使う教室や靴箱など、当たり前に行っている掃除している日本の子供たちだが、フィリピンの子供たちに

---

は習慣化されることがないと言う。その理由として、国の文化の違いを感じているようだった。

フィリピンでは、貧富の差が大きいことが教育的問題になっている。公立の小学校では、現在60名近い児童が1つの教室で学び、その子たちも経済的な理由から毎日通うことができなかつたり、出欠確認等もないため登校しているかも把握されていなかたりするなど、子供たちを取り巻く教育環境は恵まれていない。通うことすらできない子供が何十万人もいると言われている。実際に街中でも、ストリートチルドレンや物乞いをしている親子を見かけ、生きていくために必死人たちを目の当たりにした。

日本では教科書も無償で提供され、小学校から中学校までは義務教育を受けることができる環境は子供たちの教育の保証としてとても恵まれていると感じた。

---

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

子供たちに「伝わる楽しさ」を味わってほしいと、より強く思うようになった。わたしが研修で感じた「伝わらないことの寂しさ」や「言いたいことが言えないもどかしさ」をきくと子供たちは普段の外国語の授業で感じているだろう。だからこそ、子供たちが、「自分が話した英語が伝わって嬉しい！もっと話してみたい！」と思えるような授業をより心掛けるようになった。

研修後は、ALTとの授業の打合せをなるべく英語で行い、授業でも英語を意識的に使うようにしている。上手に話せなくても相手に伝え、伝わる喜びや経験を大切に、子供たちの前でALTと会話をしたり、子供たちがALTと会話をしたりする機会を増やしている。授業では、歌やゲームなど子供たちが楽しみながら英語に親しめる活動を毎時間取り入れたり、pair talkや3 friends talkなど少ない人数での会話を繰り返すことで、子供たちが自信をもって英語を言えるような活動を行ったりしている。今年度担任をしている3年生のUnit7「This is for you.」では、送りたい相手を考えながらカードを作る活動を行った。

自分で色を塗った形のカードを友達に紹介し合ったり、客と店員役に分かれて形カードをプレゼントし合ったりする活動で、子供たちが会話を楽しむ姿が見られた。単元後には、「英語が話せて楽しかった。」「友達に英語が通じて嬉しかった。」と振り返っていた。

これからも、子供たちの「できた！わかった！楽しい！」につながる活動を考え、達成感を感じる授業を大切にしていきたいと思う。



---

## － おわりに －

今回このような機会を与えてくださったふじのくにグローバル人材育成の活動に感謝申し上げます。小学校英語対応海外研修に参加できたことは、わたし自身を変える経験になりました。現地で過ごした10日間で、言語の違いだけでなく文化や考えの違いを肌で感じ、教員としてだけでなく、一人の大人として、母親としても、子供たちや社会についての見方を変えるきっかけになりました。

「海外で学んでみたい」、「今まで学んできた英語を現地で試してみたい」、そんな思いから今回の研修に参加したものの、初日のレベルチェックテストに愕然としました。現地の先生たちとのマンツーマンレッスンでも不安ばかりが膨らみ、今まで学んできたことを生かせないことに悔しさでいっぱいでした。そんな中、常に温かく前向きな言葉で励ましてくださった現地の先生たちのおかげで、英語で会話することの楽しさを味わうことができました。上手に話せなくても、文法が違っていても、先生たちが笑顔で会話してくれることが嬉しく、相手の思いがわかり、相手に思いが通じることで心が満たされていくことを実感しました。そして、頑張ることの大切さを改めて感じました。「頑張ればできる」と思えるようになりました。この経験を生かし、ますますのスキルアップ、そして子供たちに心の充実感を与えられる教員になりたいと思います。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

藤枝市立葉梨西北小学校 教諭 深澤 健太



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### — 研修の実際 —

#### 語学研修について

語学研修は、5日間、毎日8時間のマンツーマンレッスンをを行った。初めは、先生の話す英語が速く、「聞き取れない」、「聞き取れても単語の意味が分からない」「伝えたいのに伝え方が分からない」というもどかしさを感じた。自分の考えをしっかりと伝えられるようになりたい、先生たちと楽しくコミュニケーションを取りたいと強く思い、「5日間、全力で英語を学ぼう」という気持ちでレッスンに取り組んだ。5日間の研修は、新鮮且つ刺激的で頭がパンクするくらい多くの学びがあった。その中でも、特に強く思ったこと、学んだことを2つ紹介する。

まず一つは、英語を学習する上で、単語と文法を知っていることが必要不可欠であるということである。基礎・基本が身に付いていない私は、この5日間を通じて、何度も「What ○○ means?」「For example…?」と尋ね、先生から単語や文法を教えていただいた。分からない単語を教えてもらっても、その説明も英語であるため理解できず、とても悔しい思いをした。単語や文法が分からなければ、相手が本当に伝えたい思いや考えを理解することはできない。さらに、伝えることもできないと思った。日本に帰ってからも継続的に単語や文法の学習を行い、外国語の授業やALTとの会話などで英語を活用していきたいと強く思った。



ワンツーマンレッスンの様子

もう一つは、伝えたいことをいかに自分が知っている単語や文法に置き換えて話すかということである。これができれば、ある程度の自分の思いや考えは伝えることができるということを身をもって感じた。研修1日目は、言いたいことを直訳して「なんと言えどいかな」と考えるため、単語が分からずに固まってしまうことがあった。しかし、日本の小学校で1年生に説明するように、より簡単な言葉に置き換えて言おうと意識することで、意思疎通ができるようになった。例えば、「一生」と伝えたい時に、「一生」という単語が分からなくても、「死ぬまでずっと（Until die）」と自分が知っている言葉に置き換えて伝えることができた。言葉を置き換えてみた英語で先生に思いが伝わった時は、本当に嬉しかった。これから、もっと自分が思うように伝えられるようになりたいと思った。

また、これらの二つは、日本の自分の学級や授業においても大切なことだと感じた。どの教科を学ぶにも、子供たちがその教科の基礎・基本を身に付けていなければ、それを活用してさらに難解な課題を解決していくことは難しいだろう。自分の伝えたいことが伝わらなければ、いかに分かりやすく言葉を選び表現するのかを考えていくことで、コミュニケーション能力を高めることができると思った。これからの外国語の授業でも、子供たちの中で分からない単語があっても、自分たちが知っている言葉で伝えることができるよう、みんなで話し合いながら解決していく授業をしたいと思った。そして、子供たちが英語を通じて会話することの嬉しさや楽しさを感じられるように、今後も教師の英語力向上や授業の改善に努めていきたい。

## 現地小学校の視察及び交流等について

現地で訪問したのは、マリアモンテッソーリインターナショナルスクールというセブ島の私立学校である。「日本の学校と、どのような類似点や相違点があるのか」「日本の学校でも生かせることはあるのか」という視点をもって訪問した。これらの視察や交流を通して、主に二つのことを考えた。

まず一つは、様々な児童に対して実態に合った手立てを考えることの大切さである。クラスには、様々な児童がいる。今回参観させていただいたクラスでは、フィリピン、韓国、中国、ヨーロッパなど、児童の国籍は異なっていた。そして考え方や学び方の違いから、授業を進行するにあたっての困難さを感じた。その際、先生は、45分の授業の中に、復習クイズ、世界地図の視写、教科書の問題などいろいろな活動をリズムよく切り替えて進めていた。子供たちは、活動が短い時間で切り替わるため、集中して取り組んでいた。

もう一つは、子供たちが自分で決め、判断し、行動することは、主体性を引き出すのに欠かせないことであるということである。セブ島の学校は、児童の自由度が高かった。授業中にトイレに行く、リンゴジュースを飲むなど自分で決めて行動していることが印象的だった。世界地図の視写をやる際も、自分の机でやるのか、床でやるのかという「場所」や、誰とやるのかという「仲間」を自分で決めて行動していた。そうすることで児童は、自分で選んだ環境で学習できるため、楽しそうに生き生きと活動をしていた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

今回の研修で学んだことやフィリピンの文化などについて全教職員や3～6年生の子供たち、ALTに世界地図、実際の写真などを使って紹介した。子供たちの感想からは、「知っている英語で何とか会話したいと思った。」「自分が飼っている犬は可愛いけれど、フィリピンの野犬は怖い。文化の違いを知った。」「日本で考えられないことがフィリピンでは普通であることに驚いた。色々なことに感謝しながら生活したいと思った。」など、外国語の学び方を知ったり、異文化について自分事として感じたりしている様子が見られた。

今回の研修で学んだ英語力やフィリピンの文化などをこれからの外国語の授業やALTとのコミュニケーションで生かしていきたい。



3、4年生に紹介している様子

## － おわりに －

今回の研修を通してこれからやっていきたいことが二つある。

まず一つは、教員である自分自身が単語や文法を習得し理解を深めたい。教員のクラスルームイングリッシュが増えれば子供たちがたくさんの英語のシャワーを浴びることができ、英語をインプットすることに繋がる。また、ALTとの打ち合わせで授業のねらいやALTの出番、手立てなど、英語を使ってより具体的に意思疎通できれば、より付けたい資質や能力を身に付けることに繋がると思う。

もう一つは、子供たちが決め、判断し、行動できる場を増やしていきたい。そうすることで、自分たちで決めたり、考えたりすることの楽しさや自分たちでやり遂げた達成感を味わうことができると思う。

今回このような学びができ、英語力や外国語の授業力を向上していきたいと思えたのも、ふじのくにグローバル人材派遣事業の小学校英語対応研修に参加できたからであり、心より感謝している。また、9人の仲間と一緒に学ぶことができたことが何よりも心の支えとなった。英語のみの環境は、私に挫折体験を多くもたらししたが、仲間と共感し合ったり、励まし合ったりして楽しく充実した研修となった。これからも静岡県の子供たちの成長の一助になれるように研修に励んでいきたい。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

菊川市立内田小学校 教諭 横山 真美



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### — 研修の実際 —

#### 語学研修について

小学校英語対応海外研修に参加させていただき、私自身の英語力の向上や外国語指導力、異文化理解など多くのことを学ぶことができた。

本研修では、「Howdy English Academy」で、英語力向上のために1日8時間、現地英語講師とのマンツーマン授業に5日間取り組んだ。この授業は、英文読解とリスニングを中心に、全てが英語を使用した授業だった。

レッスン初日は、英語講師の方が話していることを全く理解できず、苦しい思いで授業に臨んだ。初日の段階で、自分自身の英語力の無さを痛感した。中でも、ネイティブ英語に対する「聞く力」でつまづいた。英語講師の話すスピードについていけず、聞き取ることができなかつた。その状況を見た英語講師が、私が理解できるようにと配慮してくださり、話す速さを遅くして何度も話してくださったことで少しずつ聞き取ることができるようになった。しかし、新たな問題として、問いに対して答えようとしても自分自身の語彙力の無さから、自分の考えや思いを十分に伝えることができない壁にぶつかった。自分が知っている言葉を駆使し、何とか伝えようと何度も説明をしてもうまく伝わらない。そんな状況にもどかしい気持ちでいっぱいだったが、英語講師は私が言いたいことを理解しようと、耳を傾け聞いてくださった。最初は、自信の無さやうまくコミュニケーションをとれないことから、伝えることを躊躇してしまいがちであったが、英語講師のやさしさに触れることで、伝えたい話したい気持ちが増していった。日にちを重ねるにつれて、コミュニケーションをとる際に、身振りや手振りを使ったり、イラストを用いたりして伝えるコツをつかんできた。正しい文法で英語を話さなくてはいけないと思っていたが、ちょっとした工夫で伝わることを学んだ。この研修の良さは、マンツーマン指導であったため、困った時や間違えた時には、その都度すぐに教えてくださったり、些細なことでも質問を受け付けてくださったりと、私のレベルに合わせて授業を進めてくださったため、英語でのコミュニケーションにも慣れて、前向きに授業に臨めるようになった。

また、講師の方が授業の中で、フィリピンと日本の文化の違いやおすすめの食べ物やお土産、フィリピンの生活の様子についても教えてくださった。中でも、フィリピンには大きな貧富の差があることは衝撃を受けた。現に、私に英語を教えてくださる講師の方も、テキストを購入できず十分に揃えることができなかつたり、生活の中で私が当たり前と思うこともままならない生活をしていたりしていた。日本で生活し、旅行で訪れるだけでは分からないことも深く知ることができたのも、この研修に参加する意義がおおいにある。そして、改めて日本の豊かさや恵まれた環境について再認識することができた。

この5日間の研修を通して、自信をもって英語で会話できるとは言い切れないが、英語で会話する楽しさや異文化に触れることができた。英語に対して苦手意識をもっていた私も、マンツーマン指導で今後も学び続けたいと思うまでになった。そして、間違ってもいいから積極的にコミュニケーションをとっていこう前向きになれた。それは、私を指導してくださった英語講師が、親身になって指導してくださったからである。私は小学校の教員である。今回の授業を受けた経験の中で気付いたことを指導に生かしていきたい。また、フィリピンの文化も子供たちに伝えていきたい。

## 現地小学校の視察及び交流等について

Maria Montessori International Schoolに見学に行った。様々な国の子供たちが、幼稚園から高校まで同じ敷地内で学習している。インターナショナルスクールということで、学校の環境も整っており、ICTを使用した授業や、グループワークをしている授業、実験をしている授業など日本の教育と似ている部分も多くあった。フィリピンの母国語は、タガログ語やビサヤ語など島によって異なる。しかし、フィリピンの人たちのほとんどが、英語を話すことができる。それは、英語で行う授業が多いからである。彼らの共通言語は英語である。授業で使用するテキストも全て英語で書かれている。幼い時から英語を聞き、書き、話すことで、英語が身に付いていくのだと感じた。また、先生方との交流では、フィリピンの学校でも生徒指導の方法に悩んでいたり、特別な支援を要する子への配慮があったりするなど共感できることも多くあった。

今回現地の地元の学校を見学することは出来なかったが、少し話を伺い、現状を知ることができた。地元の学校の実情は、1クラス60人で19クラスほどあり、教室が子供で溢れている。十分に教育を受けることが出来ない子もいるのが現況である。日本の教育環境はとても恵まれているのだと改めて感じた。

日本でもこのような授業形態にすることは難しいが、英語の絵本の読み聞かせや、海外のアニメや映画など英語に触れ合う機会をもっと増やしていきたいと感じた。

## — 研修を終えて —

### 研修成果の活用・還元について

本校職員に研修の内容や現地の町の様子、研修を通して感じたことを伝えた。私は、英語のスキルの伝達は出来なかったが、文化の違いやフィリピンの教育について知る機会となったのではないと思う。

また、学級の児童に、研修で感じたことや見たことを、写真を交えながら伝えた。小学校1年生にとって外国の様子はなかなか知る機会がなく、大変前向きに話を聞く姿があった。本学級にも、外国籍の児童がいるため、一緒に話をしながら、児童達から、外国語の授業が楽しみなどの声が上がった。小さなきっかけに過ぎないが、児童にとって興味をもつ機会になったと感じた。

今後も児童に、外国の文化に触れる機会を与えるなど、校内に還元できるよう、学び続けていきたい。そして進んで、私が英語を話す姿を子供たちに示すことで手本となれるようにしていきたい。



## — おわりに —

今回この研修に参加させていただき、すべてが貴重な経験となった。自信をもって英語力が向上したとは言えないが、自分にとって、英語でマンツーマン授業を受けたことも、海外の学校を見させていただいたこともすべてが初めてのことで、財産となった。授業で学んだことを、ホテルやショッピングモールで、すぐに実践し生かすことが出来たのも今回の研修だからこそこの経験で、海外の方とコミュニケーションをする楽しさを味わうことにも。

一緒に研修をした先生方に支えていただいたおかげで、安心して活動することができた。今後もこの研修を通して得た多くのことを、子供たちのために、また職場の先生方の力に少しでもなるように努力していきたい。

現地の講師の方、一緒に参加した先生方、今回の研修に関わってくださった方々、本当にありがとうございました。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

吉田町立中央小学校 教諭 長谷川 翔太



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### － 研修の実際 －

#### 語学研修について

本研修では、フィリピンHowdy English Academyにおいてのマンツーマンレッスンや現地施設見学を通して、英語指導力の向上並びに多様性の理解を深めることができた。

#### (1) マンツーマンレッスン

マンツーマンレッスンでは、現地の講師の方と共に、英文の読解、英文法や英語を用いた自己表現等、英語指導に必要なことを学ぶことができた。

レッスンが全て英語で行われるため、最初は何をするのかも分からず、「Could you say that again?」や「Please speak a little more slowly?」などと何度も聞き返し、何度も説明を聞いた。講師の方が表現を変えたり、ジェスチャーを交えたりしながら一生懸命伝えてくれていることを実感でき、英語に限らずコミュニケーションにおける「伝えたい」という想いの大切さを改めて感じる事ができた。

最初は、自分自身の英語力に不安を感じていたが、何度もレッスンを受けることで、相手が伝えようとしていることが理解できたり、自分の想いを伝えることができたりするようになった。自分の英語力の向上を実感すると、「英語を使いたい。」「英語でコミュニケーションをとりたい。」という想いが芽生え、自分から発信する機会が増えたり、言われたことに対して反応し、質問をしたりすることができるようになった。その際に、講師の方が、英語を使おうとする態度を認めてくれたり、受け入れた上でよりよい表現を提案してくれたり、学ぶ意欲が高まる価値付けを行っていたことが印象的であり、言語を教える立場として重要なことに改めて気付くことができた。

#### (2) プレゼンテーション

レッスン最終日には「自らの学びと感謝」というテーマで、英語を用いたプレゼンテーションを行った。学びの集大成であったが、自分でも驚くほどに伝えたいことを英語で表現することができるようになっていた。どう表現したらより伝わるか考えることもでき、自らの学びを実感することができた。「読む」「書く」だけでなく、実際に「使う（話す）」場が設定されていたことで、英語で伝えるおもしろさや喜びを感じることができ、充実感をもって、Howdy English Academyでの研修を終えることができた。

他の参加者のプレゼンテーションも聞いたが、その人なりの工夫や個性を發揮しており、内容が似ていても感じ方が大きく異なることに気付いた。改めて、英語は「学習材」でなく、「言語」であり「コミュニケーションツール」であることを実感し、今後自分が使う際にも、発音するのではなく、感情をこめたりジェスチャーを使ったりと、相手に伝わる工夫をする必要があると考えた。

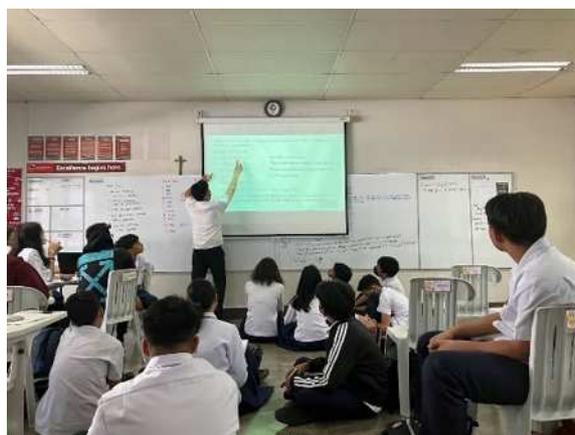
#### (3) まとめ

マンツーマンレッスンやプレゼンテーションを通して、英語の「読む」「書く」「話す」「聞く」能力の向上を測ることができた。語学学校での受講を一つのきっかけにして、今後も英語について学び続けたいと感じた。

## 現地小学校の視察及び交流等について

現地では、インターナショナルスクールの見学を行った。小学生～中学生年代の子どもたちが在籍しており、国籍も様々であったが子どもの個性を尊重した教育を行っていると感じた。中学生年代の数学の授業を参観したが、従来の教師主導の授業ではなく、子どもの主体性を引き出すような授業であった。どこで学ぶか（机、広いスペース）、誰と学ぶか（個人、グループ）などが子どもに委ねられており、子どもがのびのびと学びに向かっていると感じた。教師はそれぞれの進捗状況を確認しながら、個々に声かけをしたり、授業の中で重要となるキーワードや子供から出た価値のある考えについては全体に広めたりするなど、出番を精選して、子供たちが主体となる授業を意識している印象を受けた。

授業後のディスカッションでは、授業のことだけでなく日本とフィリピンの文化の違いにまで話が及んだ。現地の教師の悩みとして「ごみをごみ箱に入れる習慣がなく、教室が散らかってしまう。」ということが挙げられたが、日本では幼い頃から家庭や学校で教えられ習慣づけられてきたことであり、日本の文化のよさを感じた一方、自分が指導する立場であったならば、どのように指導するか考えさせられる悩みでもあった。



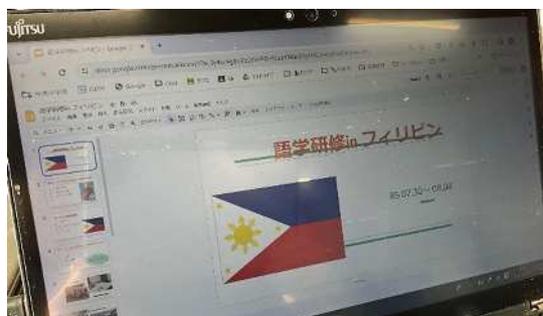
現地校の授業の様子

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

所属校は、外国籍児童が多数在籍しており、言葉の違いにより意思疎通が難しい場面がある。本研修で向上した英語力を生かし、外国籍児童とも積極的にコミュニケーションを図り、誰もが個性を發揮し、のびのびと活動できる教育を目指したい。

外国語の授業を行う際には、「4技能5領域」を意識することはもちろんのこと、児童が英語を使う機会が数多くある授業を行いたい。そのために、魅力的な単元のゴール設定をしたり、英語の魅力や異文化理解の大切さについても児童が実感できたりする授業を行いたい。



異文化紹介のプレゼンテーション

## － おわりに －

以前から英語や異文化に興味はあったが、今回の研修のような学ぶ機会がほとんどなかったため、ふじのくにグローバル人材育成基金による援助をしていただき、このような機会を与えていただいたことにとても感謝している。

社会や教育が大きく変化する中、義務教育段階における外国語教育の重要性も一層増しているように感じる。子供たちも多様化する中、海外にルーツをもつ子供への教育が求められる。また、日本で学んだ子供が、将来海外で活躍するために必要な力の基礎も付けていく必要がある。ICTが普及する中、翻訳アプリケーションなど便利な機能も活用されているが、人と人が面と向かって直接コミュニケーションをとり、よりよい関係を築いたり意思を伝えたりしていくことは、今後も変わらず必要なことである。今後も自分自身が言語や文化について学び続け、子供たちにとって実りのある教育を行えるようにしていきたい。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

袋井市立浅羽東小学校 教諭 宮本 和輝



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### － 研修の実際 －

#### 語学研修について

##### ○研修の方法

初日の午前中にreading、writing、listening、speakingのテストが行われ、同日の午後から研修が始まった。校舎内に隣と仕切りがされている自分用の席が用意されており、研修期間の間、その場所で1対1で学習が行われる。授業時間は50分×8レッスンで、1人1人に担当の先生がついており、最初と終わりの時間はその担当の先生のレッスンだが、それ以外の時間は毎回先生が入れ替わって行われた。研修は英語ドリルを使い、先生と一緒にオールイングリッシュで進めた。

##### ○語学研修を通して

初日のテストが私にとってはとても難しく、記述やリスニングの問題はほとんど解くことができなかった。今後の研修についていけるかどうか大きな不安を抱えたままスタートした。始めは先生の問いかけに対して、英語でなんとと言ってよいのか分からずに返答するのに時間がかかってしまった。また、その返答も途切れ途切れの単語やジェスチャーが多かったが、先生方はどんなに時間がかかっても話し切るまで待ち、話し終わると“Great”や“Good”など、励ましの言葉をかけてくれるので安心しながら受講することができた。レッスンを受けて行く中で、最後まで話しきることは、文法や言い回しを学ぶうえでとても大切だと感じた。私はこれまでは、相手に意図が伝わればよいと考えていたため、単語をつなげてコミュニケーションをとることが多かった。しかし、最後まで話し切るためには、完了形の使い方や前置詞なども正しく使われているかについても考えなければいけない。これまで避けていた自分の苦手としているところを考えることができたので、今後の英語の勉強にも生かしていきたいと思った。また、英語を苦手としている児童がいた場合、励ましの言葉をかけることがとても大切だということを、身をもって学んだ。

今回の語学研修で私が一番大切だと感じたことは「英語で話すことにチャレンジすること」である。レッスン全体がオールイングリッシュで進められていくため、分からないことが多かったが、そのことも質問出来ずにいた。日を重ねる毎に少しずつ英語にも慣れ、こちらから質問できるようになると、話すことが少しずつ楽しくなっていた。そこから信頼関係も強くなっていき、レッスンの合間にはプライベートのことに話することもできた。英語を話すことへの抵抗感は、全レッスン後にはなくなっていた。英語に対しての苦手意識を払拭できたので、この研修はとても有意義なものとなった。この経験を子供たちにも伝えていきたいと思う。

#### 現地小学校の視察及び交流等について

Maria Montessori International Schoolに視察に行った。校舎の作りや教科の種類など、多くの場所で日本との違いが見つかった。その中でも特に気になったことが3つある。

##### ①男女や国による差が無い。

インターナショナルスクールなので、多くの国籍の子供が同じクラスで授業を受けていた。服装や鞄などそれぞれ決まった物はなく、自分たちが使いたい物を使っており自由さを感じた。普段から一緒に生活をしているので、互いの文化を認められる風潮ができています。違う文化を知ることは自分の価値観を広げるためにとてもよい経験であると視察校の先生も述べていた。私の住んでいる地域では、毎年、外国籍の子が増えているが、日本人

とうまく関わることが出来ていない場面がある。そういった場面を少しでも減らすために、小学校でもお互いの文化について知る機会を作ってみたいと思った。

② “objectives” が示されていた。

視察では、6年生の授業を参観した。そのとき、授業の始めに“objectives”という、日本でいう「めあて」が設定されていた。授業時に何を考えさせるのか目的を持たせることは日本との共通点であり、国境を越えても有効な教育方法なのだった。めあてが設定されていることで、授業で何を学ぶかが明確になり、子供たちの思考もスムーズになる。これからも続けていきたいと思う。

③生徒指導の方法

フィリピンでは、決まりやルールを守るための指導の方法として、ポイント制が使われていることを知った。生徒1人1人にあらかじめ持ち点があり、善い活動を行うとそのポイントが増え、決まりやルールを破ったり、授業態度が悪かったりするとそのポイントが減る。減ったポイントに応じて、掃除やゴミ拾いといった罰がある。それを聞いて、日本にはない面白い取り組みだと思った。自分が行った行動によって、その事が不利益として自分に返ってくる。自分の生活を反省することができるようになるが、損得勘定で考えるようにならないのか疑問をもった。

インターナショナルスクールなので、とても自由に生活していると感じた。視察校のように、自国とは違う文化を認められるように、日本でできる取り組みを考えていきたい。

## — 研修を終えて —

### 研修成果の活用・還元について

まずは、研修で自分が体験したフィリピンと日本の文化の違いの面白さを子供たちに伝えたいと思い、全クラスで外国語の授業を行った。ロイノートに資料を作成し、意欲的に話が聞けるようにクイズや写真、動画を交えながら伝えた。水が貴重であることや日本で売っている物の値段が倍以上高くなっていることを知り、驚いている子が多かった。授業後には「私もフィリピンに行ってみたい。」という子もいた。小学生だと海外の文化について知る機会はとても少ない。これを期に少しでも海外に興味をもち、英語を頑張ろうという子が増えてくれる事を望む。

また、自分の授業ではできる限りオールイングリッシュで授業をすることを心掛けている。外国語の授業で日本語を使ってしまうと、どうしても日本語に頼ってしまう。そこで、教師が稚拙でも英語で話す姿勢を見せることで子供たちもまねをし、英語理解にもつながると考えた。これからもこの姿勢で授業を行っていく。



## — おわりに —

フィリピン出身のALTと日本にはどうして英語を話せる人が少ないのか話をしてみると、英語を学んでも使う機会が少ないからだと言っていた。その考えに共感するところがあり、研修から帰ってからは、日常の中の数分だけでも英語を聞く時間を取ったり、ALTに自分から話しかけてみたりしている。今回の研修で英語の面白さに気付くことができた。また、日本とは異なる国の文化を知り、子供たちにもっと海外に目を向けて欲しいと思った。この気持ちを大切にしてこれからも授業を行っていききたいと思う。

最後にこのような大変貴重な経験をするために援助や準備をしてくださった方々、ありがとうございました。これからもこの経験を生かし、さらなる教育の充実を目指していききたいと思います。

## 小学校英語対応海外研修（英語による会話力向上及び異文化と共生教育への理解）

島田市立島田第三小学校 教諭 阿南 千華



国名 フィリピン共和国  
令和5年7月30日～8月8日

### － 研修の実際 －

#### 語学研修について

今回の語学研修では、自分の英語コミュニケーション能力を磨くにあたり、個人レッスンであったことが大きかったと感じた。今まで語学学校という場で研修を受けたことがなく、受ける前は若干緊張していたが、自分の能力を冷静に見極める貴重な機会となった。

研修の中で私が最も印象に残ったのは、どの先生も常に「What do you think ?」「How about you ?」と問いかけてきたことである。自分の考えを整理して伝えることを求められることが多く、これは日本の学校における授業ではあまりないことではないかと思う。

このような場面で先生と一対一だと、じっくり考えるわけにもいかず、「ここまではこうだと思う。でも詳しくはわからない。」と自分がどこまで考えてどのような状況なのかを伝える必要がある。日本では笑ってなんとなくその場をやり過ごせることも、他の国では何か言わなくてはならないという状況で、ここに生きたコミュニケーションが生まれるのだ、と実感した。「なんとなく」や「まあまあ」という曖昧な気持ちを雰囲気だけで伝えようとすることが多い日本でも、はっきりと自分の気持ちを言葉で相手がわかるように伝える能力が必要である。自分の授業の中でも、児童に自分のことをたくさん話す機会を設けたいと思った。

もともと英会話にはある程度の自信があったが、5日間の研修で自分のコミュニケーション能力が向上した実感があり、中でも最も向上としたと感じるのは、対応力である。耳から入った英語を日本語に訳して理解するのではなく、英語のまま受け止め、英語で自分の意見を伝える、という即興的な対応力だ。それは、やはり一対一の研修でずっと英語で話していたことが大きい。とにかく伝えるために自分の知っている英語をつなぎ合わせて何とか伝える、という力が鍛えられた。



#### 現地小学校の視察及び交流等について

今回視察させていただいた小学校は、インターナショナルスクールであるため、学校としての基本的な設備はそろっていると感じた。校内の掲示物は、日本の小中学校と同様に担任が児童の実情に合わせて手作りしている様子が見られ、私たちと同じ気持ちで児童の教育を支えているとわかった。

職員との意見交換の中では、日本の掃除や給食のシステムに興味をもっていることが印象に残った。日本では小学校1年生から校内の掃除を行うこと、自分たちが配膳することを伝えると非常に驚いた様子であった。私が、「使った場所は使う前よりもきれいにする、という意識が根付いている」と話すと、フィリピンにはない考え方なのでうらやましい、と言っていた。

また、授業の中では、児童生徒が積極的に教師へ質問する様子が見られ、課題に対して熱心に取り組んでいたことに驚いた。国内だけでなく、世界に出て活躍できる人を育てる、という意図をもった教育が行われており、どの教科でも「あなただったらどうする」という問いかけがされていた。自分の考えが持てる、相手にわかるように伝えることができる、という能力が重要視されていると感じた。

## － 研修を終えて －

### 研修成果の活用・還元について

英語力の向上を受けて、外国語の授業におけるクラスルームイングリッシュに自信をもつことができたため、授業中に英語で指示を出すことが増えた。児童の発表に対する反応もバリエーションが増え、自然な英語で返すことができるようになった。ALTとのコミュニケーションもより円滑になり、授業前後に英語で話をしながら単元指導計画を練っている。お互いの考えを伝え合い、児童の実情も考慮して意見交換をしながら共に授業を作り上げている、という実感がある。

さらに、国際交流活動に積極的に取り組みたいと考え、マレーシアからの文化交流プログラムを受け入れた。マレーシアの小学校から28名の児童が本校を訪問し、歓迎セレモニー、給食、授業を通して児童と交流した。歓迎セレモニーではマレーシアの伝統的な踊りを披露してくれ、本校の児童たちは民族衣装や音楽に興味をもち、活動後には個人的にマレーシアの文化について調べる児童もいた。今まで本や動画でしか見ることでできなかった異国の文化を実際に目にする貴重な機会となり、地球には自分たちとは異なる民族、文化が存在するとはこういうことなのか、と実感している様子が見られた。



歓迎セレモニー（記念品交換）

また、マレーシアの児童は英語を理解することができたため、歓迎セレモニーや給食、授業のときには私が英語で通訳をした。その様子を間近で見ていた本校の児童は、英語で会話できることの必要性を感じ、「もっと話せるようになりたい」、「英語がわかればいろいろな国の人と仲良くなることができる」という声が聞かれた。実際に英語でコミュニケーションを図り、意思疎通を図る場面を見せることで、児童は英語を習得することにより意欲的になったと感じた。

## － おわりに －

今回この静岡県小学校英語対応海外研修に参加させていただき、自分にとって実りの多い研修となった。英語コミュニケーション能力の向上に加え、フィリピンの文化や考え方を直接肌で感じることができた。現地に行って現地の人とふれ合うことで、私とは異なる考え方をする人がいたり、世界の中では自分のスタンダードがスタンダードではなかったりするということを改めて実感した。

本研修がなければ、おそらく語学学校に自分で行くことはなく、また、フィリピンという国にも行くことはなかったかもしれないと思う。自分の英語コミュニケーション能力にまだまだ伸びしろがあること、そしてインターネットでさまざまな国の情報を得ることができるようになった現代においても実際に訪れて自分の肌で感じることの大切さを知ることができた。

また、静岡県内各地の小学校教諭と知り合い、共に行動できたことも貴重な体験となった。自由時間にはお互いの学校のこと、地域のこと、家族のことなどを話して交流を深め、10日間の研修を共に乗り切った仲間であると感じている。今後もこの財産を自分の糧としていきたい。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	ドイツ語 intensive コース (20+10 TH)		訪問国		ドイツ	
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	未定	(対象)	全校・学年
学校名	沼津東高等学校		氏名	吉田恵梨香		学年 3年

1 目的・応募理由

私は、小学生の頃から将来は海外へ留学したいと思っていました。英語に深い興味を持っていたので、留学先として大半の留学生が目指す英語圏を考えていましたが、英語は日本の学校で5年間学んでいるので、英語だけでなく、プラスαで何か新しいことを身につけたいと思い、ヨーロッパに目を向けました。ヨーロッパの中でも、私の関心のあるクラシック音楽や芸術などの都であるドイツに留学を決めました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

私は、約10ヶ月間、ドイツのハイデルベルクという街で留学生生活を過ごしました。ハイデルベルクは、ドイツ最古の大学の街で、歴史的な建物がたくさん並んでいます。美しい旧市街や街の中を流れるネッカー川、山の上に1200年代に作られたお城には観光客がたくさん訪れ、お城から眺める春夏秋冬それぞれの景色がとても綺麗でした。私のドイツ語のレベルは、一言も話せないつまりドイツ語力はゼロの状態です。学校に通い始めましたが、この貴重な10ヶ月の間でC1レベルまで達成することができました。ハイデルベルクで生活していく中、初めての一人暮らしということもあり、壁にぶつかることもあれば、楽しいこともありました。その中で学ぶことがたくさんありました。私は、Academy of Languagesという語学学校に通っていました。ヨーロッパでは、英語も含めてすべての言語に、A1, A2, B1, B2, C1, C2の全6レベルまでの語学レベルをつけています。入学当日にドイツ語のレベルテストを受け、全5レベルに生徒を分けるのですが、私はドイツ語力ゼロだったので、このテストは受けずに初心者クラスに案内されました。このクラスは、イスラエル人、パレスチナ人、トルコ人の割合が圧倒的に多く、ドイツ語のレベルに関わらず、授業は最初から終わりまでドイツ語のみで行われました。初めは全く聞き取れず、このまま大丈夫かと心配していましたが、だんだんドイツ語に耳が慣れていき、先生に質問したり、相手と簡単なコミュニケーションをとったりできるようになっていきました。ひたすら文法や単語を書いて暗記するのではなく、毎日Sprechen(スピーキング)をメインとした授業がほとんどで、私にとっては新しい学習環境でした。約8週間間隔で進級テストが行われ、初めてのテストで合格し、進級できた時は本当に嬉しかったです。そして徐々にレベルを上げていき、11月末ごろには、学校内での最高レベルであるC1のクラスで授業を受けられるようになりました。学校内ではよく、日本人は日本人同士で団結する傾向があったのですが、私は中国語と韓国語を母国語としているので、韓国や中国の人たちのコミュニティと繋がりを持ち、より多くの留学生とドイツ語学習について相談したり、助け合ったりすることができました。また、ドイツ語を語学学校以外でも学ぶ機会もありました。ドイツには、「タンデム」という学習者2人でお互いの母国語を教え合うシステムがあります。私の寮から少し歩くと、ドイツ国内で最も有名で歴史のあるハイデルベルク大学があり、日本語学科もあります。私は、留学に来てすぐの頃、偶然に、日本語学科のタンデムパートナー2人と知り合うことができ、授業後などに

大学図書館で日本語とドイツ語を教えあったり、課題を質問しあったりしました。

ドイツでは、日本と違うことがたくさんありました。例えば、日曜日や祝日は、すべてのスーパーや、レストランが閉まるため、土曜日は食材を買いに来る人が多くより混雑します。ドイツに行く前から、ドイツ人の友人からこの事を聞いていましたが、聞くのと体験するのでは全く違います。ドイツでは、日曜日に来るたびに街中が休みモードのように静まり返り、24時間体制で開くコンビニも存在しないので予想以上に驚きました。しかし、ワークライフバランスが整っているようにも思え、メリハリがはっきりしている点は、とても良いと感じました。また、私は、ヨーロッパ風なテラス付きのカフェが大好きだったので、よくカフェへ行き勉強や読書をして過ごしました。ここでは、アジア圏には無いチップを払う文化に触れることが出来ました。

留学のチャンスを活かし、ドイツの都市をはじめ、周囲の外国への旅行計画を立てました。私の初一人旅は、ケルン(ドイツ)からアムステルダム(オランダ)、ブリュッセル(ベルギー)までの1週間の旅でした。12月までに、ドイツ以外の国はイタリア、チェコ、イギリス、オーストリア、スペイン、ポルトガルに行きました。ドイツ語圏内の旅行先では、学んだドイツ語を積極的に使い、自分のレベルを確認することができました。その他の国では、主に英語を使っていたので、改めて英語学習の大切さを感じました。ドイツ人の高校生と仲良くなり一緒に出かけたり、家に招待してもらったりしました。本来ならばホームステイをしなければ経験できないことをたくさん体験することができました。会うたびに、「ドイツ語上手!前より上達しているね!」と、ご家族の方にも褒められたときはとても嬉しかったです。



### 3 感想等

私は日本国外の医学部に進学を考えているので、大学入試に向けての勉強に励みたいです。留学で学んだドイツ語は大学での留学で活用したいと考えているので、これからも学びを続けていきたいと思います。ドイツを中心に、その周りの国々に旅行することができたことで、実践英語を鍛えるのと同時にドイツ語も習得することが出来た環境に本当に感謝しています。

また、留学先と旅行先で出会えた全ての人の縁に感謝の気持ちでいっぱいです。10ヶ月間ずっと周りはみんな大学生、社会人の方々に、未成年者は私だけ、という状態でしたが、たくさんの方に助けられ、アドバイスをいただきました。留学経験を通して、私の知らなかったヨーロッパの生活だけでなく、日本の利便性、環境の良さなど日本の魅力を更に分かることができ、自分の生活能力も鍛えることができました。困難に遭うたびに自分が今何をすべきなのかが見え、目の前にあることを必死にこなしていけば、どんな悩みも不安も知らぬまに解決していました。最後に留学に行くことを応援して下さった家族、担任の加藤先生、校長先生、化学部の皆さん、奨学金の支援をしてくださった静岡県教育委員会の皆様、本当にありがとうございました。留学で培った様々な経験を活かし、グローバル社会で活躍できる人材になれるよう努力します。

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		長期留学		訪問国		ドイツ	
校内発表会の有無		有 ・ 無		(有の場合)		日にち 3月21日	
学校名		県立磐田南高等学校		氏名		高橋 湧楽	
				学年		1	

### 1 目的・応募理由

きっかけは、中学1年生の時に参加した二週間のインド派遣研修です。ホストファミリーや現地の友達と大変楽しく充実した留学生活を送ることができ、もっと異文化交流や他の国の人たちともつながりたいという思いが芽生えました。研修中に同じ団体から高校生の年間留学プログラムがあることを聞いて、次回はもっと意思疎通ができるように語学力を高めてから留学に臨みたいと強く思い、高校留学を決意しました。ドイツを選んだ理由は、環境問題への取り組みや肉食文化なのにヴィーガン食品が流行しているという食生活の変化、そしてドイツ人の自己主張の強さに興味を持っていたからです。インド以外の国には行ったことがないと、英語以外の第3言語に挑戦してみたいという思いからドイツを選びました。留学全体の目的は、ドイツの暮らしを体験して新しい発見を見つけ将来に繋げること、ドイツの人達と積極的にコミュニケーションをとって沢山友達を作って最高の思い出を作ることの2つです。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

#### 【学校生活について】

僕が派遣されたのはドイツ西部の人口58万人の地方都市で、近郊の街には日本人サッカー選手がいましたが街中や近所で日本人がいる話を聞いたことはありません。日本人の僕は珍しいようで、近所の人達がよく声をかけてくれました。このような街にあるギムナジウム（日本の小学校5年生から高校3年生に相当する大学進学に向けた一貫校）に派遣されましたが、そこでも日本人は僕だけという環境でした。

授業は、日本と同じ主要教科プラス哲学や宗教、ラテン語、フランス語があります。選択肢の中から各自が学びたい科目を選んで学ぶことができるので、ドイツの高校は大学のような感じですが、日本のようなホームルームクラスがないため、授業ごとに生徒が教室を移動します。そのため、同じ学年の人全員とどこかのクラスで一緒になる機会があるので沢山の友達ができました。ドイツには日本のような先輩・後輩という上下関係がなく、年齢問わずみんなの仲が良いことが印象的です。日本は教師が教えて生徒が聞くスタイルが一般的ですが、ドイツの授業は違います。授業はディベート形式で、教師と生徒と一緒に授業を動かすというスタイルが一般的でした。授業はみんな発言回数がとても多く、発言しない人はなんでこの授業にいるの？みたいな雰囲気があるほどなので、僕もみんなに混じって発言していました。日本人は間違いを恐れる人が多いですが、ドイツ人は恐れずに気軽に自分の意見を言っていて間違いを恐れません。そのため、僕も楽しく授業に参加して学ぶことができました。

#### 【休日の過ごし方】

休日はサッカーをしたり、ホストファミリーとサッカー観戦に行ったり、学校の友達とショッピングやドライブにいたりしていました。時にはホストファミリーと旅行に行ったり、乗り放題チケットを使ってドイツ各地の留学生仲間と国内の色々な都市を観光していました。長期休みはドイツ周辺の国々をホストファミリーや友人と旅行しました。

長期休みは、すべての季節でありました（夏は1カ月半、春が3週間、秋冬が2週間）。春はホストファミリーとオーストリアへスキー旅行して、スキー初心者の僕は二日目にしてハイレベルコースを滑って転落死しそうになったので、雪山のトラウマが残りました。夏はホストファミリーとギリシャでバカンスを過ごしたり、留学仲間とベネチアやミュンヘン、アムステルダム、パリへ観光しに行きました。秋はドイツ各地（ベルリン、ハンブルグ）に派遣され

ている留学仲間のもとへ遊びに行きました。冬は学校の友だちやホストファミリーと一緒に地元や近郊のクリスマスマーケットめぐりをしました。

### 【ドイツでの生活】

学校以外でもさまざまな発見がありました。まず、6分未満の遅延は「定刻」扱いされているということが驚きでした。DBというドイツ鉄道をはじめとした公共交通機関の遅延やキャンセルが頻発していて、日本ではニュースになりそうな遅延も当たり前でした。

「定刻の時間に着く電車はわずか半数ほど（54%）」とドイツの新聞で読みましたが、日本なら事故が原因だと考えますがドイツでは違いました。あまりに時間通り走らないので僕は一度ドイツ鉄道の人に聞いたことがあるのですが、原因の1つ目は「運転士の怠惰な勤務」だそうです。2つ目は、ドイツの線路は日本でいうところの新幹線と在来線が同じ線路を使っているため、一本の電車が遅れたらそのエリア帯の電車にも大きな影響が出るという話でした。

留学中にも15分や30分の遅延は日常的で、中には「120分遅れ」という想像のつかない遅延も経験しました。大幅な遅延や運休で予定に遅れたり、8時間電車に乗ったままだったことも、今ではいい思い出です。

### 3 感想等

僕のホストファミリーは四人家族で、ホストファザーはスコットランド人、マザーがドイツ人です。二人の子供のうちの上の子は成人して家を出ています。そして、アメリカ人の留学生も一緒に暮らしていましたが、彼はドイツ語を喋れないので、家族の会話はドイツ語と英語でした。僕が英語で喋れたり表現できないことは、ファザーにドイツ語で伝えて英語に翻訳してもらって会話が成立していました。ドイツ留学をしながらアメリカ留学もしているような日常でした。サッカーで有名な街にある学校なので、シャルケ（ドイツの名門サッカーチーム）のサッカー選手育成コースが各学校にあって、僕もそのコースに参加することができました！本当にラッキーでした！

日本の部活動と違って、授業のカリキュラムとして毎日サッカー選手育成コースのクラスが組み込まれています。そして、僕は授業のほかにも放課後に地元のサッカークラブで練習をしていました。そのため、放課後は友達とトルコ料理屋でケバブを食べたり、ホストファミリーと学校の話や日常的な会話を楽しんでから、ほぼ毎日夕方2時間くらい地元のサッカークラブに参加していました。サッカーから帰宅して、夕食をとって宿題をする一日が終わっていました。

ドイツの一般的な食事はパン、ハム、チーズなど「火を使わない夕食」と言われていますが、僕の家では違いました。ファザーが料理好きでインターナショナルな料理を作ってくれていました。僕も休日にはカレーや親子丼、餃子、寿司などを作ってみんなに食べてもらっていました。

留学期間は11カ月でしたが、喜怒哀楽の感情が混ざるさまざまな体験を僕はしてきました。ホストファミリーはまるで本物の家族のように僕を受け入れてくれて本当に嬉しかったし、帰国の日の駅では皆で号泣した最高のホストファミリーでした。この留学のすべてのことに深く感謝しています！

このドイツでの経験を踏まえて、僕はドイツの大学進学も視野にいれて日本での残り2年間の高校生活に励みたいと思います。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	Mcgill 大学サマースクール		訪問国	カナダ		
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	10月2日	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年
学校名	静岡雙葉高等学校		氏名	阿井帆乃華		
			学年	2年		

### 1 目的・応募理由

次の四つの目標のもと応募しました。

実践的なコミュニケーション力を身につけ、帰国後の語学学習につなげていきたい。

実際にその場で考えて即興で英語を話す中で、英語での対応力を高めたい

日本人と海外の方の価値観を比較して、共通点、相違点について考えたい。

自分の意見を持ち、周りの意見に流されず、それを発信する力を身につけたい。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

9日間に亘ってカナダのMcGill大学のサマースクールに参加してきました。授業は習熟度に分かれ、自分達で自由に発言していく生徒主体のものでした。普段、日本で受ける授業とは異なり、とても新鮮でした。午前中に授業があり、午後からはクラスは関係なくその日に組むグループで交通機関を使って、目的地に行くアクティビティがありました。授業内容は未来の自然環境はどうなっているかという疑問に対して自分の意見を言うディスカッションや自分の国で有名な曲や人気な曲の意味や由来を伝えるといったものから午後のアクティビティに



備えて使える英語を学ぶものなどたくさんの種類の授業がありました。休み時間には先生と話す機会があり「カラオケは日本発祥のものだよ。日本は小さな島国だけど、文化はとても大きくて、すてきな国だよね。」と話してくださり、日本の文化をたくさん知ってくださっていることがとても嬉しかったです。午後のアクティビティはバスや鉄道を使っていました。行く街によって雰囲気は全く異なります。日系の人があまりいない街では、バスに乗ってる時に差別的な発言をされたり、信号のない横断歩道で止まっていたとき、通っていった車の運転手が窓越しに意味がわかっていないと思っているのか裏返しでピースをされたりすることがあり、差別されること自体が初めてだったので、とてもショックを受けました。顔

の作りや肌の色が違うことで悲しい思いを受けなければならないことが悲しかったです。しかし、お店に入ったとき、お会計の時に日本人だと分かったのか店員さんが日本語を披露してくれたことや街で歩いていた時に日本語を披露してくれて「来年、日本に行こうとしているんだよ」と言いに来てくれた人もいました。また、



人種に関係なく接してくれる同じ年代の海外の友人たちがいたことで、傷ついていた気持ちが回復することが出来ました。人それぞれ捉え方、考え方は異なるから様々な対応をされることは当然なのかもしれないと思うようになりました。日本にいたときにはなかった自分の考え方や新たな発見があり、自分の視野がより一層広がりました。

### 3 感想等

私は英語での授業のみですが、フランス語での授業を学びにきている海外の友人達もおり、話す英語がとても巻き舌だったり、各国に母国語があるため、英語が聞き取ることが難しいことがありました。私が話しているときに「Can you sat that again?」と聞き返されることが多かったので、自分の発音はカタコトで伝わりにくく、自分の改善すべき課題だと思いました。また、一つの表現にもたくさんの単語が存在するので、どれが一番適しているのかと悩むことがありました。午後のアクティビティで美術館に行ったとき、絵の説明がフランス語で書かれていたため何て書かれているのかと聞いたら、すぐに英語に訳して説明してくれる子や、日本語を学んでいるため、学んだ日本語で自己紹介をしてくれる子もいました。自分の学びたい言語を楽しく学んで、活用している姿が素敵だなと思いました。ただ、学ぶのではなく、自分から学びに行くことが大切だと感じました。また、別のアクティビティのときに、マップを見ても、目的の場所が分からなかったため、街を歩いていた市民の方に聞いてみたところ、丁寧に案内してくださり、優しさに触れる機会がありました。最初は話しかけることに躊躇っていたのですが、勇気を出して声をかけて良かったと思います。

カルチャーショックもありました。18時に集合のはずなのに、21時にやっと全員が集まるという時間にルーズな点がとても驚きました。他にも、たくさんの面で時間に寛容な部分があり、日本だと許されない点のようだと思いました。

私が今回、サマースクールで出会った友人の中の1人にウクライナ出身の女の子がいます。彼女はイタリアの団体の方から1人で参加しに来ており、とても明るくて、面白い子でした。あるときに、家族の写真を見せようという話になり、彼女が見せてくれたのは、軍服を着たお父さんとの写真でした。「最近、とった写真はこれかな。まだ、会えてないんだよね。」と言っている横顔がとても悲しそうで、苦しくなりました。戦争で辛い思いをしている人や自分が体験した差別はメディアを通して間接的に知っていましたが、直接、その場で自分が感じることは全く異なりました。また、日本の文化が幅広く海外の人



たちに知られていることがとても嬉しかったです。自分が暮らしている国だと気づかないようなことでも海外に行くと、それぞれの国の文化を感じたり、海外の人から見える日本についての話を聞くと、物事に対する捉え方が変わりました。今回のMcGill大学のサマースクールに参加したことでたくさんの良い経験をさせていただき、学ぶ機会を与えてくださった皆さまに感謝いたします。この経験を、これから先の学びに繋げ、将来、社会に出たときに活かしていきたいです。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		バララット市語学研修		訪問国		オーストラリア	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	10月13日	(対象)	英語科1年生
学校名	静岡県立浜松湖南高等学校		氏名	荒井つぐみ		学年	2年

1 目的・応募

語学研修に行きたいと思った時、親は、応援してくれた。しかし私は語学研修に行くことは厳しいのではないかと考えていた。理由は、私が高校2年生になった時、母が手術をしたからだ。最初は、母のいない生活に戸惑い、手術の費用などお金のリアルな部分に接し、不安に思っていた。そんな中での親の応援だったため、驚いた。スヌーピーの言葉にあるが、「配られたカードで勝負するしかないのさ。それがどういう意味であれ」という言葉がある。親は、私に最大の支援をしてくれている。私はこのカードを最大限活用したいと強く思っている。親がくれたカードを私なりに最高のものにするために申請しようと決断した。そして語学研修を通して、私は主に、2つの力を伸ばしたいと考えている。1つ目は語学研修で、世界とつながるためのコミュニケーションツールとして、英語力を伸ばしたいと考えている。2つ目は、想像力だ。「私の普通は普通ではなく、世界は広い」ということを体感し、固定概念を壊したいと考えている。この2つの力を伸ばし、多面的な考えをできる自分にしたい。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

・語学研修の内容・日程

少人数で、現地の先生に教えていただいた。その先生方が作った英語のテキストをもとに、オーストラリアの常識・法に関すること・食文化・文化を学んだ。オーストラリアのこと以外にも、英文法や日常で使える英語など基本的なことから発展まで学ぶことができた。

Primary school を訪問し、実際に肌で日本文化を感じてもらうために、折り紙を使ったり、浴衣を使ったりして、子どもたちと交流をした。High School への訪問では、日本語を勉強している生徒と交流し、お互いの文化を相手の国の言語で紹介しあった。



・休日の過ごし方・ホストファミリーについて

四人家族で、2017年から、留学生を受け入れ続けている。

平日：hostdaughterたちとお庭で遊んだり、ボードゲームをしたりして、過ごした。宿題のインタビューやわからない問題に対して、host mother、host father が丁寧に教えてくれた。hostdaughterたちの習い事のバスケットボールに参加させてもらったりした。夜は、ダイニングルームで家族全員集まって、その日の出来事を話したり、テレビを見たり、団らんをした。



休日：動物園・フットボール観戦・メルボルンでのショッピング・祖母との食事・

曾祖母の自宅へ行く・ショッピングモール・ウェンドリー湖・ボウリングなど

休日は、バララット市内のショッピングモールや湖だけでなく、メルボルンまで出かけた。祖母や曾祖母、いどこに会ったりした。色々な場所へ連れて行ってきて、オーストラリアの建物や町並みを感じられるとともに、食事では、ミートパイ、カンガルーや羊の肉、ベジマイトなどオーストラリアの食文化も体験できた。

### 3 感想等

ホストファミリーは留学生に慣れていたため不自由なく過ごすことができた。夜は、みんなで喋ったり、遊んだり家族団らんをしてゆったりと過ごすことができた。hostdaughterは、ボードゲームをやる時やバスケットボールをやる時は必ず私に説明をしにきてくれて、普段話す際もゆっくり話してくれるなど、たくさん気にかけてくれて何度も助けてもらった。本当の家族のように接してくれて、三週間はすごく早く感じられた。学校での授業では、ただ英語を学ぶだけでなく文化や日常英語まで学ぶことができ、現地でしか体験できないことがたくさんできた。私の印象では、オーストラリアは時間の流れがゆっくり感じられた。そのためのびのびと過ごすことができ、挑戦したり、自分と向き合ったり、自分を成長させるうえでとてもいい国だった。帰る際は、家族との別れに寂しさと感謝でいっぱいになった。そして、また必ず来たいと思うとともに、様々な国を訪れて沢山のひとと交流したいと思うようになった。今後は、オーストラリアに来る前に立てた問いを追求するとともに、また行きたいと思った感情を実現させるために自分には何が足りなくて、今何をすべきなのかを逆算して考え、行動していきたい。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		バララット市語学研修		訪問国		オーストラリア	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	10月13日	(対象)	英語科1年生
学校名	静岡県立浜松湖南高等学校		氏名	岩間彩希		学年	2

1 目的・応募理由

今回のバララット語学研修を通し、私の主な目的は3つあります。1つ目は、将来の夢である社会的に身分の低い女性や、苦しい状況下にいる海外の人々を救うという将来の夢に繋げていくため、英語力を上げたいからです。そして、2つ目はオーストラリアと日本の町の違いを比べ、日本との違いからオーストラリアの文化について学んでいくことです。(町の違いは建造物や、自動販売機の数や設置場所、バスなど)最後に、私はオーストラリアのジェンダー格差について知りたいと思ったからです。オーストラリアは日本と比べ、男女平等の意識が強いと聞いたことがあります。しかし、海外へ行くのはオーストラリアが初めての私にとって、他国のジェンダー格差などはネットの記事でしか知ることができません。どうしてそのように言われるのか、実際に自分の目でジェンダー格差が少ない国を見てみたいと思いました。

2 研修内容等(語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど)

今回のオーストラリア語学研修を通し、私はオーストラリアの町の至る所で日本との文化の違いを見つけることができました。特によく違いが現れていたのは、バスです。ホストマザーからオーストラリアについてよく知るために、バスに乗って人や町並みをよく見てみるといいとのアドバイスをもらいました。だから私は行きだけですが、1人でバスに乗り学校へ登校していました。まず最初に驚いたことは、オーストラリアのバスでは現金を使うことができないということです。マイキーと呼ばれるカードでしか乗車賃を支払うことができません。(マイキーは日本で言うスイカやトイカのようなものです。)オーストラリアではキャッシュレス化が進んでいると知ってはいましたが、まさかバスまで現金が使えないとは思わず、とても驚いたのを覚えています。ですが、全員がカードを使って支払うことでオーストラリアのバスは効率よく運行しているように思いました。しかしその一方で、無賃乗車をしている人が多いという課題点もみつけることができました。バス運転手の方も無賃乗車をしている人たちに何も言っていなかったことがまた印象に残っていることの1つです。どうして運転手の方は注意しないのかという疑問点がこの報告書を書いているときにでてきたので、ホストマザーにメールで聞いてみました。



オーストラリアには Worksafe と呼ばれる組織があり、運転手の方が乗客に対して怒ると、悪い雰囲気になってしまう為、他の乗客の人達のためにも運転手の方は感情をコントロールする必要がありますのだそうです。バスでの出来事も含め、オーストラリアで見つけた日本との違いはとて面白く、とても興味深かったです。それだけでなく、このことからオーストラリアの本当の文化について学べたような気がします。

また、私はオーストラリアに行く前に、海外のジェンダー格差について詳しく知りたいと思っていました。特に、家庭内での様子を知りたいと考えていました。私がオーストラリアの家庭を見ていて思うのは、ほとんどの夫婦が2人で協力して子育てをする意識が強いということです。日本では、母親1人に育児の負担がかかってしまう場合が多いですが、オーストラリアでは小さなことでも分業して育児をしている印象が強いです。実際に、スーパーなどにホストマザーと出掛けてみると、夫婦揃って買い物に来ている人が多かったです。例えば小さい子どもをお父さんがみて、お母さんは買い物を済ませる、というように役割分担がなされていました。気にしなければ気付かないささいなことかもしれませんが、このような小さなことの積み重ねでオーストラリアはジェンダー格差が少ないと言われているのかもしれないと思いました。

### 3 感想等

今回のバララット語学研修を通し、私は文化の違いを知れただけでなく、オーストラリアの人の優しさも知れました。ホストマザーは常に私がオーストラリアのことをよく知れるように考えてくださいましたし、どこへ行ってもゆっくりとした英語で話しかけてくださる方や、日本語で話しかけてくださる方も多く、日本の文化について真摯に聞いてくださいました。この慣れない土地で現地の人々がしてくださった優しい行動は、私の不安を無くしていきました。だからこれからは、この優しい行動を日本で私が海外の方たちに実践していきたいです。また、将来英語を使つての仕事ができるよう、この経験をもとに、より英語の授業を頑張っていきたいと思います。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		バララット市語学研修		訪問国		オーストラリア	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	10月13日	(対象)	英語科1年生
学校名	静岡県立浜松湖南高等学校		氏名	小谷伍輝		学年	2

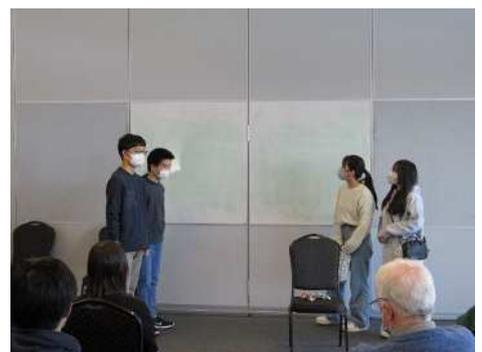
### 1 目的・応募理由

英語科である自分たちのコミュニケーションスキルをより発展させ、英会話と多文化交流を現地の人との交流のなかでより実践的に学習するため。

自分は積極的なコミュニケーションが苦手で、授業で学んだ英語の力を生かすことができていないと感じていた。またこのグローバル化の時代、海外に行くことは自分にとって非常に大きな経験になりうると感じた。自らが学んできた英語力を試し、日本では体験できない様々なことを学習したいと思いこの研修に参加した。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

今回の語学研修では基本的に月曜から木曜に授業があり金曜日は様々な場所に体験をしに行った。授業はもちろん全て英語で非常に難易度が高かった。特にオーストラリアの英語は普段我々が学習している英語と発音が大きく異なり、オーストラリア固有の単語があるためとても難易度が高く、新鮮だった。体験ではBallarat wild life



ストラリアならではの体験をすることができた。休日の過ごし方については各々に一任されていたため、ホストファミリーと話し合っ

アボリジニのワークショップに行き伝統に触れたり、オーストラリアの有名な映画を英語で鑑賞したりした。また日本では滅多にできない体験をさせてもらった。それはダンスパーティーだ。ビートルズなどの有名な曲を流し、初対面の人と一緒に踊るとい

う全く異なる文化にとっても衝撃を覚えた。僕のホストファミリーは Mr. David と Ms. Wendy というご高齢の夫婦だった。高齢ということで運動のようなアクティビティはあまり行わなかったが、代わりに日本についてなど様々なことを話した。ホストファザーの Mr. David は若い頃非常に活動的に働いていたそうで仕事についての様々な話が聞けてとても面白かった。ホストマザーの Ms. Wendy とは読書という共通の趣味があったのでとても話が弾んだ。また犬2匹と猫1匹を飼っており、それらの散歩もした。オーストラリアの家庭は日本と大きく異なっ

ていた。例えば子供に対する意識が大きく異なり、親の子供に対する責任が非常に大きい。具体的には、成人以下の子供を一人で家に居させるのは良くないとされており、意識の違いを感じた。またライフスタイルの違いとしてコーヒーや紅茶などのティーブレイクを重視していた。飲み物をゆっくり楽しみながら数十分間ゆっくりと過ごすのが好まれていた。日々の生活のこのような違いは国内旅行やホテルでの宿泊では感じ取れないものであり、ホストファミリーとの生活でしか得られない体験だったと思う。

### 3 感想等

今回の研修はとても自分のためになった。他人と共に生活するという事は初めての体験で、出国前は不安でいっぱいだったが自ら積極的に話しかければ、友好的に返してくれた。

これは英語以外のコミュニケーションでもとても大切なことだと思う。英語力も磨かれたがそれ以上に自分と異なるもの、人に対する考え方の幅が広がったと感じる。オーストラリアのライフスタイルは日本と大きく異なる。家に土足で入ったり、食事を残すことがタブーとされていなかったりと日本人が思わず眉をひそめるような習慣もいくつかあった。日本人の多くは他人に体を触られることに慣れていないと思うので、ハグや握手といった挨拶に不慣れであると思う。しかしその文化を否定するのではなく認め合い、互いに尊重することが大切であるとより心に刻みつけることができた。このようなことは国内でも多く言われていることだ。多文化尊重や国際理解なんて言葉は中学生でも知っていると思う。しかし、実際にそれに触れ、考えることのできる機会は貴重だ。僕は幸運にも機会をつかみ、体験することができた。この体験を無駄にせず、自らが将来、国際社会でリーダーとなり、国際理解を実現できるよう、日々邁進していきたい。そのためにも今後の高校生活で勉学に励んだり、国際ニュースをより積極的に取り入れたりしていきたい。このような機会を与えてくれた親、学校の先生方、サポートしてくれた法人の方々など全ての人への感謝を忘れず、この経験が糧となるようしっかりと努力していきたいと思う。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		バララット市語学研修		訪問国		オーストラリア	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	10月13日	(対象)	英語科1年生
学校名	静岡県立浜松湖南高等学校		氏名	鈴木権斗		学年	2

1 目的・応募理由

小学生の頃、僕は父の仕事の影響でアメリカに引っ越し、4年間ほど生活しました。そちらでの生活は初めてのことで、苦労が多くありましたが、新鮮なことも多く、良い経験となりました。特に、英語にはとても苦労し、覚えるというのが非常に大変でした。しかし、初めての異国の地での生活をしていく中で英語に慣れ、英語やその文化について興味を持っていきました。僕はバスケットボールや読書が好きで、英語の本を読んだり実況を聞いたりしています。将来は英語など今興味あることを活かしまわりの人の役に立つような仕事に就きたいと思っています。また、自分が広く楽しめいつまでも笑顔で過ごすことができるようにしていきたいです。英語やさまざまな文化に触れ、楽しめるようにしていきたいです。また、僕には弟妹がいて、どちらも大きな夢を持ち日々勉強や自分のしたいことに全力で取り組んでいます。僕は彼らの夢を応援していきたいと思っています。弟は英語が非常に得意で、将来幅広く国際的に活躍したいという話を聞きます。そんな夢を追いかける弟妹のために全力を尽くしていきたいと思えます。これらをめざしていくために補助金交付を希望しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

平日は週に3、4回学校へ行き勉強をし、観光地やメルボルンの博物館や有名なマーケットへ行きました。学校では英語を現地の先生から英語だけで教わるということで大変なところもありましたが、多くを学びいい経験となりました。初めはオーストラリア特有の発音や表現が難しいこともありましたが、だんだんと慣れていくことができ聞き取れるようになっていくのを実感していったのは嬉しかったです。休日はホストブラザーやシスターとボードゲームをしたり猫と遊びました。初めてのゲームは楽しく、騒がしい雰囲気でも盛り上がりました。



休日には動物園へ行きカンガルーやコアラといったオーストラリアの有名な動物も見ました。カンガルーに触ることもでき、とてもいい経験ができて良かったです。また、カンガルーが飛び跳ねて進んでいく姿は新鮮でした。ホストマザーたちがどんな生き物なのかを説明してくれたことによってどんなものかわかり話が盛り上がることもあり楽しめました。ホストブラザーやシスターは日本に興味を持っていて何度か来たこともあったということで日本についての話題で話が弾み、日本への関わり方や思いについて知ることができました。日本のことは安全で人は真面目というような好印象を持たれていましたが、寿司は嫌いな人もいて、酢飯だけで食べるのが好きな人が多かったのには驚きました。また、休日にはホストマザーの友達のパーティーにも参加しました。風船やさまざまなケーキが並べられており、家で行うパーティーの雰囲気味わえたことは貴重な経験となりました。多少はその人たちの会話に入ることができてうれしかったです。ホストファミリーと一緒に生活をしているだけでも新しいオーストラリアの生活や文化といったものが学べるのだと感じました。

### 3 感想等

僕はこの研修に参加し、多くの学びがあり、たくさんの日本ではできないような経験もすることができて良かったです。ひとつの僕が楽しみにしていた発音やイントネーションについて触れることができて良かったです。それは現地でしか学ぶことが出来ず、とても価値があるものです。また、オーストラリア特有の文化や景色に関われたことは非常に興味深く楽しいことだらけで、その国について深く学ぶのに3週間というのは十分ではありませんが貴重で今後の生活や目標に向かっていく大きなモチベーションとなりました。オーストラリアの文化は以前住んでいたことがあるアメリカを彷彿とさせるような部分を所々含むようなもので、新たな体験も数多くありました。アメリカの食事はあまりしてこなかったもので、似たようなオーストラリアの食事を毎日することは新しく、思っていたよりも美味しく良かったです。また、食事での会話で食べることへの捉え方も違うということがわかりました。食事は喋りながらゆっくりとというのを基本としているので、量にばらつきがあり、夕食は量が多くて驚きました。そのような意味で文化やその国のことについて学ぶ上で現地の人と生活し時間をともにするのはすごくいいと思います。オーストラリアに行けたことで文化面、言葉の面での発見がたくさんあり、ホストファミリーと生活できて光栄でした。ホストファミリーと関わることはとても楽しく、これからも連絡をとっていきたいと思います。これらで学んだことを今後の生活に活かしていきたいです。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		バララット市語学研修		訪問国		オーストラリア	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	10月13日	(対象)	英語科1年生
学校名	静岡県立浜松湖南高等学校		氏名	袴田樹奈		学年	2

### 1 目的・応募理由

私がこのプログラムに参加する目的は、外国の文化に触れることです。この先日本の在留外国人は増加し、更にグローバル社会になっていくと言われており、私達は異文化理解を深める必要があると思います。そのためにオーストラリアで実際の英語でのコミュニケーションの仕方や日本では体験する機会のない外国の文化を学びたいと考えました。そこで本研修ではバララット市内でホームステイをしながら学校に通えるため、現地の言語や文化に触れるには非常に良い機会だと思い参加を希望しました。しかし参加するにあたって高額な費用がかかります。現在兄が大学に通っており、学費がかかるため家計への負担をなるべく軽減させたいという思いから応募させていただきました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

研修の前半は、ESLの授業がメインで一度、遠足があった。授業は9:00～15:30の間に休憩を何度か挟みながら行われ、テキストに沿って英文法や便利な日常英会話、買い物の際に役立つ単語、健康状態を表す言葉などを幅広く学んだ。休日はホストファミリーと過ごした。ショッピングセンターやウェンドリー湖、トラムミュージアムなどに連れて行ってもらい、バララットの自然に触れた。ホームステイ先には5歳と2歳の子どもがいて、家にいるときはよく一緒に遊んで幼い子どもの話す英語にも慣れることができた。学校の遠足では、ソブリン・ヒルを訪れた。ここはゴールドラッシュを迎えた1850年代のバララットを再現した街並みがあり、当時のドレスを着たスタッフが歩いたり時々馬車が通ったりと、タイムスリップしたような気持ちになれる場所だった。また、地下鉱山の見学や砂金採りの体験もできる施設である。



研修の後半は、ESLの授業を受けながら地元の学校との交流や遠足も盛んに行われた。地元の学校“Mount Clear College”を訪問した際は、第二言語として日本語を学んでいる生徒が多くいたため英語と日本語の両方で交流ができた。お互いの自己紹介や日本とオーストラリアとの学校の制度の違いなどをインタビューの形式で尋ね合って学んだ。“Sebastopol Primary school”との交流では日本の伝統的な遊びや文化を紹介した。

遠足としてメルボルン博物館とワイルドライフ・パークを訪れた。博物館では恐竜の化石や標本、アボリジナル文化などを観賞した。ワイルドライフ・パークではオーストラリア原産の動物を間近で見られ、特にカンガルーへの餌やりができたのがとても新鮮で嬉しかった。週末にはホストファミリーがユースセンターに連れて行ってくれ、ここでもオーストラリアやバララットの歴史に触れた。また、ホストマザーは時間がある時は色々な話を聞かせてくれたり反対に質問をしてくれたりして、英語でのやりとりは難しいけど心から楽しめた。バララットでの最後の登校日に開催されたお別れパーティーは、皆で披露したソーラン節を見て先生方やコーディネーターの方は楽しんでくれたようだったし手紙を渡して感謝も伝えられたのでとても充実した気持ちになった。



### 3 感想等

海外に行くというのも英語でコミュニケーションをとるというのも知らない家庭に宿泊するというのもどれも初めてのことで研修が始まる前は緊張していたし不安が大きかったけれど、想像よりもずっと現地の方々は明るくて親切で、リラックスできる場所だった。しかし自分の英語能力ではまだまだ通用しないことが多くて、特に聞き取りにはいつも苦労していたと思う。それでもホストファミリーをはじめとした皆さんはこちらが理解できないと繰り返し丁寧に伝えようとしてくださったので諦めずにやっていけた。授業では日常生活で使える単語や表現をたくさん学ぶことができ、地元の学校との交流では積極的にコミュニケーションをとる姿勢を身につけられた。遠足はオーストラリアの文化や歴史に触れる良い機会となった。ホストファミリーとの生活は英語や子どもの対応の難しさから時々悩むこともあったけれど彼女らはいつでも私の味方でいてくれたので安心して過ごせた。今回の研修で貴重な経験をさせてくれたすべての方に感謝したいと思う。

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	カナダサマースクール McGill 大学		訪問国	カナダ	
校内発表会の有無	④ ・ 無	(有の場合)	日にち	8月30日	(対象) 全校
学校名	焼津中央高等学校	氏名	畑原大輝		学年 高校2年

### 1 目的・応募理由

私は大学で海外留学にチャレンジしようと思っています。小学六年生の夏に一ヶ月間アメリカに滞在する機会があり、国を出て今までと違う環境での生活や文化に触れ、違う価値観を持った人と交流したことで海外進出の魅力やすばらしさを知り、海外へ憧れを持つようになりました。そんな中この研修の話を受け、研修に参加し、日常に溶け込んだ英語に触れ、新しい行動に挑戦する力や英語力を身につけ大学留学時により深い学びができるようにしたいと思いました。大学の寮に滞在しながら他国の人と日常生活やアクティビティをともにする中で日本とは違う文化や価値観を知る機会を持つことができ、カナダならではの町並みや文化に触れられることがとても魅力的に感じ、参加したいと思いました

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

#### ●午前の English class について

午前中はこのサマースクールに参加した日本人、メキシコ人混合で英語の勉強をしました。日本の授業とは違い、少人数のグループで各々自由に自分の意見を言い合うというものでした。日本の授業では自分の意見を言うことに対し抵抗がある雰囲気があるのに対し、海外の授業では全員がリアクションをして自分の意見を言いやすい雰囲気が作られていて普段あまり発表ができなかったと言っていた日本の学生も意見を言うことができました。



#### ●大学寮での生活について



このサマースクールではモントリオールの McGill 大学の寮に泊まらせていただきました。全員に一人部屋があり

違う環境下でも緊張せずに過ごすことができました。一階には共用スペースがあり大半の時間はそこで外国の友達と話したり、遊んだりすることができコミュニケーションが取りやすかったです。施設に関してエアコンなどはなく比較的住みやすい気温でしたが少し大変でした。シャワーの勢いや温度調節が難しいなど日本の施設の快適さや清潔さを身にしみ

ました。食事は寮に併設されているカフェテリアで食べました。栄養のバランスや味の濃さなどあまり日本では馴染みのない料理を食べ、自分には合わなかったのですがいい経験になりました。

#### ●午後のアクティビティについて

毎日午後にはダウンタウンへ行ってショッピングや観光をしました。日本とは異なる町並みや雰囲気にふれることができました。ショッピングは巨大なショッピングモール、リトルイタリ



一、リトルチャイナに行きました。リトルイタリー、リトルチャイナはそれぞれの国の町並みを再現した日本の中華街のようなところでした。外貨での会計は手間取りましたがどこの店員さんも優しく、どこ出身？などと話しかけてくれて、楽しい買い物ことができました。観光では美術館やノートルダム大聖堂などに行きました。そのような施設だけでなく信号や標識など町並み一つ一つ、バスや電車などの公共交通機関が日本とは全く異なり、たくさんの新しい経験をしながらカナダの街を外国の友達と巡り、様々な場所を訪れることができ、とても楽しくいい経験をしました。

#### ●サマーキャンプに参加した人達について

今回のサマーキャンプではモントリオールMc Gill大学へイタリア、メキシコ、日本の参加国の中高生が参加しました。アクティビティを他国と混ぜてやることは多くなかったのですが活動以前に仲良くなった人と一緒に行動することができました。イタリアの人との交流はあまりなく、メキシコの人と仲良くなりました。メキシコの人達は自己表現がうまく、明るく、とても話しやすかったです。話しかけても距離を取らず、逆に引き入れてくれるような雰囲気がありすぐに仲良くなれました。



#### 3 感想等

昔から海外の文化や音楽に興味を持っていた私にとって憧れだった海外研修に行くことができとても幸せでした。一週間ほぼ英語だけの生活を送り、英語を話す楽しさとともに英語を話すことはそこまで難しいことではないんだと感じました。私は英語の授業が苦手な文法など覚えられていませんでした。だから海外研修に行く前は自分の英語が伝わらないのではないかと不安を感じていました。しかし、いざ海外に行ってみると授業で行うような難しい英語を耳にすることは少なく、自分が話すときには少し文法がおかしくても会話をすることができました。研修の終わりには流暢な会話ができるようになりとても嬉しかったです。暖かく話を聞いてくれた相手がいたことも大きな要因だと思いますが、積極的に会話をし伝えようと頑張ることが大切だとわかりました。



また、日本ではできない新しい経験をたくさんすることができました。東京のような巨大なビルや建物や色鮮やかなストリートアート、とても早くにぎやかな電車やバス、日本では見ない標識や信号、個性豊かなまちなかの人々など今まで映像でしか見ることができなかった海外の文化、雰囲気に触れ、とても楽しかったです。そして何よりとてもいい人達と一週間一緒に過ごすことができました。初日に関わらず多くの人が話しかけてくれました。お互い英語圏ではないので英語自体はたどたどしいけど自分が伝えたいことを伝え、私の話を一生懸命理解しようとしてくれて、とても嬉しかった思い出があります。アクティビティの自由時間でメキシコ人のグループと一緒に行っていいか訪ねたとき嫌な顔ひとつせず快く受け入れてくれました。どのひともとても温かい心を持ち自分を表現するのが上手だと感じ、自分も見習いたいなと思いました。

今回の短期留学プログラムに参加し、大学に入り長期留学にチャレンジするという目標がよりかくじつに、強力になりました。参加させてくれた両親に感謝し留学のための勉強を頑張りたいです。

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		海外体験促進事業（短期留学）		訪問国		アメリカ合衆国	
校内発表会の有無		<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	12月21日	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年
学校名	静岡県立浜松工業高等学校		氏名	島田佑海		学年	2

### 1 目的・応募理由

この留学では、語学力の向上とアメリカに住む人々や他の色々な国々からやってきた様々な文化を持つ学生達との交流、アメリカの文化や人々の人柄、アメリカと日本の違いなどを実際現地に行き、学ぶ事を目的に応募しました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

平日は、午前授業、午後アクティビティー、土日は授業がなく土曜は午前はフリータイムで午後からはアクティビティー、日曜は午前から午後まで遊ぶアクティビティーがありました。

#### <平日の授業について>

毎朝9時から始まり10時20分までは「Grammar（文法）」、10時半から12時40分までは「コミュニケーション英語」の授業を受けました。「コミュニケーション英語」ではある話題について文を作って皆の前で発表をすることや、3人グループになって英語を使って話が止まらないようにひたすら話し続けることなどをしました。



#### <アクティビティーについて>

平日の授業後のアクティビティーでは、アメリカの映画館で映画を見たり、ロサンゼルス観光スポットに行ったりしました。夕食後のアクティビティーでは、皆でバスケットボールやバレーボールをしたり、パーティーをしたりしました。土曜日の選択アクティビティーでは、エンゼルの試合を見に行きました。大谷選手を見ることができ、思い出になりました。休日の週末アクティビティーでは、ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドに行きました。アメリカでできた友達と更に仲を深める機会となり良かったです。暇な時間にはいつも友達と散歩に行きました。散歩途中で海外の人に声を掛けられ、お互いの事や自国について話したりしました。



### 3 感想等

二週間というあっという間の海外生活でしたが、語学学校で学んだことの他に、実際に海外に行ったからこそ得たことや気づいた事が沢山ありました。1つ目は、色々な国によって英語の癖があることです。イタリア人の英語はイタリア語やスペイン語の特徴的な‘r’の発音が英語にも表れていました。フランス人の英語はフランス語の独特な訛りが英語に表れていて、聞き取るのが難しかったです。日本人がアメリカ英語を学んでいることに対し、ヨーロッパの国々の人々はイギリス英語を学んでいるので、その違いもあるのだろうと思いました。この経験を通して、これからは学校で学ぶ英語だけでなく、もっと色々な国の言語にも積極的に触れ合い、学ぼうと思いました。

2つ目は色々な国の歴史や文化、さらには自国の歴史・文化についても、もっと学んでいこうと思ったことです。アメリカに行って他の国の人と出会った時、自分はまだ全然その国について知らないと思うことがよくありました。また、そう考えた時、私自身も自国の歴史・文化についてあまり知らないことに気づかされました。もっと色々な国や、さらには自国について知ろう、学ぼうと思いました。

3つ目は、あの国だから、あの人種だから、と差別をしたり偏見を持ったりするのではなく、どこの、どんな人でも、その人を尊重して関わるのが大事だということです。また、色々な国の友達を作ることは、国に対する見方も変わるということも学びました。国同士が政治的に仲が悪くても、その国の人が悪い人だとは限りません。実際、私は中国人に対し、あまり良いイメージを持っていませんでしたが、この留学中に中国の人と話し、友達になると、しだいに中国や中国人に対するイメージも変わっていきました。

最後に、今回の海外研修を終えて、もっと色々な国・地域に行ってみたい、その国で学んでみたいと思う気持ちがさらに強くなりました。そして高校卒業後の進路志望として、大学は国際関係などの学部に行ってみたいと思いました。



(写真はカリフォルニア科学センターに展示されていたスペースシャトル・エンデバー号です)



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	EF Academy ボーディングスクール ジェネラルコース		訪問国	イギリス	
校内発表会の有無	有	(有の場合)	日にち	11月(予定)	(対象) 学年
学校名	静岡県立袋井高等学校	氏名	鈴木翔子		学年 2

### 1 目的・応募理由

高校生の間に留学に行くことが私の中学時代からの目標でした。「高校生という多感な時期に、海外に行き様々な文化を吸収したい」。高校を卒業したら外国語大学に進学し、高校時代のその経験を活かし、語学力を向上させたい。高校時代に海外に行けることは、私のこれから先の人生に大きく影響し、また成長させてくれる重要な経験になる確信がありました。しかし、現実的に留学を考えだした際、留学資金の問題が出てきました。私の家は父が自営業なこともあり、経済的に余裕があるわけではありません。それでも私は留学の目標を諦め切ることが出来ませんでした。両親も私の留学に賛同してくれましたが、留学資金の話は大きな問題であり続けました。留学について先生とも話を進めていく中で先生に紹介していただいたのがこの海外体験促進事業費補助金で、今回応募させていただきました。



### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

私は今回、3週間の短期留学をイギリスで行いました。授業は一コマ80分で、日本で普段受けている授業時間よりも少し長かったです。私が通った語学学校はCEFERに基づいてクラス分けがされており、私はB2.1というクラスに割り当てられました。それぞれのレベルに合わせた教科書が配られreading, writing, listening, speakingを満遍なく学びます。クラスメイトとの対話がメインに授業が進められ、日本の英語の授業とは違う授業に、初日は強い衝撃を受けました。当たり前ですが、先生が話すことは全て英語。私のクラスには日本人の子が私以外にいなかったため、途中で日本語で意味をお互いに確認する機会も当たり前がありませんでした。私は、自分の単語力の乏しさを感じ、わからない単語には印をつけ、すぐに調べ、それぞれの授業専用の単語ページを作り、授業に臨んでいました。

寮での生活も私にとってはとても新鮮でした。三人部屋で、フランスとベルギーから来た同世代の子と生活をしました。英語を話すこと以外に二人とコミュニケーションを取ることが出来ません。二人とも私よりも英語力が高かったので会話についていくことには苦労しましたが、日本からのお土産を渡したことで距離が一気に縮まりました。特に、フランスから来た子は日本に興味を持ってくれていたので話す機会が多かったです。今日はどんな1日だったのか話したり、朝ごはんや晩御飯を一緒に食べに行ったりし、休日にはロンドン旅行も楽しみました。ただ、朝ごはんを一緒に食べるだけでもいくつもステップを踏まなければなりません。ただ待っているだけで、誰かが誘ってくれることなんて、第一週にはありませんでした。思っているだけでは、状況は何も変わりません。勇気を出して声をかけることで、ナイトクラブに行ったり、海外の日本食に挑戦してみたりなど初めての体験をいくつも経験することが出来ました。



### 3 感想等

3週間という期間ではありましたが、これまで違う国に住み、全く交わることのなかった人たちと出会い、友情を育むことができたことに感動しています。フランス人のルームメイトが「崖の上にポニョ」をピアノで弾いてくれた時には、特に感動が最高潮に達して涙を流しました。日本とは遠く離れた国に住んでいる女子高生が、同じく日本とは遠く離れた国で、私の思い出のある曲を弾いている。ホームシックになる中、その時聞いた曲には言葉にできない思いが募りました。お互いの言語を教えあったり、学校のことを話したり、日本の当たり前が当たり前ではないことを知り、自分の英語力の乏しさを知り、広い視野を手に入れることが出来ました。留学初日、初めての海外に一人で来て、聞き取れない英語と一人も頼れる人がいないことに、3週間やっていく自信を失いました。ただそこで折れずに、日本から持ってきたお土産を手に、これ配り切るまでは部屋に帰らないようにしようと自分に誓い、カフェテリアに一人でいる子に話しかけた私に本当に感謝しています。あの時、踏ん張れたのは、私を応援してくれている先生の存在に気づいていたから、私の夢をいつも全力で支えてくれる両親がいたからです。自分は一人で頑張ってきたのではないと知っていたからでした。多くの方が私の留学にかかわっていて、始まりで躓いたからといって諦めきれない理由があったからでした。あの時勇気を持って、声をかけた私がいたからこそ、そんな私を支えてくれている人たちがいたからこそ、この留学は一生忘れられない経験になりました。家族をはじめ、友人、先生方、私の留学に関わっていただいたすべての人に感謝しています。今回、応援してもらった分、私も恩返しをしていきたいと強く思います。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	Summer Program in Australia		訪問国	オーストラリア	
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	11月11日	(対象)
学校名	静岡県立掛川東高校	氏名	平松 碧羽	学年	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年 3

1 目的・応募理由

私は高校卒業後、英語を専門的に学ぶことができる大学に進学することを考えています。そこで英語を学びながら海外で長期留学することを目標としています。今回の短期留学では、長期留学をするための経験を積んだり、ネイティブスピーカーとの会話を通して英語技能を向上させたりしたいと考えていました。また、私の父が宮大工をしているので、そういった日本の伝統的なものや日本独自の魅力も海外の方へ発信していきたいという思いもありました。今回、私がこの高校生の海外体験促進事業に応募した理由は、私の家庭の経済的な事情もありますが、一番の理由は自分自身の成長のためです。留学を通して私は、将来の夢である長期留学の経験を得ることと自身の英語技能を向上させたいと思いました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

右の写真はホストファミリーと私がホームステイする2か月前からこの家にホームステイしているドイツ人の子です。休日はホストファザーにMt. GravattやVictoria Pointに連れてってもらいました。海を見ながらモーニングティー(リンゴ、クッキー、パウンドケーキ)を食べました。その後家に帰り、お昼ご飯用のパンを買い、お昼ご飯を食べました。ホストファミリーの家では洗濯は3日に1回で、お風呂はシャワーで毎日入れますが1回4分位でした。



語学学校には2日間行きました。語学学校では自分の持っている英検の級でクラス分けされました。語学学校では英単語(右写真)や長文読解を行いました。語学学校には日本人や中国人、ベトナム人などがいました。日本の学校との違いとして授業中に物を食べてもよかったり、机の配置やいすの配置が小集団のような形になっていたりしたことが挙げられます。

現地の学校にも1日行きました。その学校は小学生から高校生までが在籍しています。そこでは日本語クラスに入り日本語を教える側になったり、英語クラスに入りオーストラリアの動物について学んだりしました。その授業が終わった後、移動動物園のような感じで実際に動物たちを見ました。学校が終わった後はeat streetという世界各国のストリートフードが食べられるナイトマーケットに行きました。

学校に行かない日はブリスベン市内を散策したり、ムービーワールドに行ったり、

1. Habit
2. Routine
3. Video clip
4. Time capsule
5. Keen on
6. Hang out
7. Go out
8. Feelings
9. Voluntourism
10. Experience
11. Poverty
12. Organisation
13. Project
14. Abroad
15. immigration
16. Migrant
17. information
18. Mistake
19. Phrasal verb
20. Dialogue

CONTEXT: \_\_\_\_\_

ローンパインコアラサンクチュアリに行ったりしました。



### 3 感想等

私はこの語学研修を通して学んだことや感じたことが数多くあります。その中でも特に感じたことは、「今の自分の英語力でも会話ができる」ということです。ホストファミリーや現地の方々に助けられた部分もたくさんありましたが、日常生活の会話にはあまり困ることはありませんでした。

オーストラリアに行って日本との違いをいくつか見つけることができました。一つ目は水回りです。ホームステイ先では食器など洗い物はすべて食洗器で行っていました。食洗器に入らないような大きな鍋などは手洗いをしますが、泡がついたままのものをタオルでふき取り片付けていました。また水筒のような蓋がついているものはしっかり乾く前に蓋を閉めてしまうため、私が水筒を借りた際に口をつける部分にピンクのカビが生えていました。洗濯物は3日に1回程度で白いもの、靴下、それ以外で分けていました。お風呂は1日1回で4分程度でした。二つ目は家具の高さです。日本よりも身長が高いオーストラリアでは机やキッチンが高く、私的には日本よりオーストラリアの家具の方が高さが合っていて使いやすさを感じました。三つ目は電柱です。日本ではどこを見ても視界に入ることの多い電柱ですが、オーストラリアではなかなか見つけることができませんでした。

逆に日本と同じで驚いた所がありました。それは車が左車線だということです。私はオーストラリアにいくまで海外は車が右車線を走っていると思っていました。しかし実際行ってみて1番最初に衝撃を受けました。ホストファザーに聞いてみたところ、イギリスやその植民地だった国は左車線だということがわかりました。

このような日本には気付けられないような経験ができて本当に良かったです。私は将来長期留学を目標にしているので今回の経験を生かしていきたいです。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	海外異文化体験		訪問国		アメリカ合衆国	
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> ・ 無	(有の場合)	日にち	未定	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 学校 ・ 学年
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	柴崎琴乃		学年	2

### 1 目的・応募理由

私は将来海外の方々と関わる仕事をしたいと思っています。グローバル科での海外の方との交流、海外の文化や社会についての学習を通し、自分自身の視野や価値感を広げたいという思いがはっきりとしたものへと変わっていきました。グローバル社会に欠かせない語学の上達はもちろん、日本で学ぶだけでは得られない経験をすることで、将来の夢を叶える大きな足がかりとなるチャンスを得たいと考え、グローバル人材育成事業（短期留学）に応募しました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

日本時刻の12月2日に出国し、同日の昼にロサンゼルスに到着しました。ホストファミリーと対面し5日間お世話になりました。3日は日曜日だったため、ホストファミリーとビーチに行き、クリスマスパレードを見ました。4日から6日は、ロスアラミトス高校で、6回プレゼンテーションを行い、それ以外の時間はバディの授業に出ました。7日はクラス研修でディズニールランドを楽しみ、8日はUCLAのキャンパスツアー、ロサンゼルス市内研修を行いました。

ホストファミリーとは文化や衣食住などの文化の違いについて沢山話しました。日本のお土産もとても喜んでくださいました。ホストマザーはバングラデシュ出身なので、アメリカでよく食べられるような食べ物以外にもメキシコやバングラデシュの料理など、毎日違う料理を作ってくださいました。様々なお店にも連れて行ってくださり、日本とは違うドリンクや食べ物、日本にもあるチェーン店の日本との違いや、商品の配置の違いを実感しました。12月は街中がクリスマス一色で、家の周りでもクリスマスイベントの募金を行っていました。



クリスマス装飾



マーケット

### 3 感想等

今回の海外研修を通して多くのことを学びました。初めての海外渡航で、日本との違いや衝撃的なことが数多くありました。

例えば街並み一つをとっても、車線の多さ、建物や駐車場の大きさ、一軒家が多くほとんどが平屋で、そこから領土の大きさを身をもって知りました。食べ物はサイズも量も日本の2倍はあり驚きました。ホストファミリーが日本の家庭料理は工程が多いと言っていました。それが日本の繊細な味を生み出しているのだろうと考えました。店や道では話しかけてくる方が多く、気さくで明るい国民性を感じましたが、日本ほど丁寧な接客ではないようでした。ペットボトルやウォーターサーバーを使い水道水は一切飲まないこと、シャワーの水量が少ないこ

とを知り、水道から飲み水が出ることのありがたさ、日本の水の豊富さ、日本の技術の高さを実感しました。このように、海外に出て日本を客観的に眺めるという体験はとても貴重でした。

ロスアラミトス高校との交流はホームステイと並びこの研修の最も重要なものでした。20人以上の生徒を目の前に、2年間探究してきたテーマについてグループごとに一人一人発表した一回目のプレゼンは、聴衆にとってはよくわからない発表をただ聞くだけという時間になってしまい、ほとんど聞いてもらえない状況に焦りを感じました。そのため2回目以降はこちらから問いかけ、聴衆の方を見て話すことを意識し、また日本の文化を感じてもらえるようにお土産のお菓子を配る等、雰囲気作りにも気を配りました。2日目からは内容を日本の文化紹介に切り替え、折り紙を使った発表を行いました。1回目、私は鶴の折り方を説明しました。初めて折る生徒が多く、どう説明すべきなのかとても戸惑い時間がかかり、最後まで完成させることのできなかつた生徒もいました。そのため次からは全員が見やすい位置に移動し、適宜回りながら説明したことで、全員が余裕を持って完成させることができました。また、折った後も遊べて比較的折りやすい種類に変更しました。手裏剣や紙飛行機は、飛ばして飛距離を競ったり、ハートは内側に手紙を書いたりといった工夫をしました。そのおかげで、聞いてくれている生徒たちの表情が明らかに変わり、楽しんでもらえるようになりました。試行錯誤しながら何度も発表する経験を通し、聴衆の興味を引く工夫がいかに大切かを学びました。同時に、英語力の足りなさ、意思疎通の甘さなどを痛感しました。

ロスアラミトス高校ではバディの授業にも参加しました。日本にはない教科、より専門性の高い授業を生徒たちが受けていました。席の並べ方も様々で、日本と同じようなクラスもあれば、向き合っていたりグループのようになっていたりして、授業に合わせてアレンジされていました。全校生徒が約3000人、昼休みは人で溢れていました。校則が少なく、髪の色や服装も自由、多言語での会話が行われていて、個性が溢れていました。その一方で制服などがなかったためか、日本の高校生ほどには仲間意識が強くないように感じました。校内が広く、校舎が幾つにも分かれていて、体育館以外にもパフォーマンスをするための建物、くつろげるスペースやカフェテリア、中庭もありました。休み時間は7分、移動にほとんどの時間を使ってしまうため、休憩をすることは難しそうでした。生徒が先生の教室に行くという方式にもとても違和感を抱きました。

アメリカではアメリカの凄さや日本との違いを学ぶとともに、日本の良さにたくさん気づきました。長時間英語だけで話すという経験で英語力不足を実感した反面、うまく伝えられないときも、ゆっくり待ってくれたり話しかけてくれる人も多く、何度も言い換えたりボディランゲージを使ったりすれば十分に意思疎通できる事がわかり、自信に繋がりました。同時に、グローバル社会においては、言わなければ伝わらないこと、自分から話しかけ行動することがいかに大切であるかを知りました。今後の私の行動や成長に大きく関わる大切な学びの機会となりました。



豊富な商品の種類と陳列



授業で使うヘルメット

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		海外異文化体験		訪問国		アメリカ合衆国	
校内発表会の有無		有	・ 無	(有の場合)	日にち	未定	(対象)
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	曾我仁咲			学年	2

1 目的・応募理由

グローバル科の海外異文化体験は、これまでの学びの集大成として自分の力を発揮する大切な機会です。特に、高校に入ってから試行錯誤しながら進めてきた探究を、成功も失敗も全部含めて、私の糧に出来るよう頑張りたいと思いました。私は海外の人と接する職業に就くという目標を持っています。異なる背景を持つ人々と直接関わり、文化を肌で感じながら知るといふ経験は何にも代えがたい体験になると考え、応募しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

12月2日から6日までの5日間ホームステイをし、その間の3日間ロスアラミトス高校に行きました。

土曜日の夕方頃にホストファミリーの家に到着しました。車の座席もベッドもとても高く、鏡も顔の上半分しか映らないので、まるで私が小人になったかのような気分を味わって面白かったです。



日曜日には、ビーチに行った後、メキシコ料理のレストランに行き、ナチョスという、チップスの上に溶かしたチーズ、牛肉や鶏肉、クリームチーズ、アボカドなどが乗った料理を食べました。ナチョスは、今回のアメリカの外食で最も美味しかった料理です。夜には、ナッツベリーファームという遊園地に連れて行ってくださり、スプリーム・スクリームという乗ったことのなかったタイプの乗り物にホストマザーと一緒に乗れたということで、すごく記憶に残っています。



学校が終わったあとには、手作りの美味しい夜ご飯を食べてから外出しました。月曜日には、ノードストームというショッピングモールをポールさんと散策しました。火曜日に行った図書館はすごくおしゃれで大きく、館内には大きな水槽や恐竜の化石があり、美術館と図書館が一緒になったような内装でとても面白かったです。



その後、トレーダージョーズというマーケットで、ブルーチーズの試食をしたり、お土産を買ったりしました。日本では見ないような野菜や果物も多く、ずっと食べたいと思っていたザクロも食べることができて嬉しかったです。

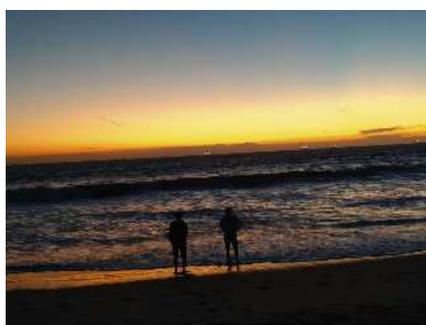
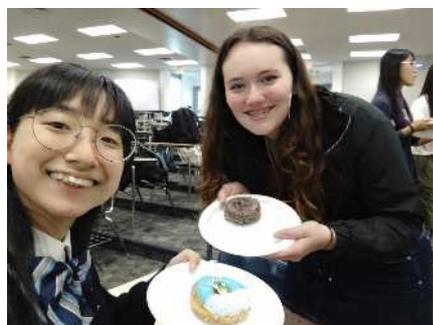


ロスアラミトス高校では、初めに学校案内をしてもらい、学校の様々な設備に目を見張りま

した。体育館に観客席があったり、すごく居心地の良さそうな休憩室があったりと、日本とは全然違うなと思いました。日本の高校ではあり得ないほど校内が広く、3000人程いるという生徒数の多さに圧倒されました。休み時間になるとあふれるように人が出てきて非常に壮観でした。校内ではバディのマリーアさんと一緒に行動し、英語・化学・美術などの授業を受けました。思っていたより日本の授業と違いがなく、すぐに馴染むことができました。昼休みには、マリーアさんとその友達と一緒にご飯を食べました。また、4、5回ほどプレゼンテーションをする機会をいただきました。一日目は予定通り探究発表を行いました。皆すごく真面目に聞いてくださり、質問ももらったのですが、私のリスニング力があまりに低く聞き取ることができず、的はずれな答えを返してしまいました。今までにないくらい自分のことを情けなく思い、もっとリスニング力を磨こうと思いました。また、質問の意味がわかっても、自分の考えを頭の中でまとめることができず、不明瞭な回答をしてしまったことも反省点です。

二日目以降は予定が急遽変更となり、聴衆の生徒と一緒にできるようなことをすることになり、私たちのグループは「アルプス一万尺」を教えることにしました。同じグループのメンバーと一緒に前に出て見本を見せたり、わからなそうな人と一緒にやったりして教えました。思っていた以上にみんな楽しんでくれたうえに、覚えるスピードがすごく速くて、授業終わりにはもうすっかり覚えていました。前に出て踊ってくれる人もいて、思った以上に盛り上がり、私達も楽しかったです。

水曜日の夜にはお別れ会を開いてもらって、海辺でマシュマロを焼いたり、スモアを作ってもらったりしました。バディと最後の時間を、海を眺めながらゆっくりと過ごしました。



### 3 感想等

7泊9日という短い期間でしたが初の海外経験を最大限楽しみながら、多くの新しいことに触れることができました。予想以上に快適な旅で、ロスアラミトス高校のみなさんもすごく親切で授業がすごく楽しくて、もう一回来たいな、みんなともっと話したいなと思うくらい最高の3日間でした。ホストファミリーとは、はじめはよそよそしい雰囲気になってしまいましたが、一緒にたくさん思い出を作り、最後のお別れときにはホストマザーのシンシアさんの涙に、私もあと少しで涙がこぼれてしまうほど仲良くなることができましたので、近い将来必ずホストファミリーに会いに行こうと思いました。毎日新しいことに触れてワクワクの連続で、一日がまるで何日もあるかのような感覚でした。これからも、今回得られた縁を大切にしていきたいです。想像以上の素晴らしい体験をさせていただき本当にありがとうございました。

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		海外異文化体験		訪問国		アメリカ合衆国	
校内発表会の有無		有	・ 無	(有の場合)	日にち	未定	(対象) 全校・学年
学校名	静岡県立静岡城北高等学校		氏名	中村優奈		学年	2

### 1 目的・応募理由

私は静岡城北高校のグローバル科で英語力向上やグローバルな視点の獲得のために日々勉強しています。二年生になりコロナが五類に下がり、多くのものが緩和された中、更に積極的に多くのことに挑戦したいと考えました。日々の学びはもちろんの事、現地で英語を話す方々と暮らし、会話することは、英語力の向上と国際性の育成にとっても有益です。ホームステイ、現地の高校でのプレゼンテーションや、交流の機会が多くあるプログラムは、自分の成長に大いに役立つと考え、是非挑戦したいと思い、グローバル人材育成事業に応募を決めました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

12/2 出国 ホストファミリーと対面、ホームステイ開始

12/3 ダウンタウンディズニー

12/4～6 ロスアラミトス高校交流

12/7 クラス研修（ディズニーランド）

12/8 市内研修(UCLA、エンゼル・スタジアム・オブ・アナハイム)

12/9 帰国



ホストファミリーと

### 3 感想等

今回の研修はとても価値のある経験をたくさんする事ができ、多くの学びを得ました。その中でも自分が研修中に非常に感銘を受けたものを2つ紹介します。

1つ目は日本の高校とロスアラミトス高校との大きな違いです。建物、時間割、授業の受け方、校則など全く日本と違い、事前にアメリカの学校はどのような雰囲気なのかはイメージできたものの、実際に3日間授業を受けてみて違いを実感しました。その中でも私が特に日本よりも飛び抜けていると思った特徴はゴミ箱の設置と授業の選択です。日本の公立校ではコロナの影響で減ってしまったごみ箱が、アメリカではいたる場所に設置してあることに感銘を受けました。高校だけでなく都市部にもゴミ箱があり、通路や道路にゴミが放置してあるというようなことはなくきれいに保たれており、素晴らしいと思いました。日本でもポイ捨てやその他ゴミの問題が解決すべき課題としてあります。城北高校のゴミ箱は捨てられるものに細かい規制があるため、もう少し増やすべきなのではと振り返る事ができ、良い学びができました。



ロスアラミトス高校のシンボル、グリフィン



ゴミ箱

また、授業が自由に選択できる点も感動しました。ロスアラミトス高校は日本の大学のように

に一人ひとりが受けたい授業を選択できかなり自由でした。例えばジャズを学べたり解剖学を学べたりなど、幅広い分野を公立の高校で学べる点は日本と大きく違うと思います。大学ではなく高校から自分の興味を追求できる、または自分の視野を広げたり好きな分野を探したりすることができる環境が整っておりとても魅力的で日本よりも最先端な部分だと感じました。

2つ目はアメリカに住んでいる人たちの親しみやすさです。例えばアメリカの飲食店やショップに何回か行くことができましたがどのお店の店員さんも会ったときは “How are you?”、帰るときは “Have a nice day.” と声をかけてくれました。学校の先生たちも同じように声をかけてくれたり、中にはハイタッチしてくれる人もいました。私が相手の英語を聞き取れず聞き返したときもホストの方たちはゆっくり話してくれたりとても気遣いができる方たちでとても嬉しかったのをはっきりと覚えています。日本の日常生活ではあまり見かけない光景で、初めて会う人に対しても気さくに声をかけてくれて堅苦しきのないふるまいがとても素敵だと思いました。もちろんすべてのアメリカ人が気さくで優しい人とは限りません。ホストファミリーや学校で出会った人たちは素晴らしい人たちばかりで、そのような出会いに恵まれたことに感謝しながらこれからも交流していくことができたら、今回の研修の学びが生きていくと思います。

今回アメリカの良い部分をたくさん実感できとても充実した価値のある体験ができ日本が学ぶべきことも多くあると感じました。しかし、私は日本をすべてアメリカのように変えるべきだとは思いません。日本には日本の良さもあるということを改めて実感する事ができたからです。例えば、食事中や人の話を聞くときのマナーは、日本のほうが遥かに上だと滞在中実感しました。何かと今の日本は世界より遅れていると日本人は言いがちですが、アメリカに行くと日本を見てみると、日本の丁寧で真面目な文化は美しく素晴らしいと感じ、日本人であることが誇りに思えました。日本と他国を比較して他国の文化をすぐ導入しようとしがちですが、そこまでする必要はまったくないと感じました。もちろん、他国から見習うべき点も多くあるというのも心から実感しましたが、同時にこれからの日本は他国を見て同じように後をついていくのではなく、今ある日本の文化や良さを忘れずに成長させていくべきだと強く感じました。

繰り返しになりますが今回の研修はとても価値があり、私の人生の中で素晴らしい出会いがたくさんありました。そして、この円安の中アメリカに7泊も滞在し、高校で授業を受けたり大学やその他観光ができたりしたことは決して当たり前ではなく、先生方やコーディネーターの方などその他多くの人たちの協力の元に成り立ったものでした。今あるこの環境に感謝して今までの自分から生まれ変わり、たくさん努力し成長できる人間になりたいと思います。ありがとうございました。



折り紙講座



市内研修



UCLA キャンパスツアー

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		海外異文化体験		訪問国		アメリカ合衆国	
校内発表会の有無		<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	未定	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	早尻あや		学年	2	

### 1 目的・応募理由

グローバル科では4年振りに海外研修でアメリカに行くことが決まりました。グローバル人材育成事業のことを知り、できるだけ親に負担をかけず、自分の力で海外に行きたいと思い、応募しました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

学校間交流として3日間、カリフォルニア州立ロスアラミトス高校に通いました。学校の敷地は、静岡城北高校の4倍、生徒の数は3000人超え、同じ公立の高校ではありましたが、校舎内はとてもきれいで新しく、設備も整っていました。制服のない学校の中で、日本の学生が制服を着ているのはとても不思議な光景でした。

私達には一人ずつロスアラミトス高校の生徒がバディとしてつき、学校生活を送りました。アメリカの学校では、生徒が受けたい授業を自分で取り、自分で先生のいる教室に行くというのが当たり前です。日本の高校にある教室数の何倍もある学校内を、私達は駆け回りました。とても新鮮で面白かったです。私はたくさんあるクラスの中でも生物の授業を受けました。専門的な英語の用語は分からず、生物のことについては学ぶことはできませんでしたが、アメリカの高校の授業の雰囲気がわかりました。生徒同士で話し合う時間が多く、レクチャーする時間は少ししかありませんでした。担当の先生の方針によって、生徒は授業中もお菓子やサンドウィッチを食べても良いということで、その自由さにカルチャーショックを受けました。

また、ロスアラミトス高校の生徒に向けてプレゼンテーションもしました。これが、私達にとって初めての沢山の人の前でのプレゼンテーションでもありました。最初は日本についての紹介や自己紹介、探究のプレゼンテーションをする予定でしたが、アメリカの高校生達には私達の探究の発表は興味を引くものではありませんでした。たくさん時間をかけて準備した探究の発表でしたが、ホストをしてもらっている生徒たち楽しんで聞いてもらえるのが一番なので、2日目、3日目は日本についての紹介や自己紹介のプレゼンテーションだけを行いました。

今回の海外異文化体験は学ぶこと、大変なことばかりではありませんでした。それ以上に楽しい体験、面白い発見が多かったです。日本に帰る1日前にロサンゼルス観光に行きました。その中でも思い出に残っているのが、エンジェルススタジアムです。大谷翔平選手がエンジェ



ルスからドジャースに移籍することが発表される一日前でした。大きな球場には、エンジェルス  
の活躍している選手の4人のパネルがあり、そのうちの一人が大谷翔平選手でした。私は野  
球にとっても興味があったわけではありませんでしたが、同じ日本人がこんな大きな世界で活躍  
しているんだと改めて驚きました。



### 3 感想等

ロスアラミトス高校で行ったプレゼンテーションで、日本と海外（アメリカ）の感覚の違い  
の現実を知りました。やはり想像と現実は同じではなく、うまく行かなかったり、反応しても  
らえなかったり。変更しなければならない点が多かったですが、自分たちの英語力、人の前に  
立って堂々と発表する力はとてもついたと思います。私はこの海外研修を通して、価値観の違いや、  
アメリカの文化や社会をより深く知ることができました。イメージ通りのキラキラした  
アメリカだけでなく、ホームレスが住んでいるところを見たり、日曜日に教会に教会に行ったりして、  
様々な側面を見ることができ、リアルなアメリカを感じることができました。このよ  
うな貴重な体験の機会を与えてくださり、ありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		短期留学		訪問国		インド	
校内発表会の有無		有 ・ 無		(有の場合)		日にち 3月21日	
学校名		県立磐田南高等学校		氏名		米倉 杏	
				学年		2	

1 目的・応募理由

1つは今のインドを今の自分の目で見て感じたかった。私は小学5年生から5年間ほどインドで生活していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大で日本への帰国を余儀なくされ、インドを知り尽くすことも出来ず帰ってきてしまった。また当時は知識も浅く、日々の生活を送ることだけで精一杯で、当時の記憶もあまり鮮明ではない。そんな私が高校生になり、今の価値観、感覚を持ってインドをどのように受け取ることが出来るのかについてとても興味があった。

加えて、英語力を日本で育てることに限界があると感じていた。知識や語彙は本や授業でいくらでも学ぶことが出来るが、英語力は知識だけで成り立つものではないと思っている。英語を当たり前のように使う環境で今の自分がどれほど通用するのか、この期間でどこまで吸収し成長できるのか、自分の限界を知りたかった。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

12/29	11:40 (JPN) 羽田発 18:10 (IND) デリー着
12/30	10:30 Defence market 11:30 INA market 13:00 Rajipat nagar market 15:00 Surajpur 17:00 Saket select city walk
12/31	09:30 スラムツアー (Inderlok) 12:00 Sarojini nagar market 13:30 Ambience mall
01/01	10:00 Red Fort 13:00 Agrasen Ki Baori 16:00 India Gate
01/02	10:00 ILSC language school 13:00 休憩 (1時間) 17:00 終業 (※A とする)
01/03	A
01/04	A
01/05	10:00 ILSC language school 13:00 Defence market 14:00 Dalgrak



01/06	11:30 INA market 13:00 Leo' s 14:30 Ambience mall
01/07	11:20 Saket select city walk
01/08- 01/11	A
01/12	10:00 ILSC language school 13:30 Mittal tea 14:30 Jamie Oliver Kitchen Cafe 16:00 Ambience mall 17:00 ニューデリー日本人学校
01/13	10:30 Lotus temple 12:00 Dalgark 13:00 国立ガンジー博物館 14:30 ガンジー記念博物館 16:30 Natural' s 17:00 インディラガンディー国際空港 20:00 (IND) デリー発



### 3 感想等

今回英語をインドで学べたことは私の英語に対する価値観を大きく変えました。自分が求めている英語力が世界で生きるうえで本当に必要な英語力とズレていたこと、そして英語を駆使できるまで自分はまだまだだということ、たくさんのことに気付かされました。学校で出身も年齢も全然違う人たちとお互いの意見や習慣についてディスカッションを多くしました。インドのスラムを訪れた際には、決して裕福とは言えない環境下でも同じ集落の人たちと手を取り合い自分たちの生活を作り上げている人たちを目にしました。たくさんの同世代の子や子どもたちの笑顔を見て、エネルギーをもらいました。スラムを訪れて可哀想だと思わなかったことが印象的です。そしてこの出会いを通してもっと世界中の人と関わりたい、そして将来日本を飛び出して世界で活躍できる人になりたいと思うようになりました。

インドは世界で一番私をワクワクさせてくれる、最高に刺激的な国です。それはインドに来た人にしかわかりません。そんな体験ができたことを誇りに思うとともに、インドの良さをもっとたくさんの人に伝えなければいけないと感じます。日本ではインドのイメージは危険や汚いなどネガティブなものが多く残っているからこそ、インドを自分の目で見るべきだと思います。

また高校生である今、海外に行けたことは本当に大きな価値があると思っています。将来の選択肢が無数にある中で全く違う文化や価値観に触れたり、一人で海外で生活したりと外部からたくさんの刺激を受けたことが必ず今後の進路選択に生かされると確信しています。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		異文化体験研修		訪問国		フィリピン	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	6月1日	(対象)	全校 学年
学校名	静岡県立吉原高等学校		氏名	吉田ルナ		学年	2

### 1 目的・応募理由

異文化体験研修での私の目的は、英語を活用しながら異文化理解を深めることです。元々オーストラリアへ行ってホームステイをする予定でしたが、予算等の都合で訪問国がフィリピンに変わりました。オーストラリアでホームステイすることができなくて残念でしたが、日本やオーストラリアではできない経験をたくさんして、肌で文化の違いを感じることを目的にしました。フィリピンは発展途上国なので、気をつけなければいけないことや日本とは異なるところはたくさんあると思いますが、日本の外の世界を知る貴重な体験だと思います。現地の人々と交流をしながら英語のリスニング力とスピーキング力上達させたいです。私は将来、英語を使いながら色々な国の人と関わったり、支えたりしたいので異文化理解を深めることは重要だと思います。そのため異文化体験研修に参加したかったのですが、経済的に困難なので応募しました。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

GLC というセブ島にある語学学校で火曜日から金曜日まで、4日間にわたって英語の授業を行いました。授業は1日7時間で、マンツーマンレッスンが5コマ、グループレッスンが2コマでした。先生は全員フィリピン人で、授業は全部英語で行われました。

マンツーマンレッスンでは、ネイティブがよく使う表現、文章の構成、エッセイの論理的な書き方を覚えたあと、実際に先生と話したり、与えられたテーマについてエッセイを書く練習をしてアウトプットをしました。

グループレッスンでは4人グループに分かれてレッスンを行いました。1つ目の授業ではみんなの前で英語でプレゼンテーションをして、プレゼンテーションで使われる表現を問題を解きながら学びました。2つ目の授業では、4人で英語で話し合っ興味のあるニュースを選び、難しい単語や内容を確認したあと、その記事について英語でディスカッションをしました。

休日では現地のショッピングモールを訪れたり、海へ行ったりしました。ショッピングモールでは日本とは異なることが多く、最初は驚きましたが、フィリピン人の日常生活の様子を自分の目で見る事ができてよかったです。フィリピンの海では常に音楽が流れていて、皆楽しく歌ったり、踊ったりしていました。フィリピン人は私が思っていたより明るくて、私達が寮へ帰るときも日本語で「さようなら！」と手を振ってくれた人もたくさんいました。



### 3 感想等

フィリピンに着いたときはとても不安でしたが、GLCの先生方は全員フレンドリーでとても話しやすかったです。最初は自信がなくてうまく英語を話せなかったのですが、先生方のアドバイスや励ましのおかげで、最終日にはなめらかに英語を話すことができました。人前で話すことも苦手でしたが、クラスメイトや先生の前で短いスピーチをすることもできました。

レッスンを終え、時間が余ったときは先生と英語で雑談をしたり、自分の趣味や日本の文化について話しました。私はこの時間がとても好きで、久しぶりに英語を話すことが楽しいと思いました。自分が興味をもっている内容について話しているときは夢中になり、間違いなど気にせず話すことができ、一番英語のスピーキング力が伸びたと感じた時間でした。先生の中には私と同じ趣味をもっている先生もたくさんいました。先生方の話を聞いて内容を完全に理解することは少し難しかったですが、徐々に理解できるようになり、日常会話も成り立つようになりました。

私はライティングも苦手で、エッセイの授業が一番不安でした。しかし、1回目の授業で初めてエッセイを書いたとき、緊張しながら書いた私のエッセイを先生が褒めてくれて、すごく自信が付きました。自分のエッセイの良いところや直さなければいけないところをわかりやすく解説してくれて、とても参考になりました。それ以降の授業では以前より速く、より論理的なエッセイが書けるようになりました。

文化の面では、フィリピンに着いてから驚くことが数え切れないほどありました。車間距離が狭い、バイクの二人乗りが多いなど、日本では危険だと思われる行為をたくさん目撃しました。寮ではトイレトペーパーが流せなかったり、水道水が飲めなかったり、食事でも自分の口に合うものが少なかったです。日本語も当然通じなくて、日本とは全く違うフィリピンでの生活に慣れるのに苦労しました。私達が訪れたショッピングモールではトイレトペーパーがなかったり、フロアガイドがなかったりなど、日本の当たり前は海外とは違うということに気づかされるが多かったです。その反面、日本にはない良いこともたくさんありました。フィリピンでは高齢者専用レジがあり、高齢者が長い時間待つことなく、スムーズに会計ができるようになっています。他にも、フィリピン人の明るさや笑顔に感動しました。日本人より暖かく、皆笑顔で私達を歓迎してくれました。海へ行った際にも、何も悩み事や心配事がないかのように大声で歌って楽しんでいる彼らの姿が素敵だと思いました。

全体を通して、これまでで一番速く英語が上達し、日本とは遥かに違う文化に触れる機会が多かった研修でした。日本語が通じない、英語でしか会話をすることができない環境に身を置くことが一番効率的な勉強方法だと実感しました。オーストラリアへ行くことができなくて少し悔しい気持ちはありますが、セブ島でしかできない貴重な体験をすることができて良かったです。フィリピンのような発展途上国の文化や人々の習慣への理解も深め、日本の良さにも気づくことができました。セブ島で学んだことを忘れず、自分の将来に役立てるようこれからも頑張りたいと思います。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール		
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	5月31日	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年	
学校名	静岡県立富士宮西高等学校		氏名	嶋村朱梨		学年	3

1 目的・応募理由

私には、看護師になるという夢があります。赤十字海外派遣にも興味があり、「国境、民族、宗教を越えてわたしたちにできること」とあり、いつか海外に行ってみたく、思っていました。また、今の自分の語学力の現実を知り、異文化の人達とのコミュニケーションをどう取るのか、スピーキング力を高めながら、柔軟に対応できる自分になりたいと、自分を試すいい機会だと思い、応募しました。

また、行きたい大学の教育方針に、あらゆる「ひと」、多様な価値観を尊重、英語能力が求められているのも一つの決め手でした。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

3/17	18:40 (JPN) 成田空港発
3/18	2:30 (SGP) チャンギ空港 HWA CHONG INSTITUTE オリエンテーション シティーツアー
3/19	AM イントロダクション PM シンガポール文化を学ぶ ワークショップ ボディックペイント
3/20	AM オーディエンスを知り 巻き込むレッスン PM SDGs 講演会全ての人に 衛生的な水を
3/21	AM 説得力のある言葉を使う レッスン PM 都市型野菜工場見学 ハイテク農業を学ぶ ラテンアメリカの子供達との 文化交流セッション
3/22	AM 事実と統計の使い方レッスン PM 自主研修の計画
3/23	AM NEWATER 訪問 PM 自主研修・オーチャード通り



3/24	謎解きしながら ミッションクリアを目指す シンガポール市内
3/25	AM ユーモアのある話し方 PM シンガポールシティ ギャラリー訪問
3/26	AM イディオム・誇張表現で現地 の人のように話すレッスン PM チャイナタウン・リトルイン ディア・アラブストリート
3/27	AM デイバートのレッスン PM カトン地区プラカンナ博物館
3/28	AM パーソナリティと ボディランゲージのレッスン PM ネイチャートレッキング
3/29	AM スピーチ大会 PM フィナーレ
3/30	9:20 (SGP) チャンギ空港発 17:05 (JPN) 成田空港着



### 3 感想等

日本を一步出ると、日本では当たり前だったことがそうでないことがよく感じました。日本では、どこに行っても自由に使える水だが、シンガポールの水資源は、輸入・海水・雨水・リサイクルで賄っており、手を洗うにも必要最低限しか出ないように設定されており、思うように洗えず不自由に感じました。飲み水も、日本の3倍の料金がかかり衝撃的でした。

健康寿命世界一のシンガポールは、至る所で工夫されており、ヘルシアチョイスのマークがついていたり、飲み物にもA～D表示で、砂糖の量・内容表示の義務・広告禁止と、分けをし、病気のリスクを見える化されており、見かけた人達は、健康的でスタイルが良かったです。

フィールドワークでは、アラブストリート、チャイナタウンにも行ったが、宗教的な多様性がよくわかる民族街で、偏見を無くすには知ることが大事、違う宗教に触れ、知っていくことで互いに尊重し、理解することができるから、現地の人々はそこに行くと言います。皆親切で優しく、これは、宗教に限らず、偏見をなくす為にも、「違うからこそ知る」ことは、世界中で必要なことだと思います。

あらゆるところにマングローブなど、緑が多く、生き物と共存していた。国がキレイであり続ける為に、法律も多かった。

現地の人達との交流は楽しく、違う文化、気候の中で、色々な人と出会い、英語の楽しさを学び、自分の目で見て、肌で感じるという経験が、高校生活でできたのは、とても貴重なことで大きな自信にもつながりました。これからも色々なことに挑戦し続けていきたいと思っています。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有		(有の場合)		日にち 7月22日	
学校名		磐田南高等学校		氏名		伊藤菜々花	
				学年		3年	

1 目的・応募理由

私は中学の頃出会ったインドから来た友達の幅広い視点からの意見、堂々とした姿、自分にはない考え方や価値観に影響されて海外研修に興味を持った。その中でシンガポールの語学研修に参加したいと思った理由は、スピーキングスキルの向上はもちろんのこと、シンガポールは発展している国というイメージがあり、実際に自分の目で見て感じて、日本とシンガポールの経済の差や考え方の違い、SDGs に対する取り組みの違いについて学びたいと思ったからだ。さらに、シンガポールは多民族国家な国で、様々な文化に直接触れることで異文化理解を深めたいと思った。

また、日本にいと日本からだけの視点にとらわれてしまうと、自分の中に新しい価値観や視点、考え方を取り入れ、SDGs や経済など世界の課題について今までと違う考え方をもち、解決策を考え、行動できる人になりたいと思い、今回の研修への参加を希望した。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

3/18 シンガポール到着

シティーツアー(マーライオンガーデンパークとガーデンズ・バイ・ザ・ベイ)

3/19 AM：語学研修(パブリックスピーキングとは)

PM：文化ワークショップ(BATIK)

3/20 AM：語学研修(オーディエンスを知り巻き込むレッスン)

PM：SDGs 講演会(すべての人に衛生的な水を)

3/21 AM：語学研修(説得力のある言葉を使うレッスン)

PM：都市型野菜工場見学(ハイテク農業を学ぶ)

ラテンアメリカの人々と文化交流

3/22 AM：語学研修(事実と統計の使い方のレッスン)

PM：自主研修について計画を立てた

3/23 NEWater(下水の再処理施設訪問)

オーチャード通りで自主研修

3/24 語学研修・フィールドワーク(謎解きしながらミッションをクリア)

3/25 AM：語学研修(ユーモアのある話し方のレッスン)



- PM：シンガポールシティーギャラリー訪問
- 3/26 AM：語学研修(誇張表現で現地の人のように話すレッスン)  
PM：チャイナタウン、リトルインディア・アラブストリート散策
- 3/27 AM：語学研修(ディベートのレッスン)  
PM：2グループに分かれて自主研修
- 3/28 AM：語学研修(パーソナリティとボディランゲージのレッスン)  
PM：ネイチャートレッキング
- 3/29 AM：スピーチ大会  
PM：現地大学生とディスカッション  
フィナーレ(表彰、お別れ会)



### 3 感想等

初めての海外で不安なこともたくさんあったが、11人全員でいろいろなことに挑戦して、とても密度の濃い2週間を過ごすことができた。自分のテーマについて研修をして、シンガポールの水不足に対する取り組みや、教育制度の仕組みや考え方を実際に聞くことで学べた。午前中の語学研修のパブリックスピーキングの授業では、最終日のスピーチに向けてたくさんのことを学び、今までの自分より英語で堂々と伝える力がついたと感じた。また、グループごとに自主研修をしたときは、自分たちで目的地や行き方を調べ、わからなくなったときは現地の人に道を聞いて無事にたどり着くことができた。また、英語力だけでなく、BATIKの体験や民族街に行き、様々な文化に触れることができ、異文化理解も深まったと思う。初めての海外で今回のような研修に参加することができて本当に良かったと感じている。2週間の学びを活かし、これからも世界のことを知り、グローバルの人となってさらに新しいことに挑戦したい。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		☑ 有 ・ 無		(有の場合)		日にち	
				未定		(対象)	
学校名		静岡県立沼津東高等学校		氏名		神尾 静香	
				学年		3	

### 1 目的・応募理由

食料問題に興味があり、食料自給率の低さが課題となっているシンガポールで、問題解決への取り組みを実際に現地で見たいと考えた。プログラムには都市型野菜工場見学があり、とても魅力を感じた。また、将来は日本だけでなく、世界の食料問題解決に貢献したいと考えており、そのためには高い英語力が求められる。したがって、語学研修を通して学校の授業だけでは学ぶことができない生きた英語を学びたいと熱望し、今回の研修に応募した。

### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

#### [語学研修について]

基本的に平日の朝8時半から10時半まで語学研修を受けた。語学研修ではパブリックスピーキングについて学んだ。スピーチのコツを学んだり、スピーチの動画を見たり、グループで発表し合ったりした。また、最終日にはスピーチ大会を行い、自分でトピックを設定して文を書き、語学研修で身に付けた表現方法を活かした発表を一人ひとりが行った。私は趣味であるプロ野球の応援についてのスピーチをした。



↑ 語学研修の講師の Dannie さんと生徒たち



↑ 語学研修の様子

#### [探究学習について]

事前に設定した探究学習のテーマは「食料問題」である。誰もが笑顔で食事ができる世界の実現のために必要なことを学ぶことが今回の目的の一つである。シンガポールの食料問題は食料自給率の低さであり、国産のものは全体で10%程度しかないという。実際に現地のスーパーに行き、食料品の生産地を調べたが、シンガポール産のものはわずかだった。シンガポールの食料生産の事情は、私たちが訪問した「KOK FAH」というシンガポール最大の都市型農園で知ることができた。ここでは野菜の生産を体系的に行っており、高い技術力でシンガポールの食料の国内生産を支えている。ここでは多種多様な野菜が生産されており、試食させてもらったがど

れも美味しかった。ただ、シンガポールの面積は東京 23 区ほどしかなく、農園を拡大することが難しいため、生産できる量に限界があることが現状である。しかし、だからこそ狭い面積で効率を重視した新たな農業スタイルがシンガポールに定着したと言える。日本も食料自給率の低い国であるが、フードテックと呼ばれる植物工場を含む食の研究の分野への投資額は低い。シンガポールは 1 億 5700 万ドル投資をしているが、日本では 6780 万ドルほどである。日本でも野菜工場を増やし、計画的な生産を行い、食料自給率の向上に力を入れていくべきだと感じた。また、シンガポールは狭い国土で今以上に食料生産を増やしていくことが急務であるが、具体的に何をすべきなのか、ということが疑問に残った。そのことはこれからも探究していきたい。



↑ KOK FAH でとれた野菜



↑ KOK FAH の様子

### 3 感想等

今回の語学研修では、積極性を心掛けた。私は英語を話すことは苦手だが、授業中は手を上げて発表したり、現地の人とたくさん話をしたりした。そうやって会話を重ねていくうちに、どれだけ英語が拙くても、多くの人は最後までゆっくり話を聞き、理解しようとしてくれることに気が付いた。自分の英語に自信がなくても、とにかく相手に何かを伝えようとする意志が大切であり、そのような経験を何度も繰り返すことで徐々に英語力が身に付くのだと感じた。また、この研修がなければ会えなかったであろう仲間と、かけがえのない時間を過ごすことができた。2 週間はあっという間だったが、この縁を大切にしていきたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修等		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有	無	(有の場合)	日にち	未定	(対象)
学校名	静岡県立焼津中央高等学校		氏名	服部 芽依		学年	3年

1 目的・応募理由

焼津市の外国人人口は5000人を超えており、多言語版広報の発刊や日本語教室の開催などの行政の取り組みがされています。しかし、私は地元の国際化を実感する機会が少ないように感じています。その原因として、住民同士の直接的な交流の不足により、歴史的背景や宗教に対する理解が足りていないことが挙げられると考えました。世界トップレベルの多民族国家・多文化共生社会といわれるシンガポールではどのような取り組みが行われているのか、また実際にシンガポールで暮らす方たちの意見や思いを知ること、グローバル化への変革が求められる地域社会に活かせることがあるのかを学びたいと考え、本研修に応募いたしました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

最終日のスピーチ大会では、興味のある日本史をテーマに設定しました。実際に起こったことと自分の考えを比較をし、「事実と統計の使い方のレッスン」など語学研修で学んだことを反映しながらスピーチをすることができました。また、授業を通して英語力だけでなく、社会で求められる実用的なスキルを身につけることができました。

3 感想等

本研修は、学びの多いとても充実したものでした。その中でも特に印象に残っていることを2つ紹介します。

まずは、シンガポールの多様性についてです。フィールドワークでは、シンガポールの中でもアラブ系の人々が多く暮らすアラブストリートを訪れました。その際に、雑貨店の店主さんにお話

	食朝	午前の研修	食昼	午後の研修	食夕	夜
3/17 (日)		SQ011 成田空港18:40発 → シンガポール・チャンギ空港01:20着		専用車	宿舎04:30	
3/18 (月)	朝食	【歓迎式】 オリエンテーション ※ 研修時間に併せて 種類のないお昼飯に設定	昼食	【探究的な学び】 シンガポールの 観光資源を学ぶ市内研修	夕食	マリ・ナ・ベイ スペクトラ ライトショー 見学
3/19 (火)	朝食	【語学研修・座学】 イントロダクション パブリックスピーキングとは	昼食	【探究的な学び】 シンガポール文化を 学ぶワークショップ	夕食	自主学習
3/20 (水)	朝食	【語学研修・座学】 オーディエンスを知り 巻き込むレッスン	昼食	【探究的な学び】 SDGs講演会 すべての人に従生的な水を	夕食	自主学習
3/21 (木)	朝食	【語学研修・座学】 応用力のある 言葉を使うレッスン	昼食	【探究的な学び】 都市型野菜工場見学 ハイテク農業を学ぶ	夕食	自主学習
3/22 (金)	朝食	【語学研修・座学】 事実と統計の 使い方のレッスン	昼食	【語学研修・座学】 ユーモアのある 話し方のレッスン	夕食	自主学習
3/23 (土)	朝食	【探究的な学び】 チャイナタウンなど様々な民族街を散策 多様性世界ー(2014年)のダイバ(ーシティ)を学ぶ			夕食	自主学習
3/24 (日)	朝食	【探究的な学び】 NEWATER(水の再生技術)訪問 水資源が課題のまちづくりを学ぶ	昼食	【語学研修・フィールドワーク】 探究的な学びのテーマに 沿って自主研修	夕食	自主学習
3/25 (月)	朝食	【語学研修・座学】 イデオム・誇張表現で 現地の人のように話すレッスン	昼食	【探究的な学び】 シンガポールナショナル ギャラリー訪問 スマートシティ構想を学ぶ	夕食	自主学習
3/26 (火)	朝食	【語学研修・座学】 ディベートのレッスン	昼食	【語学研修・フィールドワーク】 課題しながらミッションクリアを目指す 探検系徒歩レクリエーション ※現地スタッフが安全管理をします		
3/27 (水)	朝食	【語学研修・フィールドワーク】 探究的な学びのテーマに 沿って自主研修			夕食	自主学習
3/28 (木)	朝食	【語学研修】 パーソナリティと ボディラングージのレッスン	昼食	【探究的な学び】 ネイチャートレッキング 都市と自然の共存を学ぶ	夕食	スピーチ大会 リハール
3/29 (金)	朝食	【成果の実践】 スピーチ大会	昼食	【成果の実践】 現地大学生との ディスカッション	夕食	【修了式】
3/30 (土)	朝食	専用車 宿舎6:30 → シンガポール・チャンギ空港09:20発		SQ012 → 成田空港17:05着		

を伺うことができました。「異なる宗教や文化を持っていてもお互いを受け入れ、平和を目指して行くことが大切」とおっしゃっていたのが印象的でした。また、アラブストリート以外にも民族街を訪れた際に、日本語であいさつをしてくださる方もいました。現地の方々の優しさに触れ、行政面だけでなく、一人ひとりのおおらかな心がシンガポールの多様性を支えていると実感することができました。また、本研修と同じ時期



ラテンアメリカの子供たちとの文化交流セッション

にシンガポールに来ていた同世代のラテンアメリカの子どもたちや、現地大学生の方との交流の場も用意していただきました。文化交流やレクリエーション、ディスカッションを通して、多くの刺激を得ることができました。

次に、シンガポールの都市計画についてです。シンガポールの開発の歴史と未来について学べるシティギャラリーを訪れました。開発サイクルのスピードの速さに驚くとともに、政府主導の長期的な視野に立った都市計画や、国土の狭い中でも自然との共生を目指した土地利用の仕組みを学ぶことができました。しかし、現地ガイドさんから「思い出のある建物がすぐに取り壊されてしまうのが悲しい」というお話も伺いました。日本でも行われている都市再開発の課題と重ねながら、まちづくりの難しさを改めて思い知りました。

現在の日本では、都市部だけでなく、社会全体においてグローバル化への対応・多文化共生社会への導入が求められています。私は、大学で社会学を学び、地域社会に貢献できる人材になりたいと考えています。本研修を通して、自分自身の価値観を広げ、将来の目標を強く固めることができました。そして、この貴重な体験を実現させるため協力してくださったすべての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有 ・ 無		(有の場合)		日にち 4月23日 (対象) 英数科	
学校名	常葉大学附属橘高等学校		氏名	諸角 木葉		学年	2年

1 目的・応募理由

私がこのプログラムに参加した理由は、プログラムを通して、柔軟な思考力と、幅広い知識を身に付けたかったからです。

以前授業の一環で、海外からの留学生と会話をする機会がありました。その際に日本では誉め言葉になるような言葉も、国境をまたげば相手を傷つける言葉になりうるという事を学びました。例えば日本で「顔が小さいね」というのは王道の誉め言葉ですが、アメリカではその言葉を聞いたとき「脳みそが小さいね」と捉える人が日本よりも高い割合でいます。このように育った国が違えば、価値観も異なってきます。このことを知った私は、このようなアクシデントを軽減するために自分が変われるところはないのかと考えました。それがどんな場面でも対応できる柔軟な思考力と、その基盤となる知識を得るということでした。また、実際に日本とは異なる国に身をおいて対話をするだけでしか得られないことがあると考え、応募することを決めました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

3月17日	成田空港発 (JPN 18:40)	3月24日	終日 謎解きフィールドワーク
3月18日	チャンギ空港着 (SGP 1:20) AM オリエンテーション PM シティーツアー	3月25日	AM 語学研修 PM シンガポールシティー ギャラリーを訪問
3月19日	AM 語学研修 PM 文化を学ぶワークショップ	3月26日	AM 語学研修 PM 民族街を散策
3月20日	AM 語学研修 PM SDGs 講演会	3月27日	AM 語学研修 PM 自主研修
3月21日	AM 語学研修 PM 都市型野菜工場見学 南米の子供達との文化交流	3月28日	AM 語学研修 PM ネイチャートレッキング
3月22日	AM 語学研修 PM 自主研修	3月29日	AM スピーチ大会 PM 現地大学生との交流 スピーチ大会の表彰
3月23日	AM 下水の再処理施設の訪問 PM オーチャード通り付近を 自由散策	3月30日	チャンギ空港発 (SGP 9:20) 成田空港着 (JPN 17:05)



### 3 感想等

今回のプログラムでは、現地の方や、日本以外の国からの留学生と交流できる機会が想像よりも少なく、当初の目的を達成することはできませんでした。しかし新たに興味の湧いたことがあります。それは「食料自給率」です。

近年の日本では食料自給率の低さが問題視されています。これはシンガポールも同様でした。ただし現在のシンガポールの食料自給率は0.10%で、日本よりも深刻な状況にあります。なぜならシンガポールの地形は平らで、雨が降っても貯水することが難しく、慢性的な水不足だからです。このことを知った時、私は他人事には思えませんでした。いつ日本がシンガポールのような輸入依存(食料)の状態に陥ってもおかしくないからです。もしかするともう既に片足を踏み入れているのかもしれませんが、シンガポールと日本とでは理由が異なりますが、共に食料自給率が低いという現状を知り、SDGsを始めとする様々な対策に目を向けていかなければならないと痛感しました。

今回のプログラムは想像とは異なったけれど、今まで関心の薄かった分野に目をやるという意味で、とても実りのあった2週間でした。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修 等		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有 (有の場合)		日にち	5月15日	(対象)	全校
学校名	静岡県立静岡高等学校		氏名	花田朝香		学年	3年

1 目的・応募理由

私が、今回の語学研修に応募しようとしたきっかけに、友達が存在が欠かせなかった。そして、かねてからの祖父からの言葉、挑戦しようとした決心した私の心。これらが私を海外に連れて行ってくれた。まず、友達について。高校1年生の頃、何人かの友達が海外留学を経験していた。私はその姿を見て憧れと尊敬の思いが生まれた。私にもできるのかもしれないという、希望が見えた。祖父も、海外留学はこれからの人生において大切なものだ、と何回も私に伝えてくれた。高校2年の春休み、ついにラストチャンスとなった。ここでまた挑戦しなかったら、もう高校生で留学できるチャンスはない、後悔はしたくない。自分の夢である、海外の人に日本の文化を教えるということの第一歩を踏みしめたい、と強く思った。これらのことから、私は今回の留学に応募した。

2 研修内容等



	AM	PM
3/17		18:40 成田空港 出発
3/18	2:30 シンガポール到着 オリエンテーション	シティーツアー
3/19	イントロダクション	シンガポール文化を学ぶワー

	パブリックスピーキングとは	クシヨップ
3/20	オーディエンスを知り巻き込むレッスン	SDGs 講演会 すべての人に衛生的な水を
3/21	説得力のある言葉を使うレッスン	都市型野菜工場見学 ハイテク農業を学ぶ
3/22	事実と統計の使い方のレッスン	探究的な学びのテーマに沿って自主研修
3/23	NEWWATER(下水処理施設)訪問	オーチャード通り散策
3/24	謎解きしながらミッション	クリアを目指す
3/25	ユーモアのある話し方のレッスン	シンガポールシティーギャラリー訪問
3/26	イディオム・誇張表現で現地の人のように話すレッスン	チャイナタウンなど様々な民族街を散策
3/27	パーソナリティとボディランゲージのレッスン	探求的な学びのテーマに沿って自主研修
3/28	ディベートのレッスン	ネイチャートレッキング
3/29	スピーチ大会	現地大学生とのディスカッション
3/30	9:20 シンガポール・出発	17:05 成田空港 到着

### 3 感想等

初めての海外渡航、本当に不安でした。研修中、辛くなる時が何回かありました。でも、仲間が支えてくれたから、この仲間と過ごせたおかげで本当に楽しいものになりました。この研修において、英語で自分の考えを伝える力はもちろん、これからの生きていく術を得ることができたと思います。親元を離れ、仲間と過ごすことの経験は、絶対これからは繋がっていきます。今回、この研修で出会えた全ての人に感謝します。本当にありがとうございました。最高の経験ができて、本当に良かったです。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポール語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有 ・ 無		(有の場合)		日にち	
				4月20日		(対象)	
学校名		静岡雙葉高校		氏名		白鳥佑佳	
				学年		2年	

### 1 目的・応募理由

目的は以下の3つです。

- ・現地の方とのコミュニケーションを通じて、英語の運用能力を向上させる。
- ・2言語教育政策によって英語で授業を行いつつもそれぞれの民族の母語も学ぶことができる仕組みが整えられているシンガポールの英語教育の実態を知り、日本の英語教育について、より良い英語教育について考える。
- ・多国籍企業を含む多くの国際企業の拠点となっているため様々な場面で異なる文化や価値観を受け入れる柔軟性が求められるシンガポールにおいて、現地の方とのコミュニケーションを通して異なる文化を受け入れる柔軟性、様々な人々と協力する力を向上させる。

### 2 研修内容等

2週間に渡り、同世代の高校生10名と共にシンガポールのHwa Chong Institute 学生寮に滞在。

【土日】朝食を食べたら校外へ。昼食は自由昼食。

23日 NEWATER 見学、オーチャード通りで買い物。

24日 市内でミッションに取り組む。寮に戻って夕食。



### 3 感想等

今回の研修では、語学はもちろんのこと、シンガポールの観光業や農業、水不足対策などさまざまなことを学びました。今回はその中でも印象的だったことを2つお話ししようと思います。

ひとつ目は街中で耳にしたり目にしたりする言語の多さです。私が研修中に会った方々は英語はもちろん、中国語やマレー語などお友達とは違う言語でお話されている方もいて圧倒されました。さらにシンガポールでは街中の看板表示も英語・中国語・日本語・マレー語など日本では考えられないほど多くの言語で書かれていて、シンガポールの多様性を具現化したようでした。世界の結びつきが強くなり、海外からやってくる人が増えている現代で、日本でも英語を使いこなせる人材の育成が必要であると考えた私は、なぜシンガポールでは多言語話者が多いのか考えてみることにしました。13日目の活動で南洋理工大学の学生さんとお話をした際に、日本では英語の発音が間違っているかもしれないため英語で話すことが恥ずかしいと思っている人が多いが、シンガポールではどうなのかという話題になると、シンガポールでは「シングリッシュ」という英語の括りが存在していて、英語の発音を忠実にすることに重きを置いていないこと、英語を話さないとコミュニケーションが取れないから話さなければ生きていけないことをお話ししていただきました。これを聞いた私は、シンガポールに住む方



が多言語を使いこなすことができているのは、シンガポールでは2言語教育という方針が取られており、幼い時からいくつかの言語に触れる機会があること、また公用語が英語であるため生活する上で英語が必要不可欠であることがシンガポールの高い言語力を作り上げているのだと思いました。さらに南洋理工大学の方に言語を覚えるために良い方法をお聞きした際に、「アウトプット」ということばがどの学生さんからもでてきたため、日本人の英語力の向上のためには「アウトプット」の機会をさらに作っていくことが重要なのではないかと考えました。日本の英語教育を考えてみると単語や文法、長文読解などいわゆる「インプット」の時間の方が英語を使って自分を表現する時間とくらべて圧倒的に長いことに気がつきました。今回の研修の中では午前中の授業も、午後のアクティビティも英語で自分の考えや思いを表現することが多く求められ、実際に自分で「アウトプット」の大切さを実感することができました。この2週間を通して臆せず発言することが自分の成長につながることに、また自分の知ってる単語を紡ぎ合わせた拙い英語であったとしても意外と通じることを体感することができたことは英語を話すことへの恐怖を和らげてくれました。日本でもこのようなことを多くの方が実感する機会を作ることができれば、日本人の英語運用能力を高めることができると思うので、じぶんなりにできることを考えていきたいです。

ふたつ目はシンガポールが多文化共生が成り立っている社会であるということです。シンガポールに住む人々には主にマレー人、インド人、中国人、ヨーロッパの混血の4つの人種がいて、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教など多くの宗教も存在していました。実際に私がシンガポールの多文化性を感じたのは9日目から11日目の市内研修でした。この数日間でリトルインディア、チャイナタウン、ムスリム寺院、アラブストリート、プラナカンなど多くの場所を訪れ、様々な文化を体験することができ、多文化共生を肌で感じるとともに、東京23区ほどの広さしかないシンガポールにこれほど多くの文化が共存しているという信じ難い事実には驚きを隠せませんでした。シンガポールに住んでいる方それぞれが互いの文化を否定せず受け入れ、尊重している姿はとても素敵でこれこそ今の世界に必要な考え方なのではないかと思いました。このシンガポールの方々の考え方は異文化間の関わりのみならず、基本的に自分と違う考えを受け入れることから始まる他者との関わりにおいても大きな役割を果たすと思います。何事においても初めから否定的に捉えるのではなく、寛容に他者の意見に耳を傾けられるような姿勢を個人個人が身につけることが多文化共生社会を形作るために重要だと思いました。

この事業に参加することは私にとって大きな挑戦でしたが勇気を持って一歩踏み出してよかったと思います。楽しいことも大変なこともたくさんありましたが、この2週間で私は多くのことを学び、大きく成長できたと感じています。そして私にはこの研修を通して私が感じたこと、思ったことを他者に伝え、やらなければならないと思ったことを実際に実行に移していくという使命があると感じています。個性豊かな10名の仲間と実際に海外へ行って、日本との違いを肌で感じることでできる素晴らしい機会をいただいたからにはこの経験を自分の成長、社会の成長に繋げていくことができるよう、これからも様々なことに主体性を持って取り組んでいきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	シンガポール研修		訪問国		シンガポール		
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	4月20日	(対象)	全校・ <input checked="" type="checkbox"/> 学年	
学校名	静岡雙葉高校		氏名	成島かれん		学年	2

1 目的・応募理由

私の将来の夢は日本と外国の架け橋となる外交官や、日々外国人と関わるキャビアテンダントになることだ。そのため、夢の実現には実践的な英語のスキルが求められる。この研修では、午前には語学研修が行われ、最終日に現地の大学生と話す機会が設けられており、自分の伝えたいことを英語で伝える機会がたくさんあると思い、参加を決意した。また、自分が今まで積み重ねてきた英語の知識を実際に活用し、のばしていきたいと思った。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

3月17日 成田空港からチャンギ空港へ

18日 マーライオン、マリーナベイサンズ、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ 観光

19日 授業、バティック（伝統芸能）体験

20日 授業、シンガポールの水問題について学ぶ

21日 授業、都市型野菜工場見学、同世代のメキシコ人との交流

22日 授業

23日 ニューウォーター工場見学

24日 市内観光

25日 授業、シティギャラリー 見学

26日 授業、チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリート 観光

27日 授業、自主研修

28日 授業、ネイチャートレッキング

29日 スピーチ大会、現地大学生とのディスカッション、フィナーレパーティー

30日 チャンギ空港から成田空港へ



↑マーライオンと  
マリーナベイサンズ



↑バティック体験



↑都市型野菜工場

### 3 感想等

シンガポールは様々な民族や文化が共存し、多くの言語と価値観が存在しているため、日本人が主に暮らしている静岡の地を、より外国人にとって住みよい街にするためには何が必要かというテーマで二週間活動してきた。結論として、二つのことが必要だと考えた。

一つ目は、多様で、本格的な民族料理を提供する店を増やすことである。私がシンガポールで驚いたことの一つに、民族料理店が多く集まるホーカーセンターという施設がいくつか存在していたことが挙げられる。人間の三大欲求の一つでもある食欲、誰もが海外に行って地元の味が恋しくなるであろう。静岡には、カレー屋や韓国料理屋、ベトナム料理屋などがあるが、その数は少なく気軽には行けない距離にあると感じる。しかし、ホーカーセンターのように本格的な地元の料理が食べられる店が増えれば、日本、そして静岡に住む際の敷居が低くなり、実際に住んでいる人にとっても、いつでも地元の味が食べられるため、日本で暮らすストレスを少しでも軽減できると考えた。

二つ目は、わかりやすい表記の工夫である。実際日本では、ほとんどの表記が日本語で書かれ、しかも単語だけで書かれているわけではなく、短文で書かれていることが多いのではないだろうか。しかも、日本語表記は、漢字、カタカナ、ひらがな、時に英語など複雑な表記をするように思われる。ネイティブでない外国人が、暮らしていく中では、正しくその意味を、自分で理解する必要がある。そのため、ピクトグラムややさしい日本語、そして多言語の使用を増やすことが、より簡単にそしてより伝わりやすい表記につながると考えた。また、一つ目と関連して、ハラールへの配慮として、飲食店で使われている食材をわかりやすく絵で伝えることも必要だと考えた。

したがって、外国人にとって静岡を住みやすい街にするためには、多様で本格的な料理店を増やすこと、表記を誰でもわかりやすいように工夫することが必要である。



↑フィナーレパーティーにて



↑ホカセンターでチキンライスを食べる



↑絵と多言語で説明



↑伝統的な服を着てスピーチ大会

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有 (有の場合)		日にち 5月13日		(対象) コース	
学校名	静岡サレジオ高等学校		氏名	秋田藍		学年	高校1年

1 目的・応募理由

「静岡発世界へ」は、私のダンスの師であり、2007年ミスユニバース世界一の森理世さんのスローガンです。このフレーズを胸に私は幼少期からダンスを続け、今年で13年目になります。昨年と4年前には、中国浙江省から学生が私の通うダンススクールに訪れました。その際、母国語が異なっても英語を使って彼らと交流できたことに感動したと同時に文化の違いを実感し、新たな視野や考え方を得ました。私は多くの国の文化や歴史、良さを知り、経験を通して見識を広め、それを活かすことで人の役に立ちたいと考えています。静岡は富士山や温泉、伝統的な行事など、日本文化の一端を体験できる素晴らしい場所です。静岡の魅力を世界に広め、異文化交流を通して新たな価値観を学び、地元に戻元することで、静岡と世界の架け橋となり人々に喜びや理解をもたらしたいです。シンガポールでの留学を通じ国際的な視野を広げ、異文化を尊重するスキルを磨き、今後の夢の実現に向けた取り組みに活かしたいと思い、この研修に応募しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

午前		午後
3/17	渡航	
3/18	・オリエンテーション	・市内研修
3/19	・座学（パブリックスピーキングとは）	・batik ワークショップ
3/20	・座学（オーディエンスを知り巻き込む）	・wateroamによる講義会
3/21	・座学（説得力のある言葉）	・ハイテク農業/交流セッション
3/22	・座学（事実と統計の使い方）	・自主研修
3/23	・NEWater 訪問	・自主研修
3/24	謎解きフィールドワーク	
3/25	・座学（ユーモアのある話し方）	・Singapore city garary
3/26	・座学（誇張表現）	・民族街の散策
3/27	・座学（ディベート）	・自主研修
3/28	・座学（personality body language）	・ネイチャートレッキング
3/29	・スピーチ大会	・現地大学生とのディスカッション
3/30	帰国	

### 3 感想等



シンガポールは一年を通じて高温多湿で、大きな気温の変化はありません。3月の平均気温は約29度で、南国のような暖かさが特徴です。降水量が多く、湿度も高いため、熱帯の雰囲気が漂います。

観光地として力を入れているシンガポールは、街と水が美しいという印象が強かったです。市内研修の際にインタビューをしたカナダからの一人の観光客は、その美しさを称賛していまし

た。水処理施設の展示やハイテク農業の見学など、技術と環境への配慮が際立っているように感じました。

厳格な法律や治安の良さは、シンガポールの特徴です。多民族国家であるため、法の厳格さが社会の安定を支えている、と現地の大学生が話してくれました。同じく一般的に治安がよいと言われている日本は社会的圧力が、シンガポールにおける厳しい法律の役割を果たしているのではないかという話も聞き、現地大学生とのセッションは日本の良さにも気づくことができた貴重な機会でした。

また、”city in the garden”と言えるほどに、あらゆる場所に人工的に花や木を植え、良い景観を維持するための管理を徹底している様子が見られました。自然を大切に、街のいろいろな場所に分別ボックスが見られるように、環境に配慮した様子などから、SDGsへの取り組みもよく感じました。

民族街では、多様な文化や歴史が色鮮やかなウォールペイントや建物から伝わります。たくさんのお店や店が並び、歩いているだけでも多様な民族の雰囲気を肌で感じ、異文化に対する私の興味の幅を広げました。市内研修の際に訪れた、安価で食事の取れる屋台や店舗を集めた屋外複合施設であるホーカーセンターでは、チキンライスやチキンヌードル、小籠包など、色々な料理を楽しみました。

シンガポールの清潔な街並みや効率的な交通システムは印象的ですが、常に斬新で新しい建物が作られていくのと反対に、古い建物が次々に取り壊される様子は、観光客にとっての喜びと同時に地元民にとっての喪失も意識させているようです。

総じて、シンガポールは多様性と技術の融合が魅力の観光地であり、その持続可能な発展には環境への配慮と社会の安定が不可欠であることが研修を通してわかりました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポール語学研修		訪問国		シンガポール	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	5月13日	(対象)	コース
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	大津紀乃		学年	1年	

1 目的・応募理由

私は将来英語を使った仕事につきたいと考えており、現在通学している高校ではグローバル教育や英語中心のコースで学んでいます。将来は英語をあくまでも社会貢献の手段として使いこなせるようになることを目標に日々頑張っています。

そこで今回の語学研修を知り、国際人になるために必要なスキルを身につけられる機会と考え是非参加したいと思いました。

2 研修内容等(語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど)

- 3月17日 成田空港発
- 3月18日 ・オリエンテーション・シティーツアー(マーライオンパーク、マリーナベイサンズ、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ)
- 3月19日 ・語学研修(パブリックスピーキングについて)・シンガポール文化を学ぶワークショップ・自習
- 3月20日 ・オーディエンスを知り巻き込むレッスン・SDGs講演会すべての人に衛生的な水を・自習
- 3月21日 ・説得力のある言葉を使うレッスン・都市型野菜工場ハイテク農業を学ぶ・ラテンアメリカの子供と文化交流
- 3月22日 ・事実と統計の使い方のレッスン・探求テーマに沿った自主研修・自習
- 3月23日 ・NEWWATER 訪問・オーチャード通り付近自主研修・自習
- 3月24日 ・フィールドワーク・自習
- 3月25日 ・ユーモアのある話し方のレッスン・シンガポールシティギャラリー訪問・自習
- 3月26日 ・誇張表現を学ぶレッスン・民族街訪問・自習
- 3月27日 ・ディベートのレッスン・テーマ沿って自主研修・自習
- 3月28日 ・パーソナリティとボディランゲージのレッスン・ネイチャートレッキング・発表のリハーサル
- 3月29日 ・スピーチ大会・南洋理工大学の大学生とディスカッション
- 3月30日 シンガポール・チャンギ空港発 成田空港着 解散



### 3 感想等

シンガポールは熱帯雨林気候であるため一年を通して高温多湿である。そのため、日本とは違う環境に慣れないところもあったが、日本とは違う生活様式や文化について学ぶことができた。午前中に行う授業ではパブリックスピーキングについて学んだ。パブリックスピーキングに必要なスキルを仲間と学ぶことで、英語力だけでなくコミュニケーション能力も高めることができた。また、シンガポールの歴史や文化を通して、異文化理解を深めることができた。訪問した民族街(リトルインディア、チャイナタウン、アラブストリート)では各民族独自の文化が見られた。イスラム教やヒンドゥー教のタブーや生活様式について授業で学んだと思っていたが、それはほんのすこしの知識でしかないと実感した。日本は島国で、単一民族であることから、移民や他宗教の文化について知る機会が少ないと思った。シンガポールは国土が狭い印象があったが、マリーナベイサンズやオーチャードストリートなどの有名な観光地だけでなく、訪れた大学や植物園も国土が狭い印象を持たせないほど広く感じた。訪問した南洋理工大學は東京ディズニーランドの約4倍の2k m<sup>2</sup>と広大な敷地面積を有し、アジアで最もレベルの高い理工大學であった。その恵まれた環境からシンガポールは教育に非常に力を入れていると感じた。事前学習を通し、私はシンガポールの教育制度について興味を持っていた。シンガポールはPSLEなど独自の教育制度を設けており、それらがシンガポールの発展の基盤であると考えたからだ。現地の大学生にシンガポールのPSLEについて聞くと、「ストレスフル」という答えが返ってきた。シンガポールの小学生は小学校卒業前にPSLEというテストを受け、そのスコアによって進学コースが振り分けられる。インタビューした大学生のジェームズは、親からの圧や塾に毎日通わなければならないことがストレスだったが、今大学に通えていることや将来のことを考えると、シンガポールの教育システムは子供にとって負担な面もあるが良い面もある、と言っていた。

シンガポールでは、語学力やコミュニケーション能力の向上だけでなく、異文化や他国の産業、教育について学ぶことができた。特に印象に残ったのは大学生との交流会だ。これらの経験は自分の視野を広げ、これからの勉強に対する姿勢や将来について考える良い機会となった。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		シンガポールでの語学研修		訪問国		シンガポール		
校内発表会の有無		有		(有の場合)	日にち	5月13日	(対象)	コース
学校名	静岡サレジオ高校		氏名	坂部 夏希		学年	1年	

1 目的・応募理由

私はシンガポールでの語学研修において自分の英語でのコミュニケーション能力を向上し国際的な視野を広げる機会にするために応募をしました。自身の目標である英語をツールとして使い、国際的に活躍できる人になるためには他国の文化や伝統について学びグローバルな知識と視野が必要だと考えています。特に多文化共生に興味があり、シンガポールは世界の中でも様々な民族が共生し異なる宗教や言語、文化があるにも関わらず争いが少なく日本よりも治安が良いと言われています。今回、多民族国家であるシンガポールにおいてどのような要素から多文化共生が成り立つのかということを知り自身の英語力を向上したいと思い参加を希望しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

<語学研修>

3/19-223/25, 26, 28, 29 8:30-11:30 の日程でパブリックスピーキングについてのレッスンを受けた。レッスンではオーディエンスを引き込み、影響を与えるスピーチの必要性やそれを実現させるために必要な要素について学び、最終日に学んだことを活かしてスピーチを実施しました。

<探求活動>

午後はシンガポールの観光資源や産業施設、民族街を訪れシンガポールの文化について触れた。また現地の人とのミッション活動や大学生とのディスカッションを通してシンガポールの人と交流することができた。自身のテーマである多民族国家の要についてはチャイナタウンやアラブストリートなどの民族街やシンガポール国立博物館、プラナカン博物館での展示から現在の多民族国家が成り立つまでの歴史や人々の意識について知ることができた。



### 3 感想等

シンガポールでの語学研修を通してシンガポールの地形的な要素とそれに適した産業の特徴や文化について探求することができた。シンガポールは国土が狭く、鉱山資源等が豊富ではないにも関わらず、GDP は日本よりも高くアジアニーズの一つとして数えられるように、外国企業を積極的に誘致し経済的に発展した国である。実際に都市のデパート付近には球体の Apple の会社があり日本の企業も多数見かけ、様々な国の商品が売られていたことから異なる国の文化が入り混じっていると感じた。シンガポールには中国系、マレー系、インド系など同じシンガポール人でも異なる宗教や文化などのルーツを持つ人が共生している。私は事前学習を通して異なる文化や宗教が原因で発生する紛争が世界各地で起きていることから多文化共生の難しさを感じていた。しかしアラブストリートやチャイナタウン、リトルインディアなどの民族街を訪れる中で、店の人が私達に対して「韓国人？日本人？」というように声をかけてくれたり「ありがとう」や「こんにちは」というように他国の文化に対して寛容な対応の人が多く嬉しく感じた。日本の文化に寛容という点では、シンガポールの南洋理工大学に Japanese Appreciation Club があり驚いた。博物館の歴史の展示で見たように日本はシンガポールを植民地として支配していた過去があるにも関わらず、日本など他国への興味や好意的な態度を持つ人が多いと感じた。南洋理工大学の大学生に、多文化共生において大切なことについて質問をすると「相手の文化をリスペクトすることが大切だ」と教えてくれた。日常的な面ではホーカーセンターで食事の皿などを返す場所をハラルとノンハラルの2つで区別していて宗教に対する配慮が見られた。このような配慮や意識は多文化共生を実現させる上で大切な要素だと考える。またシンガポールは観光業などの第三次産業が盛んであり、新しい建物を建築するために既存の建物をすぐに壊すことなどから観光客にとっても新たなものを楽しめるという利点があり観光業が発展した要因の一つだと考える。シンガポールは街のいたるところに植物が植えてあり、現地の人にも Sity in the garden と呼ばれるほど緑の多い国だと言える。環境の面では New water や Wateroom での活動から水を再利用するための工夫やシステムについて学ぶことができた。シンガポールは山や川が多くないことから水を十分に使えるようにするために再利用することが必要だということを下処理施設の方に教えてもらった。このように観光スポットなどの新しいものが急速に作られ、より新たなものへ変化が目まぐるしい反面 SDGs への意識が高く再利用が積極的に行われ持続可能なまちづくりが行われていると感じた。今回のシンガポールでの語学研修ではシンガポールの多文化共生がなぜ成り立っているのかという探求を通してシンガポールという国と私の住んでいる地域の違いを知り、これからの将来を考える機会となった。また積極的に英語を使つてのコミュニケーションをとることで、異なる言語や文化へのリスペクトとコミュニケーション能力の向上を達成することができた。

参加したプログラム	済州国際青少年フォーラム		訪問国	韓国	
校内発表会の有無	有・無	(有の場合)	日にち	12月18日	(対象) 全校 学年
学校名	静岡県立吉原高等学校	氏名	飯塚ゆな		学年 2

1、私がこのフォーラムに応募した理由は、異国の文化に触れること、英語力の向上です。私は元々海外に強い興味関心があり、積極的に行動し、良い交友関係を築いていきたいと思ったからです。

## 2、研修の一日の流れ

一日目：（夜から）オリエンテーション（ゲーム）→パネルディスカッショングループミーティング

二日目：開会式→先生方のスピーチ→お昼ごはん→文化的な活動（美術館に行きました）→パネルディスカッション→夜ご飯→休憩

三日目：プレゼンテーションの準備→お昼ごはん→プレゼンテーション準備→休憩→プレゼンテーション準備→夜ご飯→屋内活動（K-POP ダンス）

四日目：文化的な活動（山に登り、景色を楽しみました。その後、天然記念物見学）→お昼ごはん→文化的な活動（みかん狩り）→閉会式→夕食会→各国の文化ショー

初めてフォーラムに顔を出したとき、私は何をしたら良いのか正直わかりませんでした。私にとっては初めての海外でもあったので、移動だけでもすごく疲れました。ですが、同じ年の韓国人のサポーターの子が私と一緒にいてくれて、すごく安心できました。その子に限らず、他の国から来た人たちは、言語の壁があっても理解しようとする姿勢を見ることができ、初日の疲れも心配も気づけばあまりなくなっていました。

部屋には、私を含めて4人いました。（日本国籍2人、中国国籍1人、ハワイ国籍1人）

私はハワイ国籍の子と寝室が同じで、フラダンスを教えてもらったり、学校の違いについて話したりしました。ご飯はビュッフェで、メニューも豊富で美味しかったです。

一日のタスクが終わると、同じグループのみんなでチキン屋さんに行ったり、カラオケに行ったりして、言語の壁があっても楽しめる空間があり、とても充実していました。



3. この活動を通して、様々な文化について知り、触れ、とても良い経験になりました。二日目、三日目ではプレゼンに向けてのディスカッションや、準備をいくつかのグループに分かれて行いました。色々な国からの人が英語を話すので、はじめはその発音になれなかったり、聞くことに集中しなくてはならず、自分の意見を言うのは少し難しかったです。慣れていくうちに、誰が何を言っているのかをしっかりと聞けるようになり、自分の言いたいことも完璧ではないですが、言えるようになっていたと思います。その頃、私は正直英語を話すことが少し怖くて、自信が持てずにいましたが、ルームメイトの子や、一緒に遊んだ人たちが、「あなたの英語は上手だよ！」と何度も励ましてくれたので、今は以前の私と比べると、明らかに自信が持っているといます。それは、英語を話すだけでなく、何事にも恥ずかしがらずにという意味で、すごく私の助けになりました。そのお陰で、プレゼンでも緊張はしましたが、なんとか話し切ることができました。とても励みになりました。そして、初めて海外に行って、とても自信がついたような気がします。他にも「あなたはあなたのままでいてね。」と言ってくれるような人が多く、すごくポジティブになれる環境だと思いました。プレゼンテーションの準備も、先生たちの力をほとんど借りずに、自分たちで考え、作り上げました。そのため、日本の授業とは違い、自分たちの力で作り上げることを学ぶことができ、他人の話をしっかり聞く姿勢や自らの意見を言う力が身についたと感じがします。そして、国際的な問題についても深く考えることができたので、これからの社会についても生かせると思いました。

海外の人と話す時は全て英語なので、少し壁がありましたが、一つ一つの研修内容がしっかりと考えられており、楽しい時間を過ごすことができました。

四日目のカルチャーナイトでは、練習でも少し恥ずかしがっていたのですが、本番では、自信を持って思い切ってパフォーマンスをすることができました。同じグループの子も、「上手だったよ！」と言ってくれたので、とてもうれしかったです。そこでは、様々な国の伝統の踊りや、歌、衣装を知ることができ、とても異文化に触れる良い経験になったと思います。

現地の方の手厚いサポートや、サービスにとっても感動しました。本当にみんな優しくくて、支えになってくれました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	12月18日	(対象)	全校 学年
学校名	静岡県立吉原高等学校		氏名	木下莉緒		学年	2

1

私が国際青年フォーラムに参加した目的は3つあります。

1 つめは、視野を広げることです。

フォーラムには、様々な国や地域からの参加者がいます。このような環境は非常に貴重な経験であり、彼らとコミュニケーションを図ることで自分の考えを深めるのはもちろん、日常生活では全く知り得なかった相手の国の考え方を知る事ができます。生まれ育った環境がそれぞれ異なっているため、私では思いつかないような斬新で新鮮なアイデアに必ず出会うと思います。私はそのような新たな発見を通して、思考力向上を目指します。

2 つめは、語学力を高めることです。

普段の学校生活において海外の人と英語を用いて交流する機会が少ないため、今回のフォーラムでは自分の英語がどのくらい身につについて、また、現地でしっかりと通用するのかを再認識するという事で挑戦の気持ちもあります。フォーラムを通して英語学習のモチベーションに繋げ、自分の英語に少しでも自信を持てることができればと思います。

2

フォーラムの主な日程はプレゼンテーションに向けての準備+ちょっとしたアクティビティでした。初日はパネルごとで自己紹介をしたり、オリエンテーションを行いました。緊張しましたが、現地のサポーターの親切な支えで緊張が少し和らぎ、会話の輪に参加することが出来ました。2日目は、ウォーミングアップも踏まえて現代アートミュージアムに行きました。作品を見て感じた気持ちを英語で共有するのは難しかったですが、台湾から来た参加者とぐっと距離が縮まった時間になりました。パネルディスカッションでは、前々から準備していたトピックについて話し合う時間は十分ではなかったけれど、意見を共有し合いました。トピック自体も難しい上に英語で話さなければならなかったもので、話が詰まってしまったりしたときは身振り手振りをういたり、図を書いたりして相手に伝わりやすいよう意識しました。3日目は主にプレゼンの準備をしました。私は、ビデオ制作に携わりましたが、聞き手がみたいと思うような編集や意見を仲間とたくさん話し合い、短い準備期間ながらも良い動画が作れたと思います。プレゼン発表では、表に立つ役目ではなかったですが、リハーサル以上に良いプレゼンが出来たと思います。また、k-popのダンスレクチャーが夜にありました。楽しみにしていたアクティビティの一つで、全力で体を動かし楽しむことが出来ました。最終日4日目は、プレゼンも無事終了したので、済州島の世界遺産にも登録されている山に登ったり、滝を見たり、動物を見たりと今までの研修の疲れをリフレッシュできるアクティビティでした。済州島の特産物のみかんをたくさん採って笑顔いっぱい袋いっぱいでした。夜に行われたカルチャーナイトでは、それぞれの国の民族衣装を着て、音楽に乗ったり、国の紹介動画を見たりと、どの国も迫力のあるパフォーマンスでとても感動しました。このフォーラムでアジア圏から欧米までの様々な文化や習慣を学ぶことが出来たのでとても良い経験となりました。



### 3

初日はフォーラムに途中からの参加だったため緊張したのはもちろん、不安と焦りも同時に感じました。普段人見知りな性格の私は隣の席に座っていた子に声をかけることさえ緊張した程でした。今振り返ると少しごちない会話だったと思いますが、私の良いスタートの切り方でもありました。

また、ルームメイトが中国からの参加者で事前の知らせもないまま初めてのことで少しストレスを感じる部分もありましたが、一定の距離は保ったまま仲を縮めることが出来ました。

お互いの国の文化や将来の夢について熱く語ったり、社会問題の一つでもあるジェンダーや戦争のことまで話題を広げ、プチディスカッションのようなものを行いました。正直なところ、ジェンダーについてもそうですが国を超えて戦争の話をするとは想像してもいなかったことで触れがたい内容ではあったけれど、彼女の意見を聞くことで自分の意見を深め、また、あくまで日本は日本、中国は中国それぞれの政治体制があることを把握した上で「この考え方が日本に取り入れられたらいいだろうな。」と感じる部分が多々ありました。

ディスカッション・プレゼンの準備/発表に関しては、ネイティブの子もネイティブではない子も英語がとても上手で、聞き取ることは出来たとしても自分の意見を英語でしっかりと相手に伝えることが私の中では一番大変に感じたことです。この壁を少しでも乗り越えられたらと思ひ私は、一度紙に伝えたいことを書き出し、頭の中を整理してから伝えました。今までの学習で、想定外の返答や状況に対応する能力が十分に身につけられていないのだと気がつくことが出来、また、英語に対する意欲が非常に高まりました。参加者のプレゼンの仕方や話し方の自由さが私にとって新鮮でとても刺激をもらいました。

フォーラムを通して初めて自分の英語の反省点に気が付き、新しい発見もたくさんあったので今後の英語学習の糧にしたいと思います。

そして、異文化交流の本質を現地に行くことで実際に肌で感じ、学ぶことが出来ました。例えば、相手の方から日本に興味があり話しかけてきてくれた参加者がいました。異文化交流に大切なことは、相手の国に興味・関心を持ち、それを相手に伝えることだと感じました。そのためには、自国の文化についてある程度知らなければならないことと、興味・関心に対してどれだけ応えられるかが必要だと感じる事が出来ました。今回のフォーラムでは、私はどちらかというと日本について話しかけられた側だったので、相手の国に興味を示し会話を振る側に立てるように、より世界にも目を向けたいと強く感じるきっかけになりました。学ぶことや新しい発見がたくさんあり、充実した研修となりました。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有・無		(有の場合)	日にち	12月18日	(対象)
学校名		静岡県立吉原高等学校		氏名	前田理子		学年
							2

### 1 目的・応募理由

私がこの済州国際青少年フォーラムに応募した理由は2つあります。

1つ目は、プログラムに興味を持ったからです。このフォーラムはパネルディスカッションや異文化交流が主なプログラムです。パネルディスカッションのトピックは4つあり、中でもトピック4である「テロリズムなどのイデオロギー的過激主義の克服や世界紛争の防止に対する行動計画」に興味を持ちました。私は以前からSDGs 16の「平和と公正をすべての人に」に興味を持っていたので、この機会に自分の興味を深め、それを他国の青少年とパネルディスカッションをすることはとても面白そうだと感じました。また、このフォーラムには8ヶ国一地域から154名の青少年が参加しました。私は他国の文化や言語を知ることが好きなので育った国も言語も異なる他国の青少年と積極的に関わり、視野を広げ、自分の中の異文化理解を深めたいと思いました。

2つ目は、自分の英語力を向上させたいと思ったからです。このフォーラムでの活動は基本全て英語で行います。日本では英語の勉強をしてもそれをアウトプットする場面が少ないです。なので、このフォーラムを通じて積極的に英語を使い、自分の英語力や英語のコミュニケーション能力を向上させ、今後の英語学習に活かしたいと思いました。



### 2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

一日目は夜のアクティビティから参加し、同じパネルの人とゲームをし、仲を深めました。

二日目には開会式がありました。開会式ではそれぞれの国が伝統的な衣類を身に着けて臨みました。また、スピーチを聞き、他の国の青少年が積極的に質問をしている姿を見て良い刺激を受けました。これからフォーラムが始まるんだという緊張もありましたが、良い5日間になるように努めようと感じられる開会式でした。午後には歴史的な博物館に行きました。済州島の歴史的な背景を知るとともに、色々な人とコミュニケーションを取ることができました。博物館から帰り、午後からはパネルディスカッションが始まりました。私のパネルのトピックはテロリズムや世界紛争防止の行動計画でした。パネル内で他人の意見を否定しないなどというルールを作りました。実際にディスカッション内でそれぞれの意見を共有したとき、お互いの意見を理解し合うことができ、各国のテロリズムや世界紛争に対する色々な考え方を知ることができ、充実したディスカッションでした。また、三日目の発表に向けてパネ

ル内でそれぞれ役割を決め準備を進めました。私の役割は、発表内容を考えることで、短い時間でしたが周りの助けもあってみんなの意見を取り入れた発表原稿を考えることができました。

三日目は発表に向けて練習をし、実際にそれぞれのパネルの発表をしました。他のパネルのトピックの発表を見ると、人にわかりやすく、楽しく伝える工夫をしていて、見ていてとても興味が湧きました。それぞれのパネルの色々な考え方を知り、とても勉強になりました。夜にはK-popのダンスを学びました。韓国の文化の一つであるK-popはJ-popとはまた違った雰囲気がありとても興味が湧きました。

四日目には済州島内にある山、滝、みかん畑を訪れました。みかん畑ではみかん狩りをし、新鮮で美味しい済州のみかんを食べました。済州島は自然が豊かでとても良い土地だと感じました。夜にはカルチャーナイトがありました。カルチャーナイトではそれぞれの国の伝統的な歌や踊りを披露しました。私達は富士市の踊りである「フジサンバ」を披露しました。舞台に立つ前は緊張と不安でいっぱいでしたが、今までの練習の成果を発揮し、フジサンバを広めることができ良かったです。他の国の発表では、今まであまり知らなかった国の文化を味わうことができ、興味が湧きました。最後にはお互いに今までの頑張りを褒め称え、心から良いフォーラムだったと感じることができました。最終日には日本に帰国しました。

現地では他の国の参加者と一緒に四泊しました。他の国の人と一緒に長時間過ごすことはなかなかない体験だったので、初めは不安でしたが、お互いのことを知るうちに良いルームメイトになりました。また、自由時間にも他の参加者と積極的に関わり、たくさんの友だちができました。

### 3 感想等

私はこの済州国際青少年フォーラムに参加して他の参加者から多くの影響を受けました。初めは緊張でありあまり他の参加者と関われませんでした。初日から自分から意見を述べたりしている参加者を見て、その積極性に影響を受け、パネルディスカッションでは自分なりに意見を述べたり、質問をしたりできました。また、トピックに対する他の国の意見を知ることで今まで自分が知らなかった価値観や考え方を知り、視野を広げることができ、有意義なパネルディスカッションになりました。更に、色々な活動を通して自分から他の参加者に積極的に話しかけることで友達を多く作り、お互いの国のことを共有し、異文化交流ができました。自分はまだまだ知らないことが多いと実感し、もっと他の国のことを知りたいと色々な国に興味を持ちました。この5日間を通して、英語での生活は大変でしたが、参加者一人ひとりにエネルギーを感じ、共に頑張ったことがこれからのモチベーションに繋がるだろうと感じました。このフォーラムで学んだことをこれからの高校生活や将来に繋げていきたいです。



# グローバルハイスクール

遠隔地におけるグローバル人材の育成と学校魅力化

静岡県立下田高等学校



## 1 グローバル教育の概要

少子化に伴う学級減という状況下、遠隔地(僻地)の学校がいかにグローバルな視点で人材育成に取り組み、学校の魅力化を図るかは喫緊の重要課題である。「下田から世界へ発信!!」プロジェクトと銘打ち、グローバルCITYプロジェクトに取り組む開国の町下田市との連携を通して、遠隔地における地域課題を検証し、国際交流と有機的に結び付け、グローバルな視点に立って、積極的に国際社会とかかわり、将来において国際的な役割を担う人材を育成する。

## 2 実施計画と具体的内容

- (1) 姉妹校であるニューヨークのタウンゼント・ハリス高校、下田市の姉妹都市ニューポート市との研修交流を通して国際性を育み英語力を向上させる。
- (2) 下田市グローバルCITYプロジェクトと下田高校グローバルハイスクール事業の連携により、国際交流事業を実施する。
  - ①東京学芸大学との交流事業 ②上智大学と交流事業 ③黒船祭り
- (3) 外国人講師を招き英語による講演を受けることで、学術的分野に触れ語学力を強化する。
  - ①サイエンスダイアログ
- (4) 海外の高校生や留学生と国際交流を行う。
- (5) 「夢講座」と銘打ち、国際社会で活躍する外部人材を招き、自らの可能性を自覚し力強くチャレンジする生徒の育成を目指す。
- (6) スピーチコンテストへの積極的参加

## 3 令和5年度における取組

- (1) タウンゼント・ハリス高校、ニューポート市との交流は、3月20日(水)～3月27日(水)の日程で実施。参加生徒24名。引率教員2名。下田高校の姉妹校であるニューヨークにあるハリス高校への訪問は5年ぶりであったが、心温まる歓迎を受けた。授業参加や交流会などを行い、生徒同士の友好を深めることができた。下田市の姉妹都市であるニューポート市では、熱烈的な歓迎を受けるとともにピザパーティーでは市長代理や関係者、現地高校生などと文化的な交流を行った。下田市から依頼を受けた観光大使の任務も果たすことができた。今回の海外研修では、現地高校生などとの交流を通して生きた英語や文化の違いを味わうとともに、ニューヨークの活力を肌で感じることもできた。

《行程》

- 3/20(水) 19:24 羽田空港発(所要時間12時間55分) ⇒ 19:40 ニューヨーク着
- 3/21(木) 8:00 タウンゼント・ハリス高校(生徒交流) ⇒ 10:00 メトロポリタンミュージアム見学 ⇒ 14:00 ニューヨーク市立大学訪問
- 3/22(金) 8:00～16:30 タウンゼント・ハリス高校(生徒交流)
- 3/23(土) 9:00 ニューヨーク発 ⇒ 14:00 ニューポート市着・歓迎会・市内見学・ピザパーティー
- 3/24(日) 9:00～12:00 ニューポート市内見学・ペリーのお墓見学 ⇒ 13:00 ニューヨークへ移動
- 3/25(月) 9:30 国連本部(ガイドツアー参加) ⇒ 13:00 自由の女神像見学 ⇒ 市内散策・買い物
- 3/26(火) 11:00 ジョン・エフ・ケネディー空港着 ⇒ 13:40 空港発(所要時間13時間)
- 3/27(水) 17:15 羽田空港着 ⇒ 23:00 下田着

## 《事前研修》

11/28 (火) オリエンテーション アメリカ研修の意義 パスポート申請等

12/14 (木) タウンゼント・ハリスについて 下田市開国の歴史

12/18 (月) 保護者会 研修概要 諸手続

12月下旬 タウンゼント・ハリス高校とのオンライン交流会

1/11 (木) 姉妹校締結の経緯 ニューヨーク、ニューポートの歴史等

1/16 (火) ~ 2/29 (木) 12回にわたり  
スピーチや出し物の準備 担当決め

3/8 (金) 保護者会 最終確認

3月中旬 下田市長訪問

3/19 (火) 出発式



(ハリス高生徒との市内トリップ) (英語で自己紹介)



### (2) 下田市と下田高校グローバルハイスクール事業の連携

12月16日(土)、国際協力機構(JICA)で地球環境を研究する野口英美子先生(東京学芸大学)のゼミ生16人と下田高校の生徒17人が地域の魅力や国際問題について話し合った。大学生の中には外国からの留学生も含まれており、和気藹々の雰囲気の中、グローバルな議論を展開した。



(下田の魅力は?)

### (3) サイエンスダイアログ

10月12日(木)、カナダ、トロント出身のTaylor Brinさんを招き、大学での研究「片眼弱視児童の視覚運動機能向上の文化背景比較」を英語で講演して頂いた。講演の終盤には質疑応答タイムがあり、生徒からは研究内容に関すること、母国カナダに関すること、海外生活に関することなどの質問が積極的に出された。生徒からは「勇気を出して質問したら意外と伝わって嬉しかった」や「質問できたことでさらに英語への意欲が高まった」などの感想が挙げられた。



(英語の講義を真剣に聴く)

### (4) 海外の高校生の受け入れ

1学期末にアメリカからの高校生を一人受け入れた。一緒に授業を受け、海外の学校の様子や生活文化を学んだ。すぐに仲良くなり、和やかな国際交流となった。

(5) 11月6日(月)、「世界に羽ばたくアスリート~挑戦することの大切さ~」と題し、カヌースプリント競技日本代表の八角周平さんを招き、講演会を行った。八角さんは高校2年生でポーランドでの世界大会で銀メダルを獲得、今年9月の日本選手権で優勝。来年のパリオリンピックを目指している。

### (6) 英語スピーチコンテスト

グローバル教育の一環として、英語スピーチコンテストにも積極的に参加した。1年生のウィリス・アイラさんが10月に行われた県大会で見事優勝し、11月の東海北陸大会に進出。下田高校は2年連続。

## 4 研究の成果と課題

グローバルハイスクール事業を活用して、ニューヨークのタウンゼント・ハリス高校との交流が、3月に実現。下田高校にとって貴重な行事を再開することができた。今後は下田市との連携を更に強化し、訪問の時期や経費の面で検討していきたい。

# グローバルハイスクール

テーマ：実用的な英語を習得するための課外活動を含めた新たな英語指導法を模索する

静岡県立相良高等学校



## 1 グローバル教育の概要

本校では従来の英語教育に加え、学校全体として「実践を伴う課題解決型学習による探究的な学び」の取組みに力を入れようとしている。そこで、実践的な英語学習や英語話者とのプロジェクト学習を通じてどのようにすれば効果の高い英語教育ができるかというロールモデルの作成に注力した。「アウトプット中心」「課題解決型学習」「地域や他校との交流」をテーマに、英語を手段として使用する場を生徒たちに提供し、英語を第一言語とする他者と交流しながら学んでいく学習方法を本プロジェクトの目的とした。

## 2 実施計画と具体的内容

- (1) 英語で自分の気持ちや考えを表現する力を高める → オンライン英会話の実施
- (2) 英語を使って他者と交流することで生きた英語を学べる機会を増やす  
→ 北海道インターナショナルスクールとの交流、台湾研修
- (3) 牧之原市の国際交流活動に参加し地域貢献をする → 在留外国人向けの日本語教室で指導を支援
- (4) 多様な人々とコミュニケーションを図り協働し、課題解決ができる力を高めるためのグローバル教育を推進する。 → オンライン英会話、北海道インターナショナルスクールとの交流

## 3 各年度における取組

### 【令和4年度】

- (1) サークル活動「グローバルチャレンジ」を発足し、語学学習や牧之原市の国際交流事業を支援
- (2) サークル活動「グローバルチャレンジ」でオンライン英会話を導入  
サークルに所属の生徒に対して、毎週1回フィリピン人講師とのオンライン英会話学習を実施した。
- (3) オリンピックレガシーとしてのサーフィンを中心とした牧之原市の国際交流事業に協力  
東京オリンピックサーフィン金メダリストカリッサムーア選手の受け入れ事業やオンラインミーティング、当該選手主催の財団「Moore Aloha」のサーフィン育成プロジェクトに参画した。
- (4) 北海道インターナショナルスクールと交流提携を結ぶ  
牧之原市のパンフレットを英語で作成するプロジェクトに向けて、毎月オンラインミーティングを実施した。また、6月に HIS の生徒の受け入れを実施し、10月に HIS を訪問した。
- (5) 牧之原市主催の市在留外国人への日本語教室に参加し、日本語指導を支援した。
- (6) 静岡県が実施するモンゴル交流事業において、体験活動や異文化交流を実施



### 【令和5年度】

- (1) グローバルチャレンジの生徒が毎週1回フィリピン人講師とのオンライン英会話学習を実施した。
- (2) 台湾への語学研修
  - ① 台北で新しい企業形態やSDGSに取り組む企業（雑学校）、新竹ではサイエンスパークで最先端の半導体企業を訪問し、グローバル経営について説明を受けた。
  - ② 新竹県立六家高級中学校を訪問し、相互の学校紹介や探究的な取組のプレゼンを行い、取組内容について意見交換した。

③ホームステイ先の高校生たちと、茶（牧之原茶と東宝美人茶）と地域産業・文化について発表し合い、課題や発見について討論した。

④地元家庭にホームステイし、台湾高校生の家庭生活を体験した。また、九折や寺院、竹北市街地を見学し、伝統文化や食文化を体感した。

(3) 北海道インターナショナルスクール（HIS）の生徒との交流

①相良高校の文化祭に HIS の生徒 3 名と外国人教諭 1 名を受け入れ、茶華道やよさこい等の日本文化についての紹介や体験により交流を深めた。（6 月）

②本校の生徒 12 名が語学研修で HIS を訪れ、授業見学やアクティビティを通して海外の文化を体験した。英語による会話で意思疎通ができる喜びを感じることができた。（8 月）

③HIS の生徒と本校生徒が、お互いの学校のユニークな取り組み等を英語で紹介し、各学校ホームページや SNS に投稿するプロジェクトを実施した。月 1 回のオンラインミーティングで準備を進めた。

(4) 授業にオンライン英会話を導入

2 年生普通科の全生徒に、隔週でオンライン英会話を英語コミュニケーションⅡの授業で実施した。

(5) 2 学期終業式において、グローバルチャレンジの生徒が全校生徒に HIS 訪問や台湾への語学研修での学びを報告した。



## 4. 研究の成果と課題

### 【成果】

(1) 英語コミュニケーション能力の向上及び英語で自分の考えを表現する姿勢の改善

今年度の実用英語技能検定では、準 1 級に 1 名、2 級に 4 名、準 2 級に 18 名の生徒が合格した。昨年度は準 1 級、2 級合格者が 0 名であったことから、生徒の英語力は向上していると言える。特にライティングとスピーキングのスコアの向上が見られた。また、授業アンケートにおいて、年度当初は 2 年普通科の 41% が「英語を話す時にとっても不安を感じる」と回答したが、2 学期末はその割合が 25% まで低下した。

(2) グローバルチャレンジ実施による表現力、協働力の向上

他者と英語で考えを伝え合うことができるようになったかという問いに対して、グローバルチャレンジ参加者の 72% が「そう思う」と回答した。また、89% の生徒が、「主体的にプロジェクトを進める力がついたと思う」と回答した。目標達成のために自分の考えを仲間に伝え、協働して様々なプロジェクトを主体的に進める力を身に付けさせることができた。

### 【課題】

全学年・学科の授業において、他者と英語でコミュニケーションを取る機会の拡充及び英語を活用することで課題解決に繋げる探究活動に活かしていくことが課題として挙げられる。来年度以降、牧之原市の国際交流支援やコミュニケーション能力を高めるための活動を積極的にカリキュラムに取り入れ、全校生徒に対して実用的な英語力を身に付けさせるための指導を推進していきたい。

# グローバルハイスクール

テーマ：探究活動を通じた海外研修によるキャリアデザインの動機付け  
日本大学三島高等学校



## 1 グローバル教育の概要

本校では、令和4年度よりコース制になり、各コース特長を活かした教育活動を展開しています。その基点となるのが、「総合的な探究の時間」です。特にグローバルな視点を育成するために、グローバル留学コース以外でも、海外を身近に感じることができるプログラムを計画しています。



本校が目指すグローバル人材に必要な要素は、21世紀型スキルを修得し、グローバルな視野を獲得することです。これに向けて、「総合的な探究の時間」を活用して、さまざまなプロジェクトに挑戦し、課題解決へとつなげていきます。

特に海外におけるプログラムは、アクティビティベースの研修を実践する中で、語学の活用のみならず、グローバルな視野の獲得の一助として、キャリアデザインのきっかけとなる経験を積むことを目指していきます。

## 2 実施計画と具体的内容

2年目の実戦として、コロナ前の状況に戻すことを目指して、これまで実施していた海外研修を復活させました。

### 【グローバル留学コース】



#### 高校1年 フィリピン語学研修

夏期休暇中の4週間、フィリピン・イロイロ市にある語学学校で語学研修を実施しています。マンツーマンや少人数グループでのレッスンを毎日7コマ受講することで、4技能を伸ばしていきます。週末には現地学生との交流やボランティア活動なども行い、異文化理解を深めます。

#### 高校2年 オーストラリア長期留学

高校1年生の3学期から高校2年生の2学期までの1年間を、オーストラリアのアデレードで過ごします。ホームステイ生活をしながら、現地の学校に通うことで、英語力の向上はもちろん、多様な価値観に触れることで、日本では得ることのできない経験をすることができます。



### 【テキサスプログラム】 高校1年・2年 希望者研修

夏期休暇中の3週間、アメリカテキサス州オースティンで学生寮に滞在しながらテキサス大学で研修します。午前は英語レッスン、午後は地域探究、そして週末にはホームステイ体験を通して、語学力向上を図ります。研修終了後は、ロサンゼルスでディズニーランド・ユニバーサルスタジオ見学、MLB観戦など、アメリカのエンターテインメントも満喫できる研修です。



### 【ケンブリッジサマー・イースタープログラム】 日本大学付属高等学校等ケンブリッジ大学語学研修



高校1、2年生の希望者の中から選抜で各プログラム2~3名選出し、夏期休暇中の約3週間の日程で、イギリスのケンブリッジ大学ペンブルックカレッジで語学研修を行っています。カレッジ内の学生寮に滞在し、言語学やイギリスの文化、歴史な

どすべて英語で行われる授業に参加します。プレゼンテーションやディスカッションなど主体的に参加する機会が多く設けられ、実践的な英語の能力を身に付けることができます。また、授業以外では、大学の学生とともにダンス、映画鑑賞、フィールドトリップなどイギリスの文化を体験できる機会も幅広く設けられています。

**【グローバルハイスクール海外研修】 マルタ共和国・トルコ共和国研修**



令和5年度は、12月16日～24日まで、高校1年生の希望者を対象にマルタ共和国とトルコ共和国での研修となりました。マルタでの研修では、午前中の実践的な語学レッスン、午後からはレッスンで知り得た知識を活用した現地探索がプログラムされていました。マルタ共和国の歴史を文化的な背景から体得する内容は、15名の参加者のキャリアデザインを考えていく上で、大きな刺激となりました。トルコでは、半日研修ではありましたが、西洋と東洋の交わる文化の交流点での独特の雰囲気を体験することができました。

**3 各年度における取組**

【令和5年度】

地域研究課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

地域探究プログラム

- キャリア探究プログラム
- 総合的な探究の時間
- 学びの意欲向上（高大連携）
- 21世紀型スキル活用
  - ◆ グローバル&ローカル課題の発見と解決方法の模索
- 外国語活用実践
  - ◆ 実用英語の実践（対面／オンライン）
- 海外異文化探究プログラム
  - ◆ 語学特化ではなく、探究心を涵養するアクティビティを中心にした異文化体験プログラム

**4 研究の成果と課題**

当研究の成果としてあげられるのは、海外研修へ参加することで、今後のキャリア形成への動機を明確化する手立てにできることです。先行き不安定な未来に向けて、生き抜く力を習得するために、海外経験は、非常に有意義な成果をあげることができます。日本国内だけでは味わうことができない経験をもとに、自己の探究心の高揚させる内的動機づけという点においては、非常に有効であったと感じることができました。社会全般、生徒全体的な傾向として、海外に向けた関心も、コロナ禍に比べて、もとに戻りつつあることも実感できます。

今後の課題として検討していかないといけないのは、海外に目を向ける機会をできる限り多く設けていくことではないでしょうか。しかし世界経済の動向で言うと、円安は決して海外留学にとって好条件とはなりません。その中でも日本の現状を把握した上で、海外経験を積ませる機会をどのように設定していくかは大きな課題となっています。国や地域の選択、時期、期間、そして内容をもっと吟味していく中で、成果を最大限にあげる研修機会を検討していく必要があります。



# グローバルハイスクール

県都「静岡市」における社会的な課題について海外高校生と協働し  
取り組むことを通して、国際的な役割を担う人材を育成する  
静岡県立静岡城北高等学校



## 1 グローバル教育の概要

本校は、「グローバル教育を推進する普通科・グローバル科併置の伝統校として、広い視野で地域の課題を発見し解決する探究活動を通して、将来の Shizuoka を支え、行動する人材の育成を目指す」というスクール・ミッションのもと、生徒のグローバル意識を高めるための教育活動を企画、実施している。グローバル科は学科改善3年目を迎え、前期の研究成果物である『グローバル課題探究』を軸とした3年間のシラバス」の妥当性を検証していく段階に入った。4年ぶりの海外異文化体験の再開、海外の高校生や留学生の視点を取り入れた探究活動の実践、オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業の導入など、新たな取組に挑戦しながら、ESD（持続可能な開発をするための教育）の考えに基づき、グローバル科の取組を普通科に波及させていくことを目指している。

## 2 実施計画と具体的内容

### (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの構築

- ・系統的・循環的な「グローバル課題探究」（グローバル科1～3年生）  
グローバル科縦割り授業、グローバル社会見学、静岡大学留学生との交流、海外留学生の受入れ、海外高校生との国内での交流等の活動を通して生徒が探究的な学びを深める。
- ・海外異文化体験（2年生12月）  
ホームステイ、海外高校での交流（探究を中心としたグループ発表、インテグレーション授業参加）、大学キャンパスツアー、市内研修等の活動を企画し、実施する。

### (2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業に関する実証研究

- ・民間のオンライン英会話の活用
- ・生徒の英語力及び国際的志向性に関する調査の実施

### (3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築

- ・グローバル科の活動の普通科への波及  
グローバル科の生徒たちがグローバルな課題の解決策を探るために実践する、文化的背景が異なる人々との協働的な学びに、普通科の生徒が参加しやすい仕組みを構築する。

## 3 令和5年度の取組

### (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの構築

- ア グローバル科縦割り授業の実施（通年）
  - ・グローバル科内の交流、探究活動の共有、先輩から後輩への助言など。
- イ 米国カリフォルニア州立ロスアラミトス高校生徒との相互交流
  - ①本校での交流（6月15日～21日）
    - ・日本語を学ぶ21人の生徒が本校の生徒宅にホームステイしながら授業に参加、交流した。1・2年生の全クラス、3年生のグローバル科、英語選択クラスの生徒が来校生と関わる機会を持った。



②ロスアラミトス高校を拠点とした海外異文化体験（12月2日～10日）

- ・グローバル科2年生がホームステイをしながら、ロスアラミトス高校の授業に参加し、探究の成果等を英語で発表した。また、UCIでの大学訪問研修や市内研修を行った。



ウ 静岡大学留学生との交流（7月7日、11月10日、1月9日）

- ・7月7日、留学生が本校を訪れグローバル科2年生と社会的問題をテーマに日本語で討論した。
- ・11月10日、グローバル科1年生が静岡大学を訪問し、留学生に探究内容を英語で発表した。
- ・1月9日、グローバル科・普通科の1年生20人が静岡大学で、留学生の授業を体験。

エ サマーセミナー（8月8日～10日）

- ・グローバル科1年生が県内のALT7人と3日間の英語研修を行った。



オ グローバルな交流（10月13日、12月15日、2月16日）

- ・グローバル科1・2年生がグローバルな舞台で活躍している社会人と交流。  
10月13日 増田大夢氏（株式会社ECPower代表取締役社長）  
12月15日 石貝佑磨氏（Palo Alto Networks勤務）  
2月16日 鈴木容太氏（医師）・和久田典宏氏（弁護士）



カ 東京学芸大学附属国際中等教育学校生徒との探究交流会（1月20日）

- ・8人が来静し、グローバル科1・2年生22人と探究発表の交流を実施。

キ グローバル社会見学（1月25日～26日）

- ・グローバル科1年生が東京学芸大学附属国際中等教育学校、神田外語大学、株式会社商船三井を訪問。

ク 米国からの留学生2人の受入れ（2年生：4月～3月、1年生：6月～7月）

(2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業の導入と実証研究

ア 民間のオンライン英会話の英語授業での活用

- ・論理表現Ⅱ、英語コミュニケーションⅡの授業の中で教師が提示した「探究的な問い」について、生徒一人ひとりがそれぞれの英語力や価値観に応じて「個別に」外国人講師と考えを深め合い、その知見をクラスで共有し、新たな問いに向かうというサイクルで実践した。



イ 英検準2級程度の4技能（読む、聞く、書く、話す）の能力の測定

ウ 国際的志向性に関する調査（Yashima, T. 2009）の実施

(3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築

ア 1・2年生校内探究活動発表会（1月31日）

イ 英検面接ボランティアによる面接練習（年間10回）

## 4 研究の成果と課題

4年ぶりに海外研修を実施した。ロスアラミトス高校との相互学校訪問による交流を通し、対面での交流が生徒の成長に及ぼす影響の大きさを再認識した。また、日本語を学ぶ米国高校生たちと普通科の1・2年生の全生徒が授業を通して交流の機会を享受できたことは、普通科のグローバル教育を進める上でも大きな意味があった。今年度はグローバル科初代の卒業生を送り出し、グローバル科の教育活動は軌道に乗ってきたと言える。次年度は、持続可能なプログラムの検討、グローバル科併置の利点を生かした学校全体のグローバル教育の拡充を目指し、静岡のグローバル教育の一助となるような成果をまとめたい。



## 1 グローバル教育の概要

本校は、地域社会等から、地域に根差して国際社会で活躍するグローバルリーダーとして将来の国家・社会を担い人類の発展に貢献する人材の育成を要請されている。特に、大学等に進学後、あるいは地域外で就業後に出身地域にUターンするなどして、それまでのキャリアを生かして地域社会の発展を推進する人材の育成が求められている。生徒が自ら地域課題等を設定し、その解決を図るための方法を考えるとともに、課題を解決するための資質、能力を向上させることを目標として、海外での実地研修や国内での大学等との連携等の在り方について研究し、実践する。

## 2 実施計画と具体的内容

(1) 地域の現状を知り、地域の課題を認識するとともに生徒が自ら地域への関わり方について考察することを通して、課題の解決に主体的に取り組もうとする態度等を育てる方策を試し、検証する。

○地域学習（《第1学年》校外学習、《1年理数科》地球科学研修、《2年文系探究コース》伊豆半島研修）

(2) 海外での実地研修や国内での大学等との連携等を通して、地域課題を解決するために必要な資質、能力を向上させる方策を試し、検証していく。 ※( )内は連携団体等

○イギリス研修（国際教育文化交流協会） ○アメリカ海外研修旅行《2年理数科》

○シンガポール等海外研修旅行《2年文系探究コース》 ○オンライン英会話（静岡県立大学）

○サイエンスダイアログ（日本学術振興会） ○グローバル・スタディーズ・プログラム（ISA）

○アメリカ現地校との交流（Pasadena Polytechnic School）

## 3 各年度における取組（令和5年度）

(1) 地域学習

ア 校外学習《第1学年》

本校入学直後、1年生全員で本校周辺の史跡等を周遊し、本校が所在する地域について学習する。コースは、韮山城址→江川邸（国重要文化財）→本立寺（学祖：江川坦庵公、開校者：柏木忠俊公墓所）→韮山反射炉（世界文化遺産）→願成就院（国宝仏像安置）をホームルーム単位で分散して訪問する。

イ 地球科学研修《1年理数科》

在住する伊豆半島の地質について、専門家による講義とフィールドワークにより知識を深めるとともに、地質学的、生物学的見地から伊豆半島の成り立ちについて考察する。

ウ 伊豆半島研修《2年文系探究コース》

在住する伊豆、駿東地域について、地域の実情や地域資源を知り、問題点を考えるとともに、地域を活性化するための方策等を考察し、提言する力を身に付ける。



校外学習



地球科学研修



伊豆半島研修

## (2) 海外での実地研修等

新型コロナウイルス感染症の拡大により中断していたが、4年振りに実施することができた。

### ア イギリス研修

8月11日～21日、40人が希望し、イギリス・ボーンマス市の語学学校で研修を実施した。

### イ アメリカ海外研修旅行

11月6日～11日、2年生理数科生徒がロサンゼルスを訪れ、最先端の科学技術を見聞した。

### ウ シンガポール等海外研修旅行

11月5日～10日、2年生文系探究コースの生徒がシンガポール等を訪問、異文化体験を行った。



### エ オンライン英会話

静岡県立大学言語コミュニケーション研究センターの外国人教員とオンラインで結び、英会話のトレーニングを実施。週2回×10週を前、後期の2期実施。参加生徒28人。

### オ サイエンスダイアログ

日本学術振興会を通して派遣された大学の外国人研究者による英語での講義。理系、文系をそれぞれ1回、計年2回実施。参加生徒約100人。

### カ アメリカ現地校との交流

理数科が海外研修旅行で訪問するロサンゼルス近郊のPasadena Polytechnic Schoolとの交流。来年度、教員5人が、再来年度、生徒数十人が来校、相互交流を深め、姉妹校提携を目指す。

### キ グローバル・スタディーズ・プログラム

ISAが企画、運営するプログラムへの希望者による参加。8月7日から5日間、他校生とともに外国人留学生とワークショップを行い、外国人とのコミュニケーション能力の向上を図った。



## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果、メリット

- ・コロナ禍後の海外渡航ニーズに対応、コミュニケーションの機会が増え、英語学習、異文化体験への意欲を喚起することができた。
- ・コロナ禍で普及したオンライン通信を、一人一台端末を利用して活用することができた。

### (2) 課題

- ・海外での実地研修は、為替相場や景気の動向の影響を受け、現状では家計の負担が大きい。
- ・理数科や文系探究コースの生徒、希望者に限定され、全校生徒に対応できていない。
- ・海外研修旅行等の体験や学習成果を地域課題の解決と直結させるプログラムの工夫が必要である。

# グローバルハイスクール

テーマ：地域に根ざした国際交流の推進（友好都市との絆強化と地域に住む外国にルーツを持つ人々との共生共育）

静岡県立富士宮東高等学校



## 1 グローバル教育の概要

誰もが住みやすい地域（富士宮市）を創る人材を育てるため、地域に根ざした国際交流を推進する。富士宮市と友好都市である台湾の台南市立永仁高等中學校と、互いの地域の魅力への理解を深める交流を行い、友好都市の未来の絆を強化する。また、多様性を享受する心を育むため、地域に住む外国にルーツを持つ人々との共生共育をとおしてその人々が地域で暮らす中で抱える課題を共有し、課題解決への道を探究する。

本校は多くの生徒が卒業後には地元を支える人材となることから、高校時代に友好都市の同年代の人々との交流で培った絆は、大人になるにつれより深まると考えられる。また、国際化やICTの発達により、誰もが外国人と協働する可能性がある時代になり、言語や文化の違いが障害ではなく強みであると考えられるような多様性受容力が求められる。本校は、外国人生徒選抜を実施し外国にルーツのある生徒も数名在籍しており、多様性受容力を育みやすい環境である。校内での多様性理解に加えて、地域の外国人学校であるA.C.C.国際交流学園の生徒との共生共育を行い、地域を多様な視点から捉え、誰もが住みやすい地域づくりを実践する人材を育てたい。

## 2 実施計画と具体的内容

### 【英語の実践力向上】

\* 1年生全員に、週に一度のオンライン英会話を実施し、「聴くこと」、「話すこと」を主とした英語実践力向上を動機づけとし、総合的な英語力の向上を図る。

### 【多様性理解と地域に住む外国にルーツを持つ人々との共生共育】

\* 外国人生徒選抜で入学した生徒や留学生、地域の外国人学校の生徒による母国紹介や、地域で暮らす課題を共有する機会を創出し、多様性の受容を促進する。

\* A.C.C.国際交流学園の生徒と共に行う部活動や地域の課題探究をとおして共生共育を推進する。

\* 富士宮市国際交流協会が主催する活動へ参加する。

\* 多文化共生について学べる大学を訪問し、共生に対する知識・理解を深める。

### 【海外における研修】

\* 富士宮市と友好都市である台南市の市立永仁高級中学校を訪問し、互いに地域の魅力や文化を紹介しあい、交流を深める。

## 3 各年度における取組

### 【令和5年度】

#### (1) 1年生のオンライン英会話

週1回の授業、長期休業中の課題、検定試験の対策で実施した。

#### (2) 文化祭等での、海外にルーツを持つ生徒によるスピーチ及びステージ発表



### (3) インターナショナルクッキングデーの実施

外国にルーツを持つ生徒とその保護者による料理教室を行い、各国の言語やハラルフードなどの文化を学んだ。A. C. C. 国際交流学園の生徒も多数参加した。



第1回 カナダ出身ALT  
ナナイモ・バー



第2回 パキスタン出身生徒・保護者  
チキン・コルマとチャイ



第3回 中国出身生徒・保護者  
福清番薯丸

### (4) A. C. C. 国際交流学園の生徒の部活動参加交流



《文化部交流》  
情報処理部 プログラミング  
日本文化部 茶道

《運動部交流》  
弓道部  
バドミントン部  
バレー部  
参加延べ人数 55人

### (5) 大学見学

神奈川大学 国際センター  
関東学院大学 国際文化学部・国際センター



### (6) 台南市立永仁高級中學校との交流

自己紹介シートや自己紹介音声の事前共有を行い、12月26日に10名が訪問した。交流では互いの地域や文化の紹介等を行った。また、「生物探究」と「英語」の授業に参加した。



### (7) 「国際交流フェスティバル in ふじのみや」での展示・発表

2月18日に富士宮市国際交流協会が主催した「国際交流フェスティバル in ふじのみや」で、グローバルハイスクールとしての取組を展示した。須藤富士宮市長を始め、来場した皆様に学びと成果を報告した。



## 4 研究の成果と課題

各取組に参加した生徒は、外国にルーツを持つ人々との交流をとおして、多様性の理解や共生共育の体験をすることができた。特に、台南を訪問した生徒たちは言語ツールの重要性に加え、異文化に対する寛容さや積極性がお互いの理解を深めることを実感した。今後は、参加生徒の学びを学校や地域全体に広げていくこと、交流での気づきを課題解決の段階まで深めていくことが課題である。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	11月9日		(対象)	全校・ <span style="border: 1px solid black;">学年</span>	
学校名	県立吉原工業高等学校	氏名	秋山 佳希	学年	2

## 1 目的・応募理由

私が海外インターンシップに応募した理由は2つあります。1つ目は、部活動の顧問の先生に勧められたからです。2つ目として、私は海外渡航経験がなく、一度行ってみたいと思っていたのですが、両親からも行くことができるチャンスは少ないと言われ、日本と海外との違いを知る良いチャンスだと思ったからです。

今回の研修に参加することで、私は国際的な感覚を身に付け、世界に目を向け、視野を広げたいと考えました。実際に、日本から海外に進出している企業は多く、私自身の将来を考えても国際的な視点が大切だと思ったからです。また、ニュースを見れば、世界各国の様々な問題が伝えられる中で、私が社会人になる頃には今以上に様々な社会問題が発生しているのではないかと考えました。そのようなときに世界で協力していくことが大切で、外国の方と積極的にコミュニケーションを取れる力が必要だと思います。そのため、今回の海外研修を機に外国の方と交流したいと考えました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

はじめに開会、関係者紹介、挨拶、趣旨説明が行われた。関係者紹介では、タイへ同行する

片井先生と朝比奈先生が紹介され、挨拶をした。趣旨説明では、タイ人との交流やタイの企業の視察をし、企業の魅力や競争力、貢献度などを直接肌で感じて、将来グローバル社会で活躍する意識を高めることを説明された。

海外研修の内容説明では、はじめに荷物について説明された。受託手荷物には、貴重品を入れない、各航空会社の規定を守ること、総量は20kg以内で三辺の和が158cm以内等具体的な内容が示され、機内持ち込み荷物に関しても具体的なルールが説明された。次に、現地通貨についての説明があった。タイの通貨単位1バーツは、日本円に換算すると4.01円で、現地で両替したほうが良いというアドバイスを頂いた。さらに服装に関する話もあった。タイは日本と比べ、暑く湿気が高いので、通気性の良い服を準備したほうが良いということが説明された。

### 国内研修

はじめに会社紹介のプレゼンテーションが行われ、トランスミッションやSDGs、ものづくりに関することについて説明された。まず、トランスミッションについてジャトコで製造している無段変速機の形やどのような機能があるかを教えて頂いた。SDGs活動は、二酸化炭素の排出量を2030年までに46%減らすこと、2050年までにカーボンニュートラルを実現することを目標としていることが説明された。ものづくりの取り組みでは、モビリティ領域といったモノや人に関わるサービスにチャレンジしていることが説明された。

次に工場内を見学し、一つひとつの機械を見ながらどのような機械なのか説明を聞いて回り、その後で、タイに行った時のためにタイ語の自己紹介や挨拶を習った。

最後にジャトコの副業のレタス栽培を見学した。数種類のレタスを育てており、無農薬で育てていることを説明された。

## 海外研修

8月20日（日）

朝8時45分に羽田空港に集合した。搭乗手続き、荷物検査が徹底的に行われた。また、パスポートを数回見せて手続きを行った。タイには6時間のフライトで到着できた。タイの空港でも日本と同じ手続きをし、無事入国することができた。そのままバスでホテルに向かった。

夕食はシャングリラレストランという中華料理店に行った。初日は研修というより移動が主だった。

8月21日（月）

ホテルで朝食を食べた後、Jatco(Thailand)Co, Ltd に行った。

到着後、最初に工場見学を行い、機械の説明を聞いて回った。その後、両手で両サイドのネジを嵌めるといふネジ嵌め作業を行なった。途中でコツを掴むことができ、研修仲間と勝負したときは一番早く嵌め込むことができた。

作業の途中には、指差し呼称を行なった。また、アルコールで酔った状態を体験できるメガネを掛けたときは、直線の道を進んでいるはずにもかかわらず道を大きく外れてしまいアルコールの危険性を十分に理解することができた。

8月22日（火）

市内研修と帰国の途に着く1日だった。

午前中にワット・トライミットという黄金仏寺院を訪ね、その後、昼食を取った。昼食後は、エメラルド寺院を訪ね、ワット・ポーという大仏を見学した。次にワット・アルンという暁の寺を訪ねた。全体的にジグザグな構造をしていた。他の寺院に比べて派手な色ではなく、違う美しさがあった。

夕食後、ホテルに戻り帰国の準備をした。午後8時45分に空港に着き、荷物検査をしたが、日本出国時よりもとても厳しく検査された。午後10時45分に離陸し、帰国の途に着いた。

8月23日（水）

最終日は、午前6時55分に日本に着き、先生方の話を聞いて解散した。

### 3 感想等

今回の研修を通じ、日本とタイの工場で大きな違いは感じませんでした。その企業力に魅力を感じました。また、現地で雇用を創出していること、SDGsを通して社会貢献していることを学ぶことができました。その上、タイの工場には、タイの方が好きなサッカー場や暑さ対策の工夫があり、従業員を大切にしている企業姿勢を見ることができました。

社員の方々は優しくユーモアがありました。練習したタイ語での自己紹介が通じ、スタッフではない方とも挨拶できたことで、国際交流の点でも自信が持てました。

市内研修を通じ、タイ文化も学ぶことができました。日本と異なる街中の雰囲気や寺院の鮮やかさに目を惹かれました。また、タイ料理は苦手でしたが、多くの料理に触れ、味付けや食材等日本食と異なる特徴を知ることができました。

今回の研修をきっかけに視野を広げ、様々なことに挑戦しようとして今まで以上に思うようになり、進路や海外について意識を高めることができました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	9月7日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立富士高等学校	氏名	河村 叶子	学年	2

## 1 目的・応募理由

私は学校の教科の中で英語が一番好きで、海外の文化などにも興味があるため、大学で英語を勉強し将来は英語を生かした職業に就きたいと思っている。ジャトコは大きな会社で、海外にも何箇所も拠点を置くようなグローバルな会社だと知って、会社の取り組みや働く環境、英語をどのように生かせるのかなどを知りたいと思った。また、私はまだ一度も海外に行ったことがないので、タイという国の文化を肌で感じてみたいと思い応募した。

## 2 研修内容等

### (1) 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### (2) 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社 11時半から17時まで
- ・内 容：会社紹介、食堂でのランチ、工場見学



### (3) 海外研修

- ・ 研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・ 研修日及び研修場所
  - 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ジヤトコタイ工場
  - 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着
- ・ 内 容：会社紹介、工場見学、食堂でのランチ、ネジ締め体験、現地社員との交流会



### 3 感想等

研修を通して、ジヤトコの工場見学や食堂での食事など、普通ではできないような貴重な体験をすることができた。県内の企業の活躍について知ると県民として誇らしく感じたし、就職など自分の将来についての視野を広げることができた。タイの工場では、どの従業員さんも明るくて面白い人が多く、積極的にコミュニケーションを取ろうという気持ちになれた。うまく言葉を話せなくても十分コミュニケーションを取ることができた。私はまだ全然英語を話すことができないし、自信が持てず、積極的に会話する機会を今まで作ることができていなかったが、自分から話しかけてみることの大切さを実感した。

初めて海外に行った私にとっては全てのことが新鮮で、多くの学びがあった研修だった。日本以外の国を見てみたことで、日本の良さを実感することができ、また、タイ以外の他の国も見てみたいと思った。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ	
校内発表	8月30日		(対象)	全校・学年
学校名	富士東高校	氏名	高橋 紀穂	学年
				2

## 1 目的・応募理由

- ・海外に興味があり、海外に出て、視野を広げたいと思ったため
- ・以前叔父がタイに海外勤務していた際に家族で遊びに行ったことがあるが、現地で仕事をするということはどんな感じなのか体験してみたかったため

## 2 研修内容等

事前研修 zoom で事前の趣旨説明  
渡航ガイダンス等  
(所感)

実施前研修を受ける前は不安でたまらなかったが、説明を聞くことで海外研修がとても楽しみに思えるようになった。女子の比率が多かったことに驚いた。これから先、女性が活躍していくために女性の割合が高いことはよい事ではないかと思った。

国内研修 オートマチックトランスミッションの製造と販売  
(所感)

ジャトコの商品が身近でたくさん使われていることにとても驚いた。

従業員の数が多いため、働きやすさを重視している点や、環境に良い会社を作るための取り組みなどに感銘を受けた。自動車部品に加え、野菜作りも行われており水耕栽培を行っていて、温度を保つための工夫がたくさんされていた。いただいたレタスを食べてみると、とてもおいしかった。室内で野菜を育てるので、虫がつかない利点もあり、やわらかい葉で安心して食べることができた。できた野菜を自社で消費したり、必要な人に必要な食糧が届く社会の実現への取り組み、障がい者の方へ働きやすい環境づくりを行っている。働きやすい環境だけでなく、CO2の環境問題の削減の取り組みも行っている。タイの工場をつくるために、日本から海外へ行ったことのある従業員さんからジャトコについて説明が聞けたのはとてもいい機会だった。

ジャトコの方からタイの説明を受けたり、タイ語の自己紹介の文を考えたり、海外研修についての話を聞くことで海外インターンシップがとても楽しみに思えた。参加者みんなで海外インターンシップに行くにあたり、目標を考えた。みんなと初めての対面ながらもたくさん会話することができた。

## 海外研修 製造ライン体験

(所感)

タイの方々が優しくとても楽しい時間を過ごせた。タイの工場は小さめで日本の工場の方が綺麗なイメージを持っていたが、とても清潔感がある広い敷地だった。タイに建設して10年ほどしか経過していないが、QCCを意識した計画が進められていた。また、労働者が安心して働けるように、自分で体験しながら作業の仕方を学ぶことで、より安心して作業ができる環境になるのではないかと思った。工場ではタイ料理をいただいた。タイ料理を食べる機会はジャトコしかなかったのが楽しみだった。タイ料理は辛く、日本人の口には合わないと聞いていたが、私が選んだタイ料理はとても美味しかった。今まで、タイ人は辛い食べ物が好きな人が多いという偏見を持っていた。しかし、ジャトコの従業員さんによると辛いのが苦手なタイ人もいるらしく、びっくりした。私は二回目のタイだったが、一回目の時には気づけなかったタイの良さを知ることができた。友達とも楽しい時間を過ごせた。友達のいいところをたくさん見つけることができ、これからの生活で真似していきたいなどと思った。

### 3 感想等

海外インターンシップを通して何かに挑戦する楽しさ、自分に自信を持つこと、他校の友達ができたと、自分で調べる能力がついたこと、自分の英語の理解力を知ることができたこと、本当にたくさん得ることができた。そして県内企業が海外で活躍していたことに、とても驚いた。静岡県の企業がこんなにも人の役に立つ製品を製造していることに静岡県民として誇らしく思えた。そして現地を訪れ日本とタイの相違点を見つけることができた。日本企業のよさがタイでも生かされている環境を目の当たりにし、現地でより良い仕事を共にできるのは素晴らしい事だと感じた。研修前と研修後の自分を比べてみると、不安が楽しみに変わり、やってみるとより楽しくなり、自信がついて、人の意見に惑わされがちだったけれど自分の意見も大切に思えるようになった。今後は、他にも新しいことにチャレンジしたい！という前向きな気持ちになった。海外インターンシップで身につけた貴重な経験を今後に生かせるようにしたい。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	1月25日		(対象) <input type="checkbox"/> 全校		
学校名	富岳館高校	氏名	井出 彩葉	学年	2

### 1 目的・応募理由

私がこの高校生海外インターンシップに応募した理由は2つある。一つ目は富岳館高等学校の特色が関係している。私が所属している系列が「人文科学系列」であり、国際交流やグローバルな視野を将来的に持つことを重要視しており、その一環として海外でのインターンシップ経験が、今後の学校生活や自身の将来に非常に有益だと感じたからだ。

そして二つ目に、インターンシップ先がジャトコ株式会社であることも応募した理由である。ジャトコ株式会社は、グローバル経営を進めている地元のリーディングカンパニーであり、タイを含む様々な国で事業を展開している。私は異文化の交流に興味があり、ジャトコ株式会社のインターンシップを通じてグローバルな視野を学びたいと思った。また、ジャトコ株式会社は技術力や品質管理の高さで知られており、その現場を実際に見ることで、実際の製造工程や技術に触れる貴重な機会が得られると考えた。

海外での経験や異文化交流を通じて、多面的な視点や考え方といった将来のキャリアに繋げることを目指している。

### 2 研修内容等

- ・事前研修（オンライン）
- ・国内研修（ジャトコ株式会社）
- ・海外研修（ジャトコタイランド社）





### 3 感想等

事前研修では、参加者同士の交流や留意事項の説明が行われ、研修に向けての意気込みが高まった。国内研修では、ジャトコ株式会社の紹介やタイでの生活に関する注意事項を学び、タイ語の自己紹介のレッスンも受けた。日本語や英語とは違う言語での会話の難しさや、文化やコミュニケーション上でのマナーの違いなどを学ぶことができ、また、工場見学を通じて製品の製造工程や品質管理について学ぶことができた。自身が抱いていた「工場」というイメージが覆され、清潔で整理整頓された美しい作業場になっていて、大変驚愕した。海外研修では、ジャトコタイランド社での作業体験や工場見学、タイの文化や歴史に触れる市内研修が行われた。ジャトコ株式会社では、グローバルな展開を行っているため、言語や文化の壁を越えた絆やチームワークを実際に体験し、この目で実感することができた。また、日本とは異なる歴史や文化と触れ合うことができ、タイの国民性や価値観といった、伝統的な異文化の美しさを知ることができる貴重な経験を持つことができた。

これらの研修を通じて、自身の成長や異文化への理解を深めることができた。また、外国人（タイ人）と接することで、言語の壁を越えて通じ合えた瞬間のコミュニケーションの楽しさや、工場という仕事現場を、実際に見ることでチームワークの重要性を発見することができた。このような経験を今の時期にさせていただいたことに大変感謝している。研修を通じて発見した様々なことを活かして将来のキャリアプランを考えていきたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	12月21日		(対象)	全校・学年	
学校名	磐田南高校	氏名	山下翼	学年	2

## 1 目的・応募理由

海外に行ってみたい！という理由でしたが、日本とタイのジャトコを見学するところから県内の国際企業を学ぶという、今後2度と経験しないであろうことができる、というところがさらに大きな理由になった。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

(所感)

Zoomだったためメンバーとの初めてということだけでなくまだ距離感を感じた。早く実際に対面であって話してみたいと感じた

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社 11時半から17時まで

(所感)

コロナのため出席できなかったが、写真や聞いた話からジャトコの製品の歴史や工場見学、屋内菜園を行っているところがとても新鮮だった。

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所

- 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
- 2日目 ジャトコタイ工場
- 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
- 4日目 日本到着

(所感)

タイという国に初めて行ったが、国としての文化の違いを感じた。

知識とは違う空気感というものがよく分かった気がする。特に仏教文化が深く根づいていることと、国王の概念の存在に新鮮味を感じた。

主には国内研修と海外研修を通じた「国際企業の在り方を学ぶ」というところが大きな目的のように感じた。

①国内研修+②海外工場見学+③観光地巡りが主な内容

- ①国内ジャトコの工場見学、タイ語やタイについての研修
- ②社員食堂でタイ料理を食べるほか 工場見学、訓練実習、植物の植え付けを行った
- ③バスでバンコク内の王宮をはじめとする寺など観光地巡り



### 3 感想等

自分の日常が日本という国でのものであり、世界の観点から見たら大きく異なる点が多く、自分の社会の見方の視野が狭かったと気づくことができた。

それだけではなく、同じ班の子たちとの交流は同じ静岡県に住んでいても違うところがあって、海外に来て国内より狭い地域の違いを知ったのは面白いと思った。

目的は主にジャトコだが、食べ物や建物の見た目、売っている商品から、タイと日本の文化的な「違い」を感じた。

今回訪れたのは世界の中でも有数の発展をしている都市バンコクであり、正直なところタイという国を知るには足りないかと思えた。もっといろんな地域も回ってみたいし、現地の人々の常識を知りたいと感じた。バンコクを見ているだけでも学べることはとても多かったが、将来は自分の足でゆっくりと見てみたいと感じた。

日本企業のテレビCMが多かったのは、行ってみたいとわからないことだと思う。最後に、このような機会を与えていただいた方々にはとても感謝しています。この経験を、将来の考え方や生活に活かしていくことができるようにしたいと思います。



## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ	
校内発表会	12月22日		(対象)	全校・学年	
学校名	天竜高等学校	氏名	木下 真歩	学年	2

### 1 目的・応募理由

私は将来、海外で暮らしたいと考えていました。そのため、環境の違いや文化の違いを知るということを目的に応募をしました。

また、今回の海外インターンシップを通して、自分と同じ海外に興味のある人達と交流できることや日本の企業がどのように海外に進出しているのか、また、海外の環境や文化を知ることができると思ったことも応募理由になります。

### 2 研修内容等

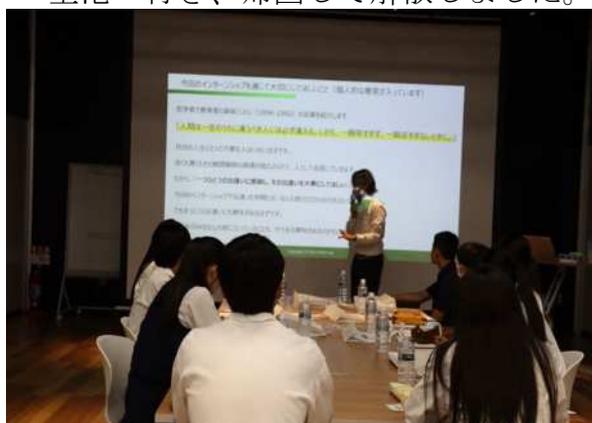
事前研修では、空港での注意点などの説明、タイでの過ごし方の説明がありました。その後、タイへ研修しに行く仲間たちと教育委員会の先生方達とお互いに自己紹介をしました。

国内研修では、会社紹介で企業のグローバル展開や業務内容を聞くことができました。また、タイで働いていた方のお話を聞き、タイで過ごす時に注意する点やタイの気候、また、タイ語での自己紹介を教わりました。その他にも工場見学をさせていただき、労働環境や製造業についての理解深まりました。

海外研修では、1日目は夜に着いたため、2日目からの活動になりました。

2日目はジャトコ のタイランド社へ行き、会社紹介をしてもらいました。そして、苗植えの作業体験と、機械などの作業体験を現地のタイの従業員の方達とやりました。また、食堂でランチの時に現地の従業員の方たちと食事をしました。最後に、タイのスイーツをいただきながら、お互いに会話をしたり、質問をしたりすることで交流を深めることができました。

3日目は、バンコク市内研修をし、ワットトライミット、王宮・エメラルド寺院、ワットアルン、ワットポー、アジアティークに行き、タイの歴史や食べ方のマナーなどを学ぶことができ、タイの文化に触れることができました。その後は空港へ行き、帰国して解散しました。



国内研修



海外研修

### 3 感想等

事前研修を行う前は非常に緊張していました。しかし、海外インターシップを行う際に注意することを詳しく教えてくださったり、自己紹介をしたりすることで安心してその後の活動をする事ができたのでよかったです。

国内研修での企業説明の際には、ジャトコ株式会社は、海外拠点が中国、タイ、メキシコ、韓国、フランス、スペイン、アメリカにあると聞き、グローバルに広く展開していることに驚きました。また、ジャトコ株式会社は、トランスミッションのみを製造しているのではなく、電動車いすや、音が静かな低風圧力発電機を開発していることを知り、多くの事業にチャレンジし、社会貢献をしていることにすごいと思いました。自分も何事にもチャレンジしてみる気持ちを忘れないようにしたいと思いました。

海外研修の時は、空港へ向かって行く時に家族がいないということを実感し、緊張と不安でいっぱいでした。しかし、教育委員会の担当の先生と同じ研修場所の生徒たちの顔を合わせたら落ち着くことができ、とても心強かったです。そして、タイへ入国し、2日目のジャトコのタイランド社での研修では、苗植えの体験をしました。現地の従業員さん達が優しく丁寧に苗の植え方を教えてくれたため、とても分かりやすく、理解して体験に望むことができました。また、機械の使い方などの体験では、ボルトの借りしめでどちらが早く終わらすことができるか競争をしたり、酔っ払った時の視界の様子を、特別なゴーグルをつけて体験したりしました。楽しんで学ぶことができたのと同時に、アルコールを飲んだ状態での作業の危険性についても理解することができました。

企業見学以外では、タイは水道水飲めないのも、ペットボトルのお水を買わないといけないことは、日本との大きな違いを感じました。その他にも、日本では麺類を啜って音を立てますが、タイでは失礼にあたるなど食文化の違いも感じました。市内研修では、タイ、バンコクの街並みと色んな文化的建造物をみました。その中でも印象的だったのは、ワットポーでした。大きな大仏教が横になって寝ていたのが衝撃的であり今でも覚えています。また、仏教ということで多くの信者の方が足を運んでいたことも印象的でした。アジアティークでの買い物の際は、自由行動だったため、注文などの現地の人たちのコミュニケーションを自分たちで行いました。主に英語を使用しましたが、なんとかコミュニケーションをとることができ、とても貴重な体験になりました。私は将来、海外で暮らしたいと考えています。今回学んだことを活かせるように今後も頑張りたいと思います。

参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国		タイ	
校内発表会		12月20日				(対象)	全校・学年
学校名	浜松城北工業高等学校	氏名	鈴木 純	学年	2		

## 1 目的・応募理由

海外経験へ行ったことが一度もなく、実際に現地へ行き、日本とは異なる文化や街並みを見たり感じたりしてタイの方々と交流をしてみたかったため。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社 11時半から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ジャトコタイ工場
  - 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

ジャトコタイランド社を見学して、タイと日本の文化の違いを感じた。また、ジャトコタイランド社の工場を実際に見学したことで、工場でどのように生産しているのか、どんな工夫がされているのかを知ることができた。タイのデザートを食べながらタイの方々と会話し、タイについてより理解を深められた。そして、タイ語での自己紹介をするなどして、コミュニケーションを直接とることができた。



### 3 感想等

今回のインターンシップを通して、静岡の企業がタイでどのように部品の生産を行っているのか、気温の高いタイで工場にどのような工夫が施されているのかなどを学ぶことができた。広大な敷地を利用して、レタス栽培以外にもブラックバスの飼育をしたり、作業の効率化のために工場の全長を長くしていたりとタイ工場ならではの魅力も多く感じる事ができた。実際に現地へ行ったことで、ジャトコタイ社の方々とお話できる機会もあつたり、タイのお菓子や飲み物を頂いたりして、タイの文化に触れるとともに学びある研修となった。



また、私は海外経験が一度もなくインターンシップ前は不安なこと、心配なことも多くあつた。けれど、タイでの4日間、班のメンバーと共に協力しながら、楽しく充実した有意義な4日間を過ごすことができた。また、タイの方々は優しく笑顔あふれる方が多く、言葉の壁があつてもとても親しみやすかつたことが印象的だつた。そして、日本とは全く異なつた環境のなかで得た経験は高校生活の中でもとても貴重な財産となつた。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ
校内発表会		令和5年12月21日		対象	全校
学校名	浜松商業高校	氏名	伊藤友梨	学年	2

## 1 目的・応募理由

海外にある企業に行き、従業員の方と触れ合うことやどのような仕事をしているのかを体験して、海外で働くことの魅力などを知る。また、働くということについても日本と海外の違いを感じたい。

応募理由は高校生のうちにインターンシップに参加できることはすごくいい経験になると思ったし、海外に興味があったから自分の将来やりたいことが少しでも見えてくるのではないかと思い応募しました。

## 2 研修内容等

最初の研修はズームでの顔合わせを行いました。静岡県内の様々な学校の同級生たちと出会い、これからこの仲間たちとインターンシップに参加するという事に胸が高まりました。7月26日の国内研修では富士市のジャトコを訪れました。私はジャトコという名前すら分からなかったけど会社の話を聞いたり、工場見学をしたりしてグローバル化が進んだ近未来な会社だということが分かりました。タイ語やタイの文化、宗教、歩き方を学びました。タイ語は英語と比べ物にならないくらい読むのも書くのも話すのも難しく苦戦しました。でも言語の幅が広がると楽しいこと、面白いことが増えることを学びました。海外研修では新鮮な体験をたくさんしました。タイのジャトコではタイ人との交流や工場見学、ねじ回し体験などを行いました。普通に観光で来たら絶対経験できないんだろうなということをたくさん学べて参加できてよかったなと感じました。タイのバンコクの観光もしました。有名な寺や建造物をたくさん間近で見て、タイ料理も食べました。日本人と衣食住の価値観が違って興味深かったです。



3日目 出発前



出国前の成田空港にて



ガイドさんの説明

### 3 感想等

静岡県高校生インターンシップはとてもいい取り組みだと思います。初対面の仲間と初めての場所に行くという事自体に意味があると思います。私達は毎日毎日同じクラスメートたちと同じ授業を受けて一緒にご飯を食べて、部活に行くという決められた毎日を過ごしています。

私はその刺激のない日々このような取り組みがあると高校という小さなコミュニティから離れて新しい自分が見つけれられると思いました。友達の幅も広がるし、自分と頑張りたいことが同じ人と繋がれることはすごくありがたいことだと思いました。参加してよかったです。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会				(対象)	全校・学年
学校名	沼津市立沼津高等学校	氏名	石塚 ことね	学年	2

## 1 目的・応募理由

私がこの高校生海外インターンシップ研修に応募させていただいた理由として、私は海外に対して言語や文化などに対して興味がありました。ですが、実際に海外を訪れるという機会に恵まれず、この募集で貴重な体験ができるということで私は海外の言語や文化に触れたいと考えました。それだけではなく、研修ということもあり様々な知識や経験を増やすことができると思い、応募させていただきました。私の目標は、この高校生海外インターンシップ研修でしかできないことをするというのを掲げて頑張りました。この目標はインターンシップ研修の実施前研修後に掲げました。具体的には仲間と積極的に交流するや研修でタイ人の方に質問するなどを掲げました。海外の方と交流することは日本でもでき、他国に行けば誰もが交流をすると思います。このような形では終わりたいと考えていました。このインターンシップ研修は、機会を頂けた静岡県の高校生のみが参加できるというこの意識を持ち、取り組みました。この仲間たちはインターンシップの応募を行わずに過ごしていたら得ることのなかった者たちです。いまでは、この瞬間を大切に、仲間と知識、経験を手に入れたいと思ひ、最終的にこの研修でしかできないことを目標にしました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社 11時半から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ジャトコタイ工場
  - 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

- ・ ジャトコタイランド社 会社紹介
- ・ 作業体験 (with タイ人スタッフ)

工場内で育てている植物の種の植え方を教えてもらい協力して種をまくなどしました。

- ・ 食堂 (with タイ人スタッフ)

食堂ではタイのご飯をいただき、タイの方々も一緒に食べました。

- ・ 作業体験 part 2 (with タイ人スタッフ)

作業練習場でタイムアタックをしたり技術面の体験を実施しました。

- ・ 製造ライン体験

- ・ 市内研修



### 3 感想等

私はこの研修を通して様々な経験や知識を頂けたと思いました。

それだけではなく、多くの仲間もでき私はこの経験を将来に活かして行きたいと思えるほど私にとって充実した時間を過ごさせていただきました。この経験で得たものは全力で活用していきたいと思ひ、これからの物事にも関連自分自身で探求していきたいと考えました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	9月11日			(対象)	学年
学校名	富士市立高等学校	氏名	村野 千映花	学年	2

## 1 目的・応募理由

国際関係の仕事や海外の文化に興味があり、高校生のうちに海外に行き、視野を広げたいと思った。ほかにも思っていたのとは違う部分や、目を背けたい現実なども実際に見てみたいと思った。そのような社会勉強としてもいい機会だと応募した。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社  
11時半から17時まで



日本のレタス工場

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ジャトコタイ工場
  - 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

二日目は jatco での研修だった。最初に従業員数、設立年などの基本情報を聞いた後、種まき、苗植え体験をした。そのあと工場を見学。女性専用ライン、たくさんの休憩室など日本とはちがうところもたくさんあった。一番驚いたのはサッカーグラウンドがあるところ。地元の人との交流も盛んらしく、とても興味深かった。研修中は食堂も利用することができ、タイらしい日本のものとは違う食堂の様子が見られた。



苗うえ体験

### 3 感想等

日本のものと似たようなものに見える工場も、細かく見ると日本とは違う点が多くあってとても面白かった。国外で活躍する日本の企業がどのような様子かを学ぶことができた。観光地の歴史的建造物だけでなく、街中でも日本との文化の違いを感じた。少し土地や気候が違うだけでも民族衣装や模様などは大きく変わり、ほかのタイ以外の国、ヨーロッパなどの地域が違う国とも比べてみたいと思った。また、治安や押し売りなど、将来海外に行った時にも直面しそうな課題にも今回の研修で触れられたので良かった。また同じような機会があったら、ぜひ参加してみたいと思う。



作業体験



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	10月2日		(対象)	全校・ <span style="border: 1px solid black;">学年</span>	
学校名	静岡雙葉高校	氏名	花崎柚葉	学年	2

## 1 目的・応募理由

海外に行った経験がなかったため、高校生のうちに海外研修に行きたいと思っていたことと機械系に興味があつたため、ジャトコさんを選ばせていただきました。また、神社やお寺に訪れたり、その歴史について調べたりするのが好きなので、タイの寺院を訪れてその背景にある歴史や当時の方々の想い、タイという国の歴史を学びたいと思い応募させていただきました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ジャトコ株式会社 11時半から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スワンナプーム空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ジャトコタイ工場
  - 3日目 バンコク市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

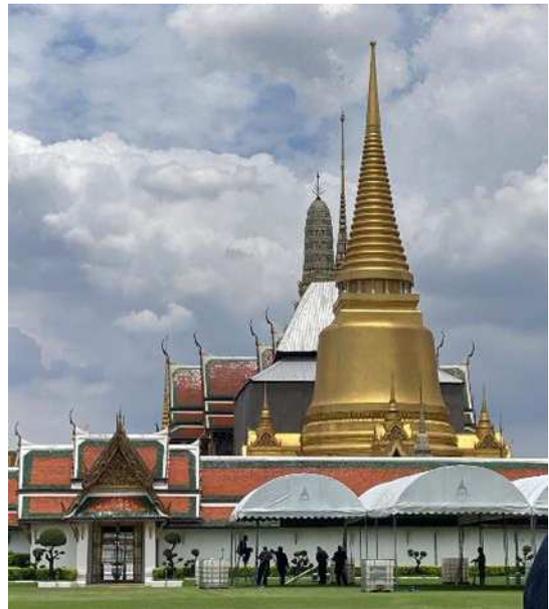
日本とは異なる文化や価値観を直接見ることでとても良い機会でした。日本との経済状況の違いや同じ仏教でありながらも宗教に対する考え方の違いを、現地の方々の話を通して学ぶことができました。ワットアルンを遠くからみるとエッフェル塔のように見えました。約170年前に建てられたことを知り、歴史と信仰の深さ



を実感できました。また、企業研修ではただ工場で働いている方々の姿を見るだけでなく、効率よく欠けることはないよう次に何をすべきか、自動運転ロボットや機械に頼ることなく、試行錯誤して取り組んでいる姿はすごいなと尊敬に思うと共に、私も真似したいなと思いました。

### 3 感想等

多様性という言葉が社会でも有名な言葉となってから、自分とは相反する考えでも受け入れなくてはならないという義務感のようなものが私自身の中にあっただけのように思います。ですが、実際に海外に行き、同じ仏教でありながらも相違点が多いことを学び実際に触れることで、違うから認めないのではなく日本や私自身とは考えが違うから面白いのだと思いました。数多くある文化や伝統、個々の価値観を知ることの大切さと知らないことを学ぶ楽しさを感じられました。そして、今回の海外研修は、海外の方の交流や日本と異なる文化や歴史、価値観を学べると同時に人としても成長させてくれる4日間になりました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	10月2日		(対象)	全校・学年	
学校名	下田高等学校	氏名	山之内 那夢	学年	2

## 1 目的・応募理由

私は、はたらくことに興味をもっています。学校で海外インターンシップの告知を聞き、海外視察や就労体験等ができる滅多にない機会だと思い応募しました。現在、ニュース等で日本の経済の低迷が報道されており、少子高齢化等の問題があります。現在のグローバル化した社会の中で静岡県や日本が今後も持続発展できるようにしていくには海外との関係がとても大切だと思います。実際に私の住んでいる南伊豆町では高齢化や人口の減少が激しく、将来産業や経済の維持が難しくなると思います。おもに自然観光が収入源で、自然に触れることのできる素晴らしい街ですが宣伝の仕方や特色を活かし切れておらず、どんなものが求められるのか研究することで町の魅力を広告し町の活力を上げたいと思っています。

## 2 研修内容等

8月21日(月)～8月23日(水)に、ヤマハ発動機インドネシア工場(YIMM)を訪問しました。工場の外観は一般的な日本の工場と変わりのない作りでした。工場内は最新鋭の機械が整備され、とても清潔感がありました。私は工場見学がはじめてでした。工場というと、騒音が激しく、独特の臭気を漂わせ、床に油や金属片が散乱した状況をイメージしていたので、きれいな環境に驚きました。従業員の方の仕事ぶりを拝見すると、落ちついて1つ1つの工程を丁寧に確認しながら作業されていました。「きれいな環境」と「確認・点検」を徹底することで事故を未然に防ぎ、従業員が安全に、安心して仕事に取り組めると思いました。また、消費者が求めているのは安心して使える製品です。当たり前のことを当たり前のようにやり続けるのは言葉では簡単に言えますが、行動に移すとなると難しいことです。ヤマハ発動機は「信頼される企業」であり続けるために、社員一同が製品に細心の注意を払いながら、同時に製品に愛情を注ぎながらモノづくりに取り組む姿勢に感動しました。現地の日本人の方は、インドネシアに派遣したことに使命感をもち、単純に「技術を伝承する」のではなく、「日本の技術でインドネシアの暮らしを豊かにしたい」、「一緒に成長していこう」という想いで仕事に取り組んでいます。例えば、インドネシアは農業が盛んな国です。そのため、湿地を走るモペットというバイクを製造しています。ヤマハ発動機は、自社の技術を駆使してインドネシアの環境に寄り添った製品をつくりあげることで現地の人々の生活を豊かにしています。私はそのような企業理念に感銘を受けました。インドネシア社員はヤマハ発動機ではたらくことに誇りをもっています。その理由として、企業側が「他者への思いやりを大切にしている」ことがあげられます。お互い言語が通じないことがしばしばあるようですが、常に身振り手振りを使って意思疎通をとり、相手の伝えたいこと理解しているそうです。さらに現地の日本人社員は、公私問わずインドネシア人社員と交流をするようです。休日は一緒にゴルフを楽しんだり、マングローブの植え込みを手伝ったりするそうです。日本人社員の「他者を知り、他者を理解する」姿勢が、インドネシア人の心を引き付けるのだと思いました。実際、工場内の雰囲気は非常に明るく、細かく身振り手振りで会話を楽しんでいて言葉の壁も感じずにスムーズに仕事を進めていました。インドネシア人が誇りをもってヤマハ発動機に尽力するのは、これまで

に現地ではたらいてきた日本人社員の努力の賜物だと感じました。インドネシア社員に限らず、ヤマハ発動機はインドネシアの人の気持ちに寄り添った取り組みをしています。インドネシアでは主にバイクが利用されています。インドネシアの国土は18000以上もの島が点在していますが、ヤマハ修理店は4000店舗(20km<sup>2</sup>に1店舗の計算)と日本の自転車修理店(26km<sup>2</sup>に1店舗の計算)に比べ身近なところにヤマハが存在します。島が多いにも関わらず現地の方に寄り添い、身近なところにヤマハを利用してもらえるのは、企業の弛まない経営戦略があるからこそだと私は思いました。何事も成功するためには努力を惜しまず励むことが重要であることを学びました。

実際に、現場ではたらくインドネシア人と交流をもちました。私がインドネシア語で挨拶をすると笑顔で挨拶を返してくれました。語学研修で習った挨拶の成果が発揮できて嬉しかったです。その後も、インドネシアの方々とは話をする場面がありましたが、言語ではうまくやり取りができず身振り手振りで辛うじて意思疎通をすることができました。海外に行ってみて感じたのは「言語が通じないことによる寂しさ」です。会話ができないことによって「どうしたらよいかわからない」ことがありました。それでもインドネシアの方々には、言語が通じなくても私たちに対して暖かく関わっていただき本当に感謝しています。私の学校にはALTが1人います。もしかしたら同じようなことを考えているかもしれないので、機会をみて関わってみたいと思います。

インドネシアは日本とは全く違った環境や人々が多く、初めてみるものばかりでした。言葉が通じないので買い物は大変でしたが優しい人が多く英語の大切さを感じました。食品など安いものが多かったですが、日用品などは日本で売っているものより高い場合もあり生活の違いを感じました。今回のインドネシア研修では自分の予想を超えるものが多くとても楽しかったです。実際に行ってみて言葉だけは伝えられない体験や社会のつながりを多く感じる事が出来ました。



### 3 感想等

今回の海外研修では人間関係の大切さについて知ることが出来ました。私が研修前に予想していた工場の雰囲気と違って社員同士の間に隔たりはなく、特に言葉が通じない日本人社員とインドネシア社員の親密な関係に驚きました。言葉が通じていないにも関わらず笑顔で細かく身振り手振りで会話を楽しんでいて言葉の壁も感じずにスムーズに仕事を進めていました。お互いの文化や言語が違っていてもお互いを尊重して協力するのは素敵なことだと感じました。物事を進めるためには「他者を思いやること」、「努力を惜しまないこと」が大切だと思いました。また、英語の重要性にも気づきました。インドネシア人は英語で日常会話ができる人がほとんどでした。国を跨げばこれほどまでに英語力に差があることに危機感を感じました。これからの授業を大切にしていきたいです。

今回のような研修は高校生にはなかなかない機会だと思えます。県からのお金やたくさんの方々へ協力してもらいとても充実した研修を行うことが出来ました。下田高校の生徒としてこの経験を生かし、周りに情報や経験を共有していきたいと思えます。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月1日		(対象)	全校・学年	
学校名	御殿場南高等学校	氏名	後藤 祐貴	学年	2

## 1 目的・応募理由

私がこの「高校生海外インターンシップ」に参加した理由といたしましては、2点あります。

1点目としては、3月26日に参加させていただいた国内インターンシップの影響です。その時に県内でも有数のグローバル化に力を入れているランドモバイルの開発が主なヤマハ発動機さんにお邪魔させていただき、そこでヤマハ発動機の企業としての魅力やその海外進出先であるインドネシアの概要を聞き、是非、インドネシアに行かせていただける機会があるのなら参加させていただきたいと思ったからです。

2点目としては、先生からの推薦です。私は日ごろから探究事業に力を入れているのですが、そのかいもあったからでしょうか学校で高校生海外インターンシップの募集をかける前、一足先に私にその企画を見せていただき、是非参加しないかというありがたいお力添えを頂いたからです。

## 2 研修内容

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

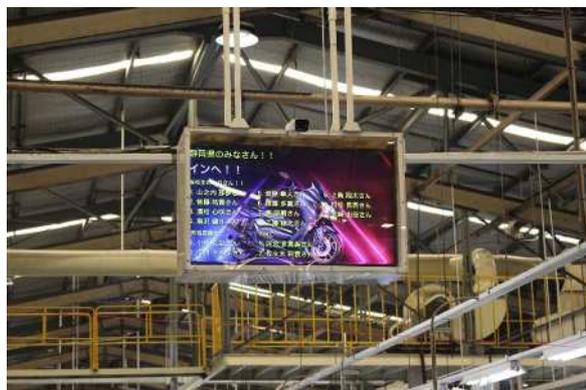
- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所  
1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ

- 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
- 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
- 4日目 日本到着

YIMM (ヤマハ インドネシア モーター マニュファクチュアリング) にて製造ライン販売拠点の見学。



### 3 感想

今回の高校生海外インターンシップに参加させていただき、インドネシアという異国にお邪魔させていただいたことで、異文化交流の機会となった為、この企画に参加しなかった場合と比べとても視野が広がりました。

県内企業の素晴らしさがこの企画を通じてさらによくわかったので、将来は県内企業に就職してバリバリ働きたいと思いました。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国		インドネシア	
校内発表会		9月29日				(対象)	全校
学校名	静岡城北高等学校		氏名	濱松 心咲		学年	2

## 1 目的・応募理由

私は小学三年生からラグビーを始め、それに伴い県内の社会人ラグビーチームであるヤマハ発動機ジュビロを応援していました。現在までの六年ほどヤマハ発動機という会社が私には少し身近に感じていました。私はグローバル科に所属しており、もともとグローバルに事業を展開している企業や海外研修について興味がありました。今回、このインターンシップ事業の募集要項を見たときに、ヤマハ発動機の名前を見て是非行かせていただきたいと思い、応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅



### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

国内研修では企業についての説明、現地に駐在していた方のお話を主に伺いました。

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

海外研修ではYIMMの工場見学駐在している方のお話、現地のディーラー見学に行きました。海外研修ではYIMMの工場見学駐在している方のお話、現地のディーラー見学に行きました。

### 3 感想等

お話を伺うだけでなく、実際に現地に行ってインドネシアにおいてのバイク需要の高さ・ヤマハ発動機にとってのインドネシア市場の重要性・駐在員の方たちの苦勞とやりがいについて自分の目で見て、感じることができました。言葉が通じない中、お仕事されている方たちの大変さもお話を通じてとてもよく理解することができました。またグローバルに事業を展開している県内企業の魅力を再確認でき、また以前にもましてヤマハ発動機という存在のことを深く理解でき、身近に感じることもできました。インドネシアの方々の国民性にも惹かれるものがありました。それはどこにいても親切に接してくださる事です。私達日本人高校生を暖かく迎え入れてくれたYIMMの現地スタッフの方や、まちなかで歩いても自分たちが知っている日本語で話しかけてくれたりしてきたことに驚いた気持ちもありましたが嬉しかったです。県内企業の魅力、インドネシアの魅力、日本の魅力を改めて感じることでできた充実した研修になりました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月21日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立科学技術高等学校	氏名	鳥沢健斗	学年	2

## 1 目的・応募理由

私が高校生海外インターンシップのプログラムに応募した理由は、2つあります。1つ目は、日本の企業が海外でどのような活躍をしているのか、実際に見てみたいからです。今年の3月にヤマハ発動機の本社で行われた海外インターンシップの国内研修で、駐在歴のある複数の方々の体験談を聞き、海外で働くというのはどのような利点があり、どのような苦勞する点があるのかということにとっても強く関心を持ちました。将来どのようにその経験が役に立つかは分かりませんが、実際に見て、他の国の生活を経験し確認してみたいと思い応募しました。2つ目は、新たな考えや発想を得たいと思ったからです。私は、自分自身の将来について考えれば考えるほど何をしたいのかが分からなくなってしまい、進路について定まらない状況にあります。私は、この海外インターンシップに参加し、ヤマハ発動機や海外で働くことについての知識を得るだけでなく、インドネシアの文化に触れ、自分にはない考え方や発想が得られるのではないかと思います、それが自身の進路決定においての何かしらの手がかりになると思い、このインターンシップに応募しました。

## 2 研修内容等

海外研修では、首都ジャカルタにある YIMM (Yamaha Indonesia Motor Manufacturing) の工場と販売店を見学しました。工場では、主に講座と見学、懇談会の3つの内容を行いました。講座では、現地に駐在する日本人スタッフの方による YIMM の概要やインドネシアでの駐在員の仕事内容、インドネシアの文化について学びました。工場見学では、鑄造や組立てなどの作業工程について見学し、人での作業を最大限効率化するためにどのような機械やロボットを使用しているかについて学びました。懇談会では、事前に行った国内研修やこれまでの見学を通して生じた疑問を質問し、日本とインドネシアの工場や働き方や文化の違いについて知ることができました。販売店での研修では、講義と見学の2つの内容を行いました。講義では、日本人スタッフと現地で働くスタッフの方から、商品企画やマーケティング、アフターサービスなどの販売に関する内容について学びました。見学では、YIMM で販売しているバイクの種類について教えていただき、また、バイクの修理を行っている様子についても見学させていただきました。また、翌日にはジャカルタの「タマン ミニ インドネシア インダ」というインドネシアの文化についてのテーマパークやインドネシア国立博物館、モスクとそこに向かい合っ建てられているジャカルタ大聖堂を見学しました。インドネシアの文化や歴史、宗教の違いについて現地のガイドさんのもとの学びました。



### 3 感想等

この海外インターシップの研修を通して、私は将来についての考え方を広げることができたと思います。まず、YIMMの工場、販売店での研修を通して、製造に関わる技術的な面では、日本と大きく異なる点はありませんでしたが、販売店ではバイクの存在が日本とは大きく異なり、日常生活に欠かせないものだとすることを身に沁みて感じることができました。その国の経済背景や日常生活について調査をし、その国に適した物を設計し生産しているということが、ヤマハ発動機のバイクが人気である秘訣なのだと、講義を聞き感じました。インドネシアでは、日常生活でバイクが使用されることが多く、その分修理台数も日本よりも多いため、修理を的確に早く行う技術が求められるというのを知りました。このことから、日本よりも修理に関する技術や経験はインドネシアの方が優れているのではないかと、個人的な見解ですが感じました。現地スタッフとの懇談会では、YIMMの工場では、日本から技術が提供されるだけではなく、インドネシアで生まれた技術や工夫があり、その技術を日本が取り入れるということもあるということを知ることができました。私は、本社のある日本の技術や考えが全てだと思っていましたが、このことを知り、国によって考え方が異なり、それにより思いつくことのなかった技術や工夫が生まれる可能性があると考え、これからの将来、企業は様々な国の拠点から考えを取り入れることで、より高度な技術や不可能だったものが可能になる技術が生まれるのではないかと感じました。

今後、企業のグローバル化が進み、日本国内に移住する外国人が増加するかもしれないということを考えると、この研修を通して得ることができた、外国で働くということの現実、英語の重要性や様々な人種が共存しているインドネシアならではの礼儀や文化、考え方は、これからの私の人生の中で役に立つものだと感じました。そして、インドネシアの研修を通して英語を話すことができるというのは、将来いかに重要なのか痛感しました。私は、英語で話すことがあまりできず、この研修に参加する前は基本的なやりとりができればいいだろうと思い、上手に話せるようになりたいという願望もありませんでした。しかし、英語でしっかり会話することができるというのは、海外に行った際にコミュニケーションを取ることができるだけでなく、色々なことへ挑戦するための土台になってくるのではないかと感じました。この研修の中で、挑戦してみたいが英語が話せないからという理由で諦めてしまったことが幾つかあり、挑戦する機会を無駄にしてしまったと感じました。自分の能力不足で貴重な機会を逃してしまうのは、とても損なことであり、自分自身の可能性を狭めてしまうと思うので、将来のために土台である英語をきちんと学ぶべきだと感じました。

この海外研修で得た経験を活かすことができるように、将来自分がどのような道に進みたいのか深く考え、これからの生活で欠かせない基盤になってくる英語などを積極的に学んでいきたいと感じました。この研修で経験したことを、更に活かせるように、色々なことに挑戦していきます。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月30日		(対象)	全校	
学校名	藤枝北高校	氏名	栗原 隼人	学年	2

## 1 目的・応募理由

私は将来機械設計士になりたいと考えています。子供の頃から電車やバイクなど動いている機械を見るのが好きで自分の思い描いたものを作ることができる機械設計に携わりたいと思いました。このインターンシップでヤマハ発動機を見学し、機械製造から販売までの流れを知ることによってこれからの進路実現に役立てられると思い応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着



ジャカルタにある Yamaha Indonesia Motor Manufacture (YIMM) で研修を行いました。工場は外から見たら小規模に見えましたが、中に入ってみるとその規模の大きさに驚きました。製造途中のオートバイや完成品がずらりと並び、海外のレベルの高さを実感しました。

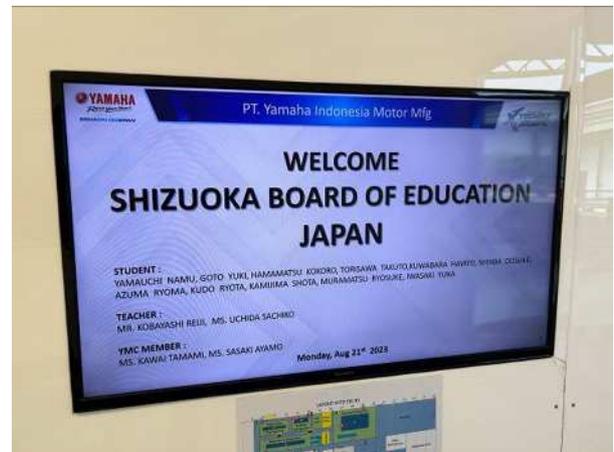
販売店の見学では店員と顧客との距離の近さが印象に残りました。事務的な距離ではなくお客様と真摯に向き合う姿からインドネシア人の優しい国民性を感じられました。また、紙のバイクの診断書ではなくタブレット端末などが普及すればもっとスムーズな修理が行えるようになると思いました。

### 3 感想等

今回のインターンシップで私の視野はとても広がりました。一つの国だけですが海外に行ったという経験はとても大きく私の人生に大きく影響する出来事だと言えます。

海外研修で最も印象に残ったことは日本人とインドネシア人との関係です。研修前は日本の企業なので日本人が重役を任せられ現地の方々があるの下で働いていると思っていましたが、実は互いに対等な関係でとても驚きました。技術面でもインドネシア人の案が採用され作業に導入されている事例もあり、学ぶこともあるのだなと感心しました。

この活動のおかげで特別な経験をさせていただきました。海外に対する不安や抵抗がなくなり、また機会があれば海外に行き違う文化に触れてみたいと思いました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	未定			(対象)	全校・学年
学校名	掛川東高校	氏名	榛葉多翼	学年	2

## 1 目的・応募理由

静岡県企業がインドネシアなどの海外でどんな活躍をしているのか知りたかったから。

海外に行ったことがなかったので、もっと海外に興味関心を持ちたいと思ったから。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅
- ・内 容：ZOOMを利用したオンライン事前研修



### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで
- ・内 容：ヤマハ発動機がどのような会社なのか、どういう経営理念を持っているのかなどヤマハ発動機についての説明  
参加メンバーとのアイスブレイキング活動

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

### 3 感想等

インドネシア研修では、多くの新たな経験と貴重な学びを得ることができました。まず、現地の文化や習慣、言語に触れることで、異なる価値観や生活様式を理解する機会が得られました。この交流を通じて、多様な視点から世界を見る重要性を実感しました。実際、僕自身この研修に行くまではインドネシアは貧しい国などの勝手なイメージを持っていたのでとても驚きました。

現地での就労体験やディーラー訪問では、駐在員さんを通じた日本とインドネシアの上手な関わりを肌で感じました。日本でうまくいったことをインドネシアに、インドネシアでうまくいったことを日本にとお互いに高め合っているところが特に良いと思いました。

研修は現地スタッフの方との交流もあり国際感覚を磨くことができました。これらの経験は、将来のキャリアにおいて非常に役立つものだったと思います。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	インドネシア	
校内発表会		12月21日			(対象)	全校・学年
学校名	静岡県立袋井高校	氏名	東 諒磨		学年	2

## 1 目的・応募理由

海外についての知見を深めるとともに、国内の企業が昨今のグローバル化に向けて具体的にどのような取り組みをして海外の国々と連携をとり活動しているのか、また日本とはニーズが違おう海外ではどのような戦略をとって運営しているのかを知り今後の人生に生かすため。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着



7月22日に行われた実施前研修では、インドネシアへ行く際の荷物や時差、通貨などに関する説明があり、その後他の研修生との自己紹介をした。7月26日に行われた国内研修では、研修生とのアイスブレイクを行った後に、インドネシアに駐在経験のある方からインドネシアでの経験を聞いたり、インドネシア語を教わったりした。

海外研修では8月21日にインドネシアの工場や販売拠点へ行き、その作業工程を見学したり、その場所で働いている日本の方やインドネシアの方から仕事で意識していることや働き甲斐などについての話をして頂いたりした。22日はジャカルタ市内の観光地を訪れインドネシアの文化や歴史などを学んだ。



### 3 感想等

国内研修ではインドネシアの文化についての話を聞いて日本との文化の違いに驚いた。その中でもインドネシアでは左手は不浄の手とされおり、基本的には左手を使ってはいけないというのは現地に行ったときに意識しないと左手を使ってしまいがちだったので大変だった。また海外研修では日本の工場とインドネシアの工場それぞれが互いに連携をとりあって切磋琢磨しながら仕事に取り組んでいるということを知って感動した。また、インドネシアのインフラとも言えるバイクを販売しているからこそそのアフターサービスの重要性を知り感銘を受けた。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月16日		(対象)	全校・ <input type="text" value="学年"/>	
学校名	静岡県立浜松東高等学校	氏名	工藤 諒大	学年	2

## 1 目的・応募理由

静岡県は製造業がとても盛んであり私の身近でもピアノやオートバイ、自動車などは日常的によく使われています。県内にある企業が様々な国へ海外進出していることを知り、実際に現地を訪れ、ものづくりの工程や現場で働く人達の雰囲気を感じ、新しい体験をして視野を広げたいと思いました。

また、それぞれの国の文化の違いや、現地の方々との交流を通して新たな発見やコミュニケーションの大切さを学び今後の将来に繋がれたらと思い応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

インドネシアの首都ジャカルタにあるYIMMで研修を行いました。想像以上に工場の規模が大きくて驚きました。工場内ではオートバイの製造ラインの見学をしました。

駐在員の方々が機械についての説明や製造の流れを映像を使って解説してくれました。また、見学し



ていて気付いたことは工場内では効率よく作業が進むように製造過程の順に機械の設置や、従業員同士のコミュニケーションが上手に取れていたことです。作業をスムーズに進めるにはとても大切なことだと思いました。

YIMM から少し離れた販売店まではバスで移動しました。販売店ではオートバイの商品企画や販売についての説明をしてもらいました。年間約 115 万台を売り上げていると聞きインドネシアの需要の多さに驚きました。感動したことは YIMM の方々が大きな電光パネルに参加メンバーの名前を一人ずつ表示して歓迎してくれたことです。自分の名前を見つけたときはとても嬉しかったです。

### 3 感想等

私にとって初めての海外は日本との文化の違いに驚くことが多くありましたが、それぞれの国の良さを発見することができました。またインドネシア人のフレンドリーな部分に触れることができ、たとえ言葉は通じなくてもコミュニケーションをとることで気持ちが通じ合えるという大切なことを学びました。また県内の他校の参加メンバー達と交流ができたことや、初めての海外で貴重な経験ができたことは忘れられない最高の思い出となりました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月21日		(対象)	全校・学年	
学校名	浜松工業高校	氏名	上島 翔大	学年	2

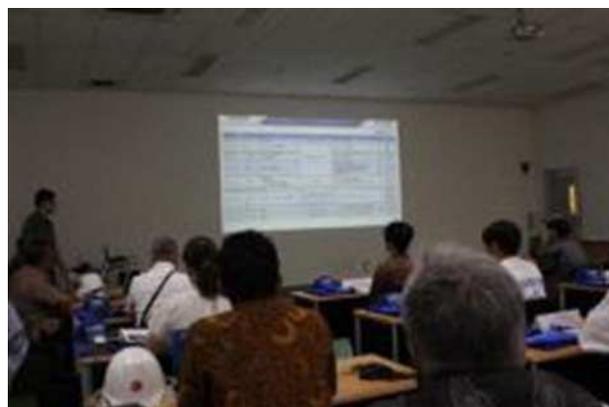
## 1 目的・応募理由

僕の目的は、日本国内の産業の空洞化がなぜ進んでしまうのかを研究するためである。近年、産業の空洞化が問題視されていることを学んだ。世界で活躍している県内企業を見て、国内の企業と海外の企業を比べ、なぜ産業の空洞化が進むのか、また、なぜ海外進出をするのかなど利点と問題点を実際に現地へ行き学び、産業の空洞化による産業の衰退などの問題を解決しなければならないと思った。また、小さいときから海外の文化や生活などに興味があり、海外を見ることで、自身の視点や物事の見方を広げ、グローバル化など自分の将来に関わってくることを学ぼうと思い、今回の研修に参加したいと思った。

## 2 研修内容等

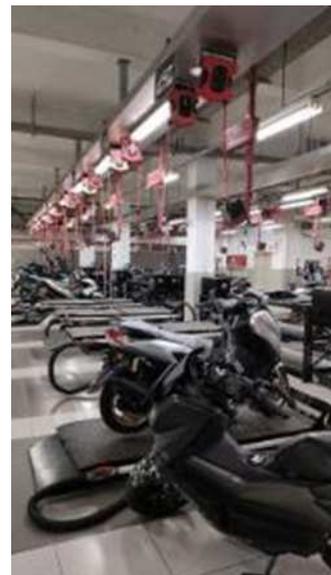
インドネシアのYAMAHA発動機では何をしているのかを知ることができた。工場と販売店にて生産やマーケティング、インドネシアの文化などを学んだ。

インドネシアのヤマハの工場では主に、バイクの生産を行っている。インドネシアは日本でいう車のようにほとんどの家の人がバイクを持っている。日本人にとってバイクは移動手段としてではなく趣味として持っている人が多いという。それに対して、インドネシアの人が指すバイクとは「スクーター」のことらしい。インドネシアの人にとってバイクは、生活するために必要な移動手段だ。その要因として日本に比べて道路が整備されていないことや、道幅が狭く渋滞も多い。これらのことからインドネシアにはバイクの方が適していると分かる。YAMAHA発動機で生産されたバイクの四分の一がインドネシアで売られ、2011年に最大の需要があった。しかし、その後、景気が悪化したため需要が減った。その後、回復しつつあったがコロナのため、また需要が減った。景気と需要は密接な関係があると分かった。



### (1) 工場について

工場内では効率的に生産するための工夫がいくつかあった。1つ目は実際に働いている従業員の意見を取り入れ、作業を行いやすくしていた。インドネシアで見つけた改善の意見を日本の工場に取り入れることもあるそうだ。2つ目は工場内に植物や滝など自然のものを置いてあるところがあった。これは働く人をリラックスさせるためらしい。様々な工夫をして働く人を思い、効率的に作業を行っていた。



### (2) 販売店について

①商品企画 みんなが欲しくなるバイクの作り方が出てから市場にでるまで3～5年かかる。

②営業 バイクを売ってお金を稼ぐ

③アフターセールス 人の命や生活を守るため、使った人が事故にあうことを防ぐため、定期点検や交換または修理など出来るようにしている。

### (3) マーケティング

(4) 駐在員さんのやりがい バイクを見る機会が多く、担当した製品を身近に感じやすいため、自社製品を見たときの達成感が大きい。

## 3 感想等

この研修では日本企業の偉大さに驚いた。中学校の社会で made in Japan は世界で人気だと学んだ。

実際に外を見たら日本のメーカーのバイクや車などを多く見た。今回の研修の目的だった産業の空洞化については、日本よりも需要の高い国で生産するために海外へ行ったことが大きな要因だと思う。正直、産業の空洞化を食い止めることは難しいと思う。しかし、日本で需要の高い工業製品があれば、それをつくる会社を誘致すれば日本が良いマーケットになるだろうと思った。自分が働くときは今よりもグローバルな世界になっていると思う。今回、参加できたこの貴重な経験を、これからの考え方や視野を広げることに生かし、将来のグローバルな社会で過ごすための糧としたい。



また、日本とインドネシアのそれぞれの文化の違いも肌で感じる事ができた。飛行機に入ってからすぐに感じた花のような独特な匂い、街中で見かけた服装、ホテルの前では小さな屋台を使った商売、トイレの形、宗教、挨拶の仕方、性格など様々な所の違いがあった。インドネシアは日本よりも涼しく過ごしやすい気候だった。インドネシアに対して今までは少し怖いイメージがあったが、人が優しく笑顔で、とても過ごしやすかった。言いたいことをうまく言えず伝わらなかったが、表情や動作でコミュニケーションをとることができた。工夫をして伝えることは大切なことだと実感した。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月20日		(対象)	全校・学年	
学校名	浜松城北工業高等学校	氏名	村松 良亮	学年	2

## 1 目的・応募理由

海外についてとても興味がありましたが、なかなか行く機会もなかったのも、とても良いチャンスだと思ったからです。また、ヤマハ発動機も就職先として視野に入れているため、国内と海外の会社の比較などもしておきたいと思ったからです。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

YIMMの概要説明や駐在員の仕事を知り、インドネシアと日本の違いを感じた。

また、工場見学（鋳造工程/加工工程/エンジン組立/車体組立）、販売店見学をすることで、会社の流れや概要を掴むことができた。インドネシア料理を食事しながら、YIMMナショナルスタッフの方と質疑応答やインドネシア語で自己紹介をするなど、インドネシアの文化についても触れることができた。



### 3 感想等

今回この海外インターンシップに参加させていただいた事で、たくさんの方の事を学ぶことができました。まず、インドネシアの人々の生活には、ヤマハ発動機のバイクが主力となって利用されており、日常生活に欠かせないものとなっている事がわかりました。このように日本にとどまらず、海外でも大いに活躍している県内企業を見ることができ、県内企業の魅力をさらに感じ、関心が高まりました。また、コミュニケーション能力の重要性がよくわかり、実際に海外インターンシップを通して、このスキルが向上したと思います。さらに、インドネシアとYIMMの方々とお話をしていくことで、世界の広さを肌で感じることができ、今までのような狭い視点ではなく、世界を広い視点で見ていきたいと感じました。

僕は、今まで海外についてはとても興味がありましたが、なかなか行く機会もなく諦めていた部分もありました。ですが、この海外インターンシップに参加することができ、そして貴重な体験と学習ができて本当に良かったです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	10月2日実施 体験学習成果報告会にて		(対象)	全校・ <input type="text" value="学年"/>	
学校名	静岡雙葉高等学校	氏名	岩崎 由佳	学年	2

## 1 目的・応募理由

県内企業というと静岡県内や周辺の地域を中心としているイメージが強く、海外でどのように受け入れられているのかをあまり知らなかったので、実際に現地を訪れて研修に行けると聞いて興味を持った。ただ他の人から話を聞いて知るよりも自分の目で見たほうが実情がよく分かるのではないかと思い、応募を決めた。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月26日（水）
- ・研修場所及び研修時間：ヤマハ発動機株式会社コミュニケーションプラザ  
13時から17時まで

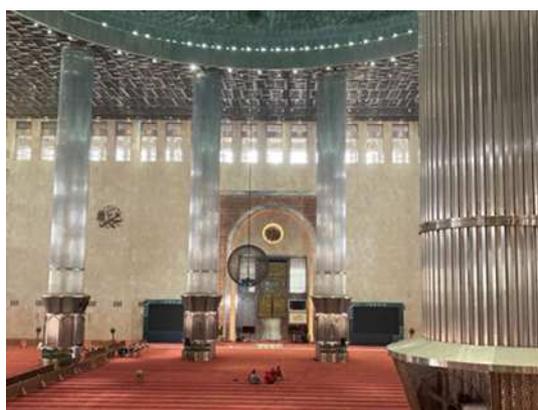
### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 ヤマハ発動機株式会社インドネシア工場  
ヤマハフラグシップショップ ジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

1日目の午前中にヤマハ発動機の工場(YIMM)を訪れ、駐在員や現地の社員の方からお話を伺った。工場の中では部品の鋳造や組み立て、塗装などの製造過程を見学することができた。午後には販売店で営業や販売を担当されている方から業務についての説明を受け、実際に販売店の中を見学した。店内には商品が展示されている他に修理やメンテナンスのための設備もあった(画像1)。



2日目にはジャカルタ市内での研修で、インドネシア国内の様々な民族の文化を展示したテーマパーク(画像2)や、歴史的な工芸品や美術品が見られるジャカルタ国立博物館(画像3)、イスラム教のモスク(画像4)、キリスト教の教会、ショッピングモールなどを訪れた。インドネシアはいくつもの島からなる国で、島ごと、また民族ごとに文化に大きな差が見られるのが特徴だという。また、インドネシアでは六つの宗教(イスラム教、カトリック、プロテスタント、ヒンズー教、仏教、儒教)が公的に認められており、いずれかを信仰することが義務付けられている。それぞれの宗教は対立することなく共存しており、仏教寺院や教会、モスクなどが集まるように建てられていることも珍しくないとのことだった。実際に私が訪れたモスクと教会も通りを挟んで並び立っていて、インドネシアの文化的、民族的な多様性を身をもって感じる事ができた。



### 3 感想等

ヤマハ発動機のインドネシア拠点の見学、社員の方々との交流、ジャカルタ市内研修などを通じ、日本とは異なる環境で、日本企業がどのように受け入れられているのかを少しずつ知ることができた。例えば日本では移動手段としては自動車が主流で、バイクはどちらかと言えば趣味の一環のような捉え方をされているのに対し、インドネシアではバイクが生活の足として人々に広く普及しており、日本よりもはるかに需要が大きい。海外に進出することの必要性を実感するとともに、自分も将来その助けになりたいと感じた。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月1日(水)		(対象)	全校・学年	
学校名	県立沼津商業高等学校	氏名	米田 吏玖	学年	2

## 1 目的・応募理由

今回、私が海外インターンシップに応募した理由は二つあります。1つ目は、私が沼津商業高等学校で「観光コミュニケーションコース」に所属し、日々観光について学んでいるからです。観光といっても日本人の方に案内する観光だけではなく、外国人観光客に対してのガイドの仕方や外国人観光客との英語でのコミュニケーションの取り方などを主に学習しています。私は以前から「海外」に対しての強い憧れを抱いていました。その中で、今回の海外インターンシップの話先生から聞き、先生の後押しもあり今回応募させていただきました。

そして2つ目は、日本の企業が実際に海外でどのように活動・運営されているのか興味があったからです。日本では最適な運営方法であっても日本とは異なる人々、文化、環境の海外でどのように現地の企業に対してアプローチしているのか、また、どのように“日本”というブランドを活用しているのかについて実際に見て、触れることで何か自分の中で感じるものがあればと思い応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日(土) 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日(月)
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日(日)から23日(水)まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着



今回の海外研修は、今後の自分の人生の中で大きな良い経験になったと思います。国内研修では、実際に『呉竹荘ホテル』で直接、ホテルについて歴史や企業信念、サービスを提供する者としての大切にしていること、心構えなど普段の生活の中では決して聞くことのできない話を聞くことができ、とても有意義な時間にすることができました。また、海外研修では、実際に日本の企業が海外でどのように活動・運営しているのかを見て、触れることができたことや、ジャカルタという日本とは異なる都市を見て回ることができ、人々や建物の雰囲気の違いなどを感じることができました。そして、現地の大学生との交流でインドネシアの問題について日本人としての私たちと、現地の人としての彼らとの問題の捉え方の違いや考え方の違いがとても印象に残っています。価値観や考え方が違う海外の人と問題解決に向けての話し合いの場は、とても新鮮であり、貴重な時間でした。

このように、日本では決して体験することのできないことを数多く体験することができました。今回の経験を忘れず、学校生活に活かしていきます。



### 3 感想等

最初に、今回私が海外インターンシップに参加すると決断をしたことは自身の人生にとって、とても大きな利益をもたらしたと思います。海外インターンシップのような機会は滅多になく、呉竹荘ホテルでの研修でホテルマンとして働くために言葉遣いや気配り、気遣いなど大切なことを学ぶことができました。また、異国の地で互いに文化を尊重し合いながら働くことの難しさを実際に見て感じることができ、とても貴重な時間を過ごすことができました。そこで、今回参加できたことは、とても光栄なことであり、これらの貴重な体験を提供してくれた現地の方をはじめ、研修のためのバスや、現地ガイドの手配、研修プランを考えてくださった呉竹荘ホテルの方々、静岡県教育委員会、学校、保護者に感謝します。今回、国内での研修と海外での研修と2回行い、自身の中で企業の運営について比較することができました。その中で、海外進出している企業は素晴らしいと思いました。日本とは異なる環境の中で日本ではか通じない“おもてなし”の精神や気遣い、気配りや言葉遣いなど当たり前になっているノウハウをもとに海外で戦っていくためには、様々な試行錯誤をしていることが分かりました。また、その姿に私は心打たれました。私も今回経験したことを外部の訪問者としてではなく、次は当事者として社会に貢献できるように日々の学校生活を一生懸命頑張りたいと思っております。

## グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月15日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立静岡高等学校	氏名	尾原一華	学年	2

### 1 目的・応募理由

私が今回留学に応募した理由は将来海外で働きたいという夢があるからです。私は幼い頃、発展途上国に住んでいた経験から、将来はその国と日本を守る外交官になりたいという夢があります。この事業では、実際に海外で働いている人と話す機会があり、彼らから将来の職業に向けて今何をすべきか、どのような視点が必要かを学べると思いました。

### 2 研修内容等

#### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

#### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日（月）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで

#### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修場所：インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ

インドネシアのホテル研修は、私にとって貴重な経験でした。この経験から、おもてなしの文化について学ぶことができました。インドネシアのホテルでのおもてなしは非常に温かく、ゲストを大切にする姿勢が印象的でした。現地スタッフの方は日本とインドネシア、2つのおもてなしの心を持っていました。日本のおもてなし文化は「まごころ」を大切にし、ゲストに対して気配りと細やかなサービスを提供します。こ



れは、お客様が特別で大切な存在であるという思いから生まれるものです。一方、インドネシアのおもてなしは、その国の陽気で明るい国民性に基づいています。スタッフはいつでも笑顔でゲストを迎え、温かさと居心地の良さを提供します。この明るさと親しみやすさは、ゲストにとってくつろぎと幸福感をもたらします。この異なる2つのアプローチが組み合わせられ、ゲストにとって豊かな体験を呉竹荘では海外でも生み出していることがわかりました。そして、おもてなしの真髄は文化や国境を超えて、人々をつなげる共通の価値観であることを学びました。



### 3 感想等

このインドネシアのホテル研修を通じて得た異文化理解と国際的な経験は、私の将来の夢である外交官としての道にも繋がると思います。外交官は異なる国々や文化と協力し、国際関係を築く重要な役割を果たすことが求められます。そのため、今回日本とインドネシアの2つのおもてなしの心や異文化コミュニケーションの能力を学び、将来の夢へ一歩近づくことが出来たと思います。この経験を大切にし、これからも将来の夢を実現するために、励みたいと思います。最後に、この事業に携わり、私たちを支えてくださった全ての方に、心より感謝を申し上げます。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立静岡商業高校	氏名	澤原 莉央	学年	2

## 1 目的・応募理由

今回、海外インターンシップに参加したいと考えたのは自分の語学力を試してみたいと考えたからです。現地に住む人々との交流を深めることでグローバルな視点や考えを身につけ、異文化理解を少しでもできる土台を作りたいと考えました。

また、日本企業の海外でのホスピタリティについて、興味を持ち学びたいと考えています。

海外での働き方、お客さまへの接し方を理解したり、多文化に直接触れたりすることで、日本では学べないものを習得したいと思いました。

この研修で、自分の夢に近づくことができるきっかけを見つけられるよう、意欲的に研修に参加していきたいです。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日（月）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所

- 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
- 2日目 インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ
  - ・ホテル研修
  - ・現地大学生との交流
- 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - ・タマンミニインドネシアインダー
  - ・イスティクラルモスク
  - ・インドネシア国立博物館
  - ・ジャカルタ大聖堂
  - ・グランドインドネシアモール
- 4日目 日本到着



### 3 感想等

はじめは期待と不安でいっぱいでしたが、いざ行ってみると不安を払拭するほどの中身の濃い研修でした。海外へ行くと必ず求められる「主体的な行動」を実践できた経験から「自分から行動することや」「自分の芯を強く持つこと」が悪いことではないと心から納得できました。

また、積極的にコミュニケーションをとったり、興味を持ったものは自ら聞いてみたり、調べるなど意欲的に行動できたと思いました。

このような意識は、この後の人生でも自分の生き方の軸となり、現在でも自分に大きな影響を与えています。

多文化についての理解・関心が深まり、さらに他国の人と交流して自分の視野を広げることができました。今回の研修において、様々な価値観を知り、それを受け入れることの大切さ、多言語を話すスキルと勇気、自分の主張を持つことなど数え切れないほどのことを学びました。

素晴らしい人たちと出会い、想像をはるかに超えた体験ができました。2日目の研修、3日目の観光を含め、教育、文化、宗教、環境、歴史など様々な角度からインドネシアを見ることができ、体験できた時間は生涯忘れることなく、私の中での宝物となりました。

将来の夢を叶えるためには英語力が不可欠であるため、英語学習を、より一層励み夢を実現するためにも語学力や知識を増やし、少しでも目標に近づくことができたらと思いました。このような素晴らしい機会を与えてくださった方々に感謝の意を表し、これからも色々なことにチャレンジしていきたいと思います。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月7日			(対象)	全校・ <input type="text" value="学年"/>
学校名	県立藤枝東高等学校	氏名	水野 美咲	学年	2

1 目的・応募理由

私は英語や人とコミュニケーションを取ることが好きだから将来CAになりたいと思っている。今回の研修でホテルの経営やサービスを実際に見て知ることによって少しでも夢に近づけたらいいなと思い応募した。中でも私は日本のおもてなし文化に興味があるので海外でもこの文化は見られるのか気になった。

2 研修内容

実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日（月）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社  
午後13時から16時まで



海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着



【ホテル研修（客室、キッチン、オフィス等の見学）、現地学生との交流】

お客さんのターゲットをインドネシア現地の人に合わせより日本の文化を感じてもらえるように工夫がされていた。着物のレンタルや右の写真のような温泉もあった。特に温泉では、必要であれば使い捨ての下着をもらうこともできインドネシアと日本のギャップに柔軟に対応している様子が見受けられた。

### 3 感想

この研修に参加する前まで私はインドネシアに対してあまり良いイメージを持っていなかった。しかし、呉竹壮の研修や市内研修で多くの人と関わる中でとっても活力のあるエネルギッシュな国だと感じるようになった。言葉がわからなくても互いを尊重し笑顔で振る舞うことは大切なのだと今回の研修を通して学んだ。これらのことを将来の夢につなげていきたいと思う。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月25日		(対象)	全校	
学校名	県立藤枝西高等学校	氏名	池上 晴菜	学年	2

1 目的・応募理由

私が今回高校生海外インターンシップ研修に参加した理由は静岡の企業が海外でどのように活躍しているかをこの目で見てみたかったからです。また海外に行って海外の様子を見てみたいと強く思ったため参加しよう決めました。

2 研修内容等

実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅
- ・研修内容：事業のガイダンス  
渡航ガイダンス  
グループ研修

国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日（月）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで
- ・研修内容：企業研究  
就労体験

海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着
- ・研修内容：就労体験  
現地の大学生との交流  
現地の観光



### 3 感想等

私が今回の高校生海外インターンシップ研修から学んだことは、英語の大切さです。インドネシアに研修に行きましたが、あちらでは英語も話す人が多くいました。乗客乗務員とも英語で受け答えを行いました。また、ビザの取得の時には英語で審査員と話す必要がありました。

このようにインドネシアでは沢山英語に触れる事が出来たと思います。自分では聞き取れず友達に頼ってしまう場面がいくつもあったので、次は私が出来るように英語の勉強に励もうと思いました。

また、自分の管理能力について考えることが出来ました。海外ではもちろん親はいなくて全部自分の責任で行動します。そのため、荷物管理、お金の管理、体調管理など全て自分や時には友達と協力して行いました。全てを完璧に出来たわけではなく、沢山の失敗をしました。

このことから、自分は日本での生活で甘えているところがいくつかあると思いました。日本では言葉は簡単に繋がり、清潔な暮らしが出来ます。しかし、海外に行くことで当たり前の違いに気づきました。海外に行くからこそ海外の美しさにも、日本の美しさも見る事が出来ました。

私は今回の研修で様々な人と会うことが出来ました。挑戦していなければ絶対出会えなかったと思っています。今回の縁を大切に、自分を高めて行こうと思います。私はこれからも挑戦し続けて、経験を重ねて行きたいです。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国		インドネシア	
校内発表会		10月 or 11月				(対象)	全校
学校名	県立島田商業高等学校	氏名	今村葉里		学年	2年	

## 1 目的・応募理由

〈目的〉

自分の将来に役立つような経験をすること。

〈応募理由〉

- ・海外、ホテル関係の仕事に興味があったから。
- ・行動力をつけたかったから。
- ・コミュニケーション能力を高めたかったから。

## 2 研修内容等

この研修では、主にホテルの内部見学をしました。ホテルのコンセプトや、宗教面で配慮している部分や、現地の人に手軽に日本を感じてもらえる工夫などを教えていただきました。また、パランピンテウと言うインドネシアの伝統的なお祝いで歓迎して頂きました。昔は主に結婚式で行われていたそうですが、今は歓迎の時でも行うそうです。



現地の大学生との交流では、現地の環境問題について一緒に考えたり、伝統的な食事を一緒にいただきました。ひとつ、ひとつ料理には意味があり、食べることを通して文化を感じることが出来ました。



最終日には現地を観光しました。博物館、モスク、教会、ショッピングモールなど沢山の場所へ行きました。初めて見るものばかりでした。

### 3 感想等

国内での事前研修では、名前しか知らなかった仲間との顔合わせは、とても緊張しました。オンラインの事前研修の自己紹介では、参加者は皆真面目でしっかりしていました。自己紹介もこだわっていて、素晴らしいな、と思いました。そして研修の詳細を聞くと実感が湧いてきて少し緊張しました。「自分が一緒に研修に行っているのか」と思ったくらいでした。しかし、国内研修で会ってみて印象が一転しました。皆とても優しく、気さくに話しかけてくれ、この人達となら頑張れそうだと思います。不安はすぐに消えました。私は人前に立つことが苦手でした。しかし、自己紹介は緊張しましたが、自信をもって行うことができました。また、現地の大学生と交流後に当たりくじを引いてしまい、代表で感想を言わなければいけない状況になった時は、非常に緊張し頭が混乱しできるのか不安でしたが、仲間のおかげで乗り越えられました。この点は私がひとつ成長した部分だと思います。



海外研修の往路では、飛行機にあれほど長時間乗り、隣の方が知らない方だったので少し不安でしたが、親しく話しかけてもらったので緊張も和らぎました。空港に着いてからも入国審査で不安を感じましたが、友達と協力して乗り越えられました。今回の研修で普段関わることのない県内の高校生達と親しくなることが出来たのも、すごく嬉しかったです。出発前は不安しかなかったのですが、仲間に助けてもらった場面が多く、一緒に行った仲間がいなかったら過ごせなかったと思います。そこもまた良い経験になったと思います。

海外研修ではホテルの種類や、有名なホテルはどこか、ホテルで働く方の一日などホテルの基礎知識や運営の工夫についても沢山知ることが出来ました。インドネシアに3カ所に呉竹荘のホテルがあり、立地場所によって現地の人向けなのか観光客(日本人)向けなのか、ターゲットが違います。今回ホテルに泊まって感じたことは、日本を感じられる工夫が沢山されていたことです。ロビーには向日葵や浴衣、日本の入浴剤や食べものが置いてあったり、1番高いグレードだと畳の部屋になっていたり、現地だと珍しい浴槽が全部屋に配置してあったりしました。現地の食事が合うか心配しましたが、朝食で日本食を出して頂いてホッとしましたし、手軽に日本食を味わえるのだなと驚きました。

宗教の面も配慮されていて、料理に使われている調味料が気になるようであれば使用していないものも用意してある事だとか、最上階に礼拝室があり宿泊しながらお祈りも出来るようになっていたり、徹底されているなど感心しました。大浴場も日本のように裸で入る習慣は無いので気になる人は使い捨ての下着が使用できたりと、負担を感じずに楽しめるようになっていたのだと思いました。日本のホテルとの違いでは、ホテルの設備・システムを保守・管理するホテルエンジニアの方がいたり飾りなどを自分達で全部造っているということでした。

私はホテルに興味があって今回の研修に参加したのですが、詳しくは知りませんでした。ホテルの裏方の仕事を知ることが出来、もっと知りたいという気持ちがより湧いてきました。モスクやショッピングモール、博物館に行ったり、皆と一緒に現地のご飯を食べたり、普段では経験できない事ができたので、とても貴重な時間になりました。海外・ホテルへの興味ももっと湧いたので、将来何か関係ある仕事に就きたいと思いました。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月7日		(対象)	全校・ <input type="text" value="学年"/>	
学校名	県立榛原高等学校	氏名	齋藤 美那	学年	2

## 1 目的・応募理由

海外に行き、文化や習慣に直接触れてみたいと思いました。

今回のインターンシップに参加することで、文化や生活習慣をただ学ぶだけではなく、県内企業が海外でどのように事業展開しているのかを知ることにもできるということに大変魅力を感じ応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土） 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日（月）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修日及び研修場所
  - 1日目 スカルノハッタ空港到着その後ホテルへ
  - 2日目 インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ
  - 3日目 ジャカルタ市内研修その後空港発、日本へ
  - 4日目 日本到着

事前研修では、インターンシップの説明や一緒に行く人たちと交流を深めました。

国内研修では、呉竹荘の事業内容や企業理念を学びました。普段接することが少ない企業の方から様々な思いや仕事内容を知ることができ、「働く」ということがどのようなことか理解を深め、社会に出るといことについて意識を高めることができました。



国外研修では、ジャカルタにあるクマンジャカルタにお邪魔し、ホテルの見学を通して、施設の裏方としての仕事を学びました。また、インドネシアの現地大学生との交流を通して、ジャカルタの問題について議論しました。そこで挙げられた問題の一つにごみの問題がありました。用水路が狭いことでごみが詰まり、洪水が起きてしまうという問題です。静岡ではゴミごとにごみ袋を分け、それを購入することでごみを捨てる意識を高めているということを紹介しました。また、インドネシアの文化や伝統料理について紹介していただいたり、食事を実際に味わうこともできました。部族の結婚式の様子を実際に見ることができたことも印象に残っています。



### 3 感想等

今まで海外に行ったことがなかったので、今回自分で実際に現地に行くことで、インターネットや本などで調べるのと、実際に自分の目で見ることには大きな違いがあることに気がつくことができました。例えば、実際にインドネシアの料理を食べたことで、インドネシアの料理において大事だとされている香辛料が実際どれだけ使われているかを体感することで、その事実を再認識することができました。さらに、小さなことかもしれませんが、非常に豊富な種類の工芸品からも、インドネシアが他民族国家であるということを感じました。



ホテルではインドネシアの文化を尊重しながらも、できるだけ日本らしさを伝えるために、様々な工夫がされていました。海外の方にも日本の文化が受け入れられていることを知り、改めて他の文化との違いを感じると共に、日本文化について誇りを持つことができました。

私は将来看護師として海外で働きたいという希望があります。今回の経験から、異なる文化について理解し、自分の文化を大切にしつつ、相手の文化も尊重することを学んだので、その視点を持ち続けていきたいと思えます。

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月21日(木)		(対象)	全校・学年	
学校名	県立磐田南高等学校	氏名	渡邊 初希	学年	2

## 1 目的・応募理由

私は、まだ将来の夢が決まっておらず、この体験が将来を考えるのにいい機会になると考えたので参加した。呉竹荘を選んだ理由は、私が人と関わるのが好きであり、英語を使ってお客さんやスタッフの人や現地の大学生と英語で交流できると考えたからだ。また、インドネシアは最近成長が著しい国であり、日本とのエネルギーの違いを感じてみたいと思ったからである。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日(土) 午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日：令和5年7月31日(月)
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後13時から16時まで

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日(日)から23日(水)まで
- ・研修場所：インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ

### ホテルの運營業務見学 厨房、温泉、スパの見学 インドネシアの大学生との交流

ホテル内の見学を通して、温泉など、日本にしかない独特な文化には、インドネシア人にも分かるように説明書きが書かれており、私が普段何にも感じてないことも、海外の人から見ると不思議で理解できないこともあるんだなと改めて実感した。



### 3 感想等

私はこの研修を通してインドネシアの文化だけでなく、日本の文化も再確認できた。呉竹荘クマンジャカルタは日本を文化を全面に出しているホテルだけあって、日本食や部屋のクオリティーがとても高かった。私が一番驚いたのは、朝食だ。インドネシア料理は辛さと独特の甘みがあり、日本料理とかなり味が違ったため、朝食が日本で食べた料理そのもので驚いた。研修のときに、訪ねてみると、食材などの生鮮食品はインドネシアで調達しているが、調味料は日本から輸入していて、呉竹荘の食へのこだわりがすごくかんじられた。また、畳の部屋や着物の体験コースなどもあり、ホテルで宿泊するだけではなく、ホテルで楽しい時間を体験して過ごすというステイケーションが楽しめるような試みもしていて、コロナ禍の需要に上手に対応しているなど感じた。

また午後の大学生との交流では、一緒にインドネシアの現代問題について考えることができ、よかった。インドネシアでは洪水が社会問題となっており、それを解決するためにダムを作るという結論に至った。しかし、ダムを作るのは大掛かりな工事であり、私のちからでどうにかできるものではないので、まずは川へのポイ捨てをやめる心構えを持つことが大事だと考えた。

インドネシアで働くひとたちは、英語が喋れるのがスタンダードであり、大体の人現地語、インドネシア語 英語の3つの言語を喋れるときいた。案内してくれたインドネシアの方も、日本に一年ほどしかいなかったのにも関わらず、流暢に日本語を操っていて、言語能力が高いなどかんじた。私は将来海外で働きたいと考えているので英語の勉強をさらにしていきたいと思った。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	11月(ロイロノートで研修レポートを発表する予定)		(対象)	1・2年生	
学校名	県立浜松西高等学校	氏名	向後 匡爵	学年	2

## 1 目的・応募理由

私は将来総合商社に努めたいと考えています。そのために国内企業の海外での事業展開の仕方に興味があったからです。日本国内での事業とは違って、海外では言語や文化、宗教の壁などいろいろな問題が生じるので、その解決策や具体的な工夫点など身をもって体感したいと思いました。

また、私は海外経験がないため今回の研修に参加することによって外国と日本の文化や習慣の違いを体感して、将来の自分の仕事に生かしていきたいと考えました。

## 2 研修内容等

### (1) 実施前研修(7/22(土) オンライン研修)

- ① 趣旨説明
- ② 海外インターンシップ説明
- ③ 海外渡航について
- ④ グループ別研修

### (2) 国内研修(7/31(月) 株式会社呉竹荘本社)

- ① 会社概要説明
- ② 事業概要説明
- ③ 企業理念・行動指針・フィロソフィー説明
- ④ 宿泊業の業務内容説明
- ⑤ インドネシアの概要説明
- ⑥ レクリエーション
- ⑦ 質疑応答

### (3) 海外就労体験(8月20日(日)～23日(水))

- ① ホテル呉竹荘クマン ジャカルタでの研修
  - a チェックイン・チェックアウトの手続き見学
  - b レストランサービスの基本の見学・実践
  - c イベント会場の説明
  - e 現地スタッフとの交流
  - f インドネシア文化体験(民族儀式の見学、食文化体験)

## ② ジャカルタ市内研修

- a インドネシア国立博物館
- b モスク
- c 大聖堂
- d インドネシア文化体験テーマパーク

## 3 感想等

今回の研修では、私が一番気になっていた国内企業の海外での事業展開について、実際に見ることができて、貴重な機会を得ることができました。日本企業の呉竹荘が、インドネシア人の食文化や伝統にあわせたサービスを提供していることが印象に残りました。その一方、日本的な「おもてなし」の気持ちで接客をし、現地で好評を博していることがわかりました。

また、実際に現地に足を運ぶことでインドネシア人の文化、宗教、考え方など日本との違いを体感することもできました。

特に、新興国の熱気を強く感じました。インドネシアの平均年齢は日本より低く、社会の中心は若者です。現地の大学生と話をし、自分で国を変えようといった考え方をしている人が多いように感じました。日本人もインドネシア人のマインドを参考にしていく必要があると思いました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月21日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立浜松工業高等学校	氏名	久米 柚嘉	学年	2

## 1 目的・応募理由

新型コロナウイルスの影響により衰退した観光産業を復活させるべく、海外から見ると日本のサービスを安く買うことができる円安の状況の現在において日本の魅力を多くの人に伝えることのできる観光業を支えるホテルでホスピタリティを学びたいと考えたため。

また、海外の方たちにも高く評価されているといわれる日本のホスピタリティ「おもてなしの心」がインドネシアではどのように評価させているのか現地に行き、お話を伺うため。

## 2 研修内容等

(1) 実施前研修 参加生徒全員に対するオンラインによる説明・事業の趣旨説明

- ・今後の全体的な研修日程についての確認
- ・プロフィールシートを使っての自己紹介
- ・国内研修についての説明

(2) 国内研修 株式会社ホテル呉竹荘本社で行う常務取締役山下様進行による説明

- ・他己紹介、レクリエーションでの交流会
- ・株式会社呉竹荘の沿革について
- ・ホテル運営に関わる総合的な業務



(3) 海外研修 インドネシアを訪れ、実際に体験する

- ・ホテル呉竹荘クマンジャカルタ館内見学
- ・インドネシア、日本文化紹介イベント  
インドネシアの伝統料理(トゥンペン)、文化(パランプンテウ)についての説明  
ビヌス大学との交流会  
インドネシアにおける環境問題についてのマッピング
- ・ジャカルタ市内研修



### 3 感想等

日本のおもてなしの心がインドネシアでも高く評価されている事を実感することができた。ホテルそのものが訪れるきっかけになるという形に魅力を感じた。私が興味を持っていたホテル経営について知ることができ、将来への期待も大きくなった。



インドネシアを訪れたからこそ気付けたことがいくつもあり、今回の研修は私にとって忘れられない経験だ。例えば現地のペットボトルはラベルが簡単に剥がせる工夫がされていないことに気づいた。そこからゴミを分別する文化があまりないのではないかと考えた。他にもトイレにトイレットペーパーがないことやバイクの3人乗りといった日本では目にする事のない光景を多く見た。

今回の研修を通して学んだことを多くの人に伝えていきたい。また研修によってできた新しい友情関係を大切にしていける。そして何よりも研修に参加させていただいたことへの感謝を忘れずサポートして下さった先生方、企業の方への恩返しをしていきたい。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	インドネシア
校内発表会		令和5年12月21日		(対象)	全校
学校名	県立浜松商業高等学校	氏名	市川彩瑛	学年	2

## 1 目的・応募理由

この海外インターンシップに応募した理由は、海外と日本の違いがどんなものなのか興味があったからです。特に、宗教に関することに興味があり、いろいろな宗教の方がいる国では、日本の企業はどのような工夫をしているのか、宗教は現地の人の生活とどのようにかかわっているのかなどの日本国内にいるとなかなか実感することのできないことを実際に海外に行き自分で感じてみたいと思い、応募しました。

## 2 研修内容等

### 実施前研修

- ・研修日時：令和5年7月22日（土）  
午前9時30分から午後0時30分まで
- ・研修場所：自宅

### 国内研修

- ・研修日時：令和5年7月31日（月）  
午後13時から16時まで
- ・研修場所：株式会社呉竹荘本社

### 海外研修

- ・研修期間：令和5年8月20日（日）から23日（水）まで
- ・研修場所：インドネシア ホテル呉竹荘クマンジャカルタ

ホテル内の見学をさせてもらいました。普段利用するときには見ることでできないフロントの裏側やキッチンの中、地下や倉庫の中まで見ることができました。イスラム教が多い国なので、礼拝室があるなどその宗教独特の施設や設備がありました。日本語を学んでいる現地の大学生との交流会も行いました。インドネシアの文化や伝統料理の紹介をしてもらい、伝統的なインドネシアの結婚式、パラン・ピントゥウを実際に目の前で実演してもらったり、伝統料理であるトゥンペンを食べました。一緒にインドネシアの社会問題である洪水や大量のゴミ、渋滞、空気汚染などの解決方法について話し合ったりもしました。特に、渋滞についての問題は深刻で

バイクがどんどん増えていることで渋滞の原因になるだけでなく、大気汚染の原因にもなっているそうです。

### 3 感想等

日本のホテルなのに、日本とは違うところが多く驚きました。イスラム教徒の方のために、アルコールを使用していない料理や調味料を用意するなど、宗教に対応しながら呉竹荘のこだわっている「食」を崩さないようにしていて、とてもすごいと思いました。交流会では、日本の食べ物に似ているインドネシア料理を出してくれたことがすごく印象的でした。似ているけど日本とは違い使っている食材にそれぞれ意味があることが面白いと感じました。インドネシアの伝統的な結婚式はペンチャック・シラットと呼ばれる武術の試合があったり、対句やコーランの朗詠など日本の結婚式とは違う部分が多く、活気があってとてもにぎやかでした。



インドネシアの武術：ペンチャック・シラット



インドネシアの社会問題について  
グループごとに解決策を発表



インドネシアのベタウィ文化の独自の結婚式



ホテル屋上にある礼拝室 パラン・ピントゥ

支援企業・団体一覧 (2016年4月～2024年3月)



● 公益財団法人 ●  
ほぞも教育研究奨励会

明産株式会社

一般社団法人  
静岡県信用金庫協会



スルガ銀行

静岡県遊技業協同組合

国際ソロプチミスト駿河

*Dream with you.*



静岡銀行



清水埠頭株式会社



清水銀行



Z-KAI Group



NTT西日本



**YAMAHA**  
*Revs Your Heart*



**Kobayashi**  
富士から世界へ 小林製作所



田子の浦埠頭株式会社



公益財団法人  
日本教育公務員弘済会  
静岡支部



Shizuoka Information Processing Center  
株式会社静岡情報処理センター

**Jatco**



清水コンテナターミナル  
株式会社



静岡新聞 SBS



東海道シグマ



net one



一般財団法人  
静岡県教職員互助組合



Shizu  
tetsu  
旅にいろどりを、人にときめきを。



KURETAKESO  
共 竹 荘

近畿日本ツーリスト



遠鉄システムサービス株式会社

〔株〕 東松光電株式会社

沼津埠頭株式会社

クオオフィル

日興製薬株式会社

富士トラック株式会社

有限会社  
メディカルアイカイ



百年住宅

pure natural  
APPLE HOUSE

浜松バス株式会社



松葉倉庫  
株式会社

静岡県高等学校長協会／静岡県高等学校等副校長・教頭会／静岡県公立高等学校事務職員協会／  
富士山麓アカデミック&サイエンスフェア実行委員会／学校関係団体（同窓会、後援会等）／  
ふじのくに応援寄附者（個人支援者）

